

堂本彰夫

エッセイ集

～我が思い 漂えるままに～

第三部

古代史の旅

(総集版)

堂本 彰夫

2019年12月

○刊行にあたって（平成 29 年 3 月）

気がつけば、あれから1年が過ぎようとしている。いろんなことがあったものである。とにかく、この論稿（エッセイ）は、この間に（正確には、最後のゼミ生達と一緒に立ち上げたホームページの運用を始めた、昨年6月から）、折に触れて書き上げたものである。

ホームページ上では、三部構成（「東シナ海眺望記」「教育への思い」「古代史の旅」）になっているが、大部になるので、それぞれ別綴にしている。今回は、それぞれの第一弾ということになる。

ちなみに、この「古代史の旅」は、私の、永遠の？心の友人I氏が、本務の傍ら、ある思いをもって読み重ねてきた、我が国古代史の関係本の読書の成果？を、ある意味I氏と一心同体である?!私堂本が、かなり身勝手に？語らせてもらうものである?!

多くの人にとっては、ほとんど興味・関心の埒外にあるものではあろうが、とにかく、この二人？の思い、語り（考察の結果）を、温かく受け止めていただければ幸いである！

堂本 彰夫

○PART 2 刊行にあたって（平成 29 年 7 月）

昨年3月に、エッセイ集「我が想い 漂えるままに～PART 1～」(三部構成)を刊行してから、早いもので7月を迎えた。本「第三部」の論稿？そのものも、他の論考(第一部、第二部)と同じように、今年1月からのものであり、一応、半年に1回、このエッセイ集を出していきたいという思いは、何とか実現できたことになる。それなりに頑張ってきたわけであるが、自分自身本当に良かったと思っている。

ところで、この「古代史の旅」は、私の、永遠の？心の友人I氏が、本務の傍ら、徐々に感触を得てきた？、ある思いをもって読み重ねてきた、我が国古代史の関係本の読書の成果？を、I氏と一心同体である?!私堂本が、本当に自由に、そして大胆に？語らせてもらっているものである?!予想通り？、悪戦苦闘の連続ではあるが、楽しみながら(ある意味「野心をもって」?)、珍説・奇説？も含め、何とかここまで突き進んできた次第である！

いずれにしても、失礼かもしれないが、やはりそれなりの予備知識がなければ、ほとんど面白くもない代物かもしれない?!とは言え、一人でも多くの人に、それなりの興味・関心あるいは新説(珍説・奇説？を越えた?)への納得・共感を有してもらえれば、望外の幸せではある！

なお、PART 1にも書かせてもらっているが、この元々の記事は、下記のホームページに随時掲載しているものであり、そちらの方の閲覧（他にも、いろんなメニューあり！）も、可能ならば、是非お願いしたいものである！

堂本 彰夫

※上記のホームページの URL 及びメール・アドレスは、下記の通りです。
いつでも、気軽に、入り込んでいただければ、嬉しい限りです！そして、出来れば、いろんな声を届けていただければ、まさに幸甚です！！いずれにしても、待っています！

ホームページの URL⇒<http://www.gakuyou.jp>

メール・アドレス ⇒gakuyou17@outlook.jp

目 次

- ① 私は、何を狙っているのか?!退職?後の趣味とだけは、言わせたくない?!
- ② 本職顔負けの、民間・在野の研究者・好事家の人々に驚嘆、否、全くの敬服?!
- ③ 「我が国の古代史」ではあっても、やはり「全世界史」の視点は必要である?!
- ④ 旅の始めではあるが、ある大胆な?仮説が頭を擡げてきた!それは何か?!
- ⑤ 地名・氏族名等の「音価(読み)」から、人(氏族)の動きが見えてくる?!
- ⑥ 本格的な旅の前に、やはり「出雲」には触れておかなければならない!?
- ⑦ 「継体(天皇)は、何者なのか?そして、果たして何を「継体」したのか?!
- ⑧ 纏向(遺跡)、加えて伊勢(遺跡)のもつ重要性!そこから、一体何が見えるか?!
- ⑨ 古墳、その種類と関係氏族は特定できるか?!前方後円墳は、何を意味するか?!
- ⑩ 建国期の日本(倭・大倭・大和)の真相は、実は「記紀」が示してはいるのだ?!
- ⑪ では、具体的な記紀編纂の基本方針とは、一体どういうものであったのか?!
- ⑫ 「記紀神話」のモチーフから見えてくるもの?!まさにそれは、建国の構図だ?!
- ⑬ 改めて、どこに考察の起点をおくべきか?!それは、やはり「倭国大乱」では?!
- ⑭ 記紀は、倭国大乱を高天原神話として描いている?!だとしたら、どのように?!
- ⑮ 倭国・邪馬台国と出雲の関係、その輪郭は、やはり明確にしておく必要あり?!
- ⑯ 改めて、人々の移動はどのように描かれ、全体的に、どこまで整合するのか?!
- ⑰ 「記紀」は、「応神」の系譜造作のため「神武」を創出した?!それは、何故か?!
- ⑱ 見えてきた南九州の影?!タケツヌミ(賀茂族)は、神武の「影」?!
- ⑲ 事代主・住吉大神こと?!天日矛(ツヌガアラシト?!)が本来の祖?!
- ⑳ 改めて全体を眺めると…壮大な構図(カラクリ?)が見えてくる?!
- ㉑ やはり変?!本当にその理解で良いのか?!が、沢山ある!どうする?!
- ㉒ 早速、気になる?!もう一つの「奴国」?!そして、その国名の関連?!
- ㉓ 「狗奴国」の所在地が決まれば、「邪馬台国」の所在地も決まる?!
- ㉔ 「出雲」と「大和」、半島→九州→近畿、その時空に交わる史実?!
- ㉕ 「邪馬台国」前後を、改めて問う?!「ヤマト」は、九州の思い出?!
- ㉖ 「奴国」は、呉人の一派?!その「安曇族」は、弥生時代の立役者?!
- ㉗ 記紀編纂には、もう一つの「基本方針」?が?!それは、一体何か?!
- ㉘ 再び、記紀の骨格を確かめる!そこから、改めて見えてくるものは?!
- ㉙ 事実!としての「倭の五王」期?!その解明が、重要な鍵となる?!
- ㉚ 結局は、九州と近畿・大和との関係を、もう一度洗い直すしかない?!

- 31 「倭の五王」が百済王族であり、最初は九州に来ていたとしたら?!
- 32 改めて、「宇佐神宮」と「応神天皇」は、どのようにつながるのか?!
- 33 百済系?!「応神」が、何故「宇佐」「宗像」「出雲」と関わるのか?!
- 34 改めて、「応神」とは誰か?!「継体」、そして「欽明」との関係は?!
- 35 「倭国」・「日本国」(の関係?)は、百済の「檀魯制」で説明できる?!
- 36 改めて、どのような(政権)移動が?!そして、最後はどこ(誰)に?!
- 37 「倭(大倭) たい国」が、その後の、倭国・日本国の鍵を握っている?!
- 38 これだけは、かなり明確になった?!それを踏まえた、新たな議論を!
- 39 「紀」の執筆者(実務史家?!)の良心 or 意地?は、信頼され得るか?!
- 40 一つの区切り?!改めて今、私は、一体どのような地平にいるのか?!
- 41 『書紀』の怪しさ・凄さ?!我が「旅」は、それにどう関われるのか?!
- 42 「記紀」を取巻く、周辺の書物群?!新たにそこから何が分かるか?!
- 43 改めて、「神」を冠した人物(期)を思料する?!そこに何ががあるのか?!
- 44 「応神」を核とした、「神(鬼)」の繋がり?!そこに見えるものは?!
- 45 大変なことを知ってしまった?!「天智」は九州(倭国)王朝の人間だった?!
- 46 その時、「倭国」は、二つ(九州と近畿)に分かれた?!(前号の続き)
- 47 二分された「倭国」ではあったが、それ以前に「ねじれ」があった?!
- 48 見えてきた?!我が国古代史解明の枠組み(「ジグソーパズル」の形)?!
- 49 「蘇我稲目」が「欽明」ならば、かなりの霧は晴れる?!果たして、それは?!
- 50 「応神」と「継体」、「欽明」、そして「天智」と「天武」が、鍵を握っている?!
- 51 「応神→欽明→天智」系と「継体→(安閑・宣化)→天武」系の相克劇を追う?!
- 52 『隋書』『唐書』に見る、二つの「倭国」?!そして「日本国」の絡み?!
- 53 「701年」の意味?!単なる「大宝律令」制定年ではない?!何故か?!
- 54 「二中歴→九州(倭国)年号」に見る「継体」の謎?!二人の「継体」?!
- 55 本当に、「応神」と「継体」は兄弟か?!だが、そこには別の真相も?!
- 56 「重要事件?」と「倭国年号」の照合から、何かが見えてくる?!
- 57 百済系?の「蘇我氏」「物部氏」が、(九州→近畿)倭国の正統な後継だった?!
- 58 「神武東征」は、九州からの2回?の近畿進出を投影させている?!
- 59 さらなる大胆な「東征仮説」?!関係氏族(勢力)のネットワークの軌跡?!
- 60 一応最初の「旅」は、これで終わる?!次なる「旅」は、オリジナル旅行?!

① 私は、何をを目指しているのか?!退職?後の趣味とだけは、言わせたくない?!

やっとな願叶って、正式に?「古代史の旅」を始めることになった。ただし、始めて数か月、これまでかなり衝動的に買い漁ってきた関係本や集めた資料の読み直しを行っているのであるが、読めば読むほど、改めて、その闇の森・謎の茂みに分け入ったような気もする。本当に、我が国の歴史、厳密には黎明期のそれは、何と厄介な代物なのであるか?!ただただ、古いからなのか?否、当然それもあるが、誰かが、それを分からないものにしてしまうとしたら、それこそ、分からないのは当然なのではないか?!どうやら、そのようでもある?!だとしたら、それは癪ではないか、というより、情けないではないか?!そんなことで、自国の、本当の歴史が分からないなんて?!

それにしても、一体誰が?何のために?そして、何よりも、どうして自国の歴史を、そのような目で見なければならぬのか?!とにかく、我々の国の始まりは、本当は、どのようにあったのか?それが、なかなか分からないのは、一体何故なのか?そして、私は、何故そのようなことに興味、いやこだわりを持ち続けているのか?こうした疑問やわだかまりの束が、私をして、私の「古代史の旅」に誘っているのでもある。

ところで、もちろん、それは、直接そのことを示した(それと断言できる)書物や考古物が、ほとんどないということから始まっている。ということは、そのことをいくら悔やんでも、嘆いても仕方がないということになる!したがって、実質的な問題は、それらを示しているかもしれない書物(「記紀」等)や考古物の解釈や関連付けの問題とならざるを得ない。しかし、それらは、それこそ人によって千差万別であり、極端に言えば、まったくその骨格、それ自体が違った形で構築されてきてもいる?!

例えば、件の「邪馬台国」を巡る論争があるが、相変わらず「九州説」か「畿内説」という、何が何でもの二者択一のシフト?が続いていることなどは、その典型である!マスコミ等が、必要以上に、扇動しているようにも思えるが、要は、そのどちらに軍配を上げるのかということではなく、それらを相互のつながりあるいは関わりという視点で、そこから出来上がる全体像を紡ぐということが、史実の解明にあたっては、重要なのではないかということになる!特に、この論争においては、そう思えてならない!

もちろん、当時「邪馬台国」と呼ばれていた国が、九州であれ畿内であれ、日本(それを記していた「魏志倭人伝」時代には、当然この呼称はなかったが)のどこかにあったことは事実であり、その所在地がどこであったかということは、特定の史実の解明という点では、必要なことではある。

だが、その所在地探しだけが最終目的となり、「あちらか、こちらか」だけの泥仕合に終始することになれば、折角の双方の情報や研究成果が、大きな史実全体の解明の骨格を形づくる契機を、みすみす逃すことにもなる?!ただし、過

去の経緯や互いの面子・意地が（人の世ではあるので）、広くあるいは深く、公私に亘ってあるであろう！

しかし、もういい加減に、そのスタンスは止めてもいいのではないだろうか?! これについては、いわゆる「東遷説」や「東征説」も絡んでくるが、まだまだ、うまく融合してはいないように思われる。私は、それらが、真の意味で融合されたなら、そこに、本当の姿が見えてくるのではないかと、秘かに期待をしているのでもある！もちろん、その確証（現段階では、予感?）は大いにある?!

なお、こうした真相の解明に関しては、いくつかの、ある意味「定説」とされていることそれ自体が、本当に「定説」と言っているのか? という疑問や疑念も、一方では多々ある?! 例えば、中国の『宋書』に記されている倭の五王のうちの「武」が、第21代の雄略天皇であるとされているが、果たして、その雄略天皇は実在の天皇なのかということも含めて、実はまだはっきりしてしないのではないかと! 倭王武とは、第29代の欽明天皇なのではないか、あるいはまた、九州王朝の、別の王ともされている!

もちろん、それらの根拠も、一応私なりにではあるが、それぞれ納得できるものではある。これは、単なる一例に過ぎないが、ことほど左様に、これまでの常識や定説とされているものが、実はまだまだ、確定がされ得てはいないということである。聖徳太子あるいは仁徳天皇等の実在、併せてその事績や陵（大仙陵等）のこと等、数え上げればきりが無い!

ということで、このように、私は我が国の古代史に興味・関心を持ってはいるが、その興味・関心、というよりは、何故それを、今始めようとしているのか、そこは、きちんと位置付けておきたい。それがないと、まさに老後の? 暇つぶしと言われても、仕方がないのである。

たとえ、そのように見えても、自分自身にだけは、言い続けていかなければならない。格好つけて言えば、それは、私なりの「使命 mission」なのである。いわゆる学術的研究であろうが、趣味・興味本位のそれであろうが、それらが、曖昧模糊とした我が国の古代史の解明につながるものであれば、それらを私なりに紡いでいこうという、ある種の無謀な思い（ひょっとしたら野望?）と言えるのかもしれない。

だが、これだけの人が、これだけの時間と労力（そして頭脳も!）を費やしているのにも拘らず、何故真実が分からないのか? 否、せめてもう少し、共有できる全体像が見えてこないのか、その辺りに、私の使命（やらなければいけないと、勝手に思っている!）があるということである。それは、あたかも、これまで私が本務として関わってきた教育の世界に対する、私なりのスタンスと同根なのでもある! せめて骨格だけは、関係者全体で、共有されていて欲しいのである!

（6月3日）

② 本職顔負けの、民間・在野の研究者・好事家の人々に驚嘆、否、全くの敬服?!

ところで、この古代史については、いわゆる専門の学者・研究者と呼ばれる人達はもちろんであるが、いわゆる民間・在野の研究者・好事家の人達が、それこそ本職顔負けの实地踏査や研究論文の刊行等を多種多様に行っている!

そのことは、これまでににおいても、一応分かっていたことではあるが、今回新たな、インターネットを通じての検索等で、その思い、否、事実そのものを大いに確認することにもなった。

かくもこのように、本職顔負け(決して誇張ではない!)の労作ができるものだ、と、ほとほと感心させられるのである。私には、とても真似できない!太刀打ちできない!そんな弱気な自分を、一方で感じながら、その人達の論文・著作物を読んでいる次第なのでもある。

もちろん、この私の作業は、ほんのちっぽけな一部に過ぎないし、実際は、私のこれからの人生をすべてかけたところで、とても追いつかないことは、悔しいことではあるが、認めないわけにはいかないであろう!

それはともかく、もちろん、こうした民間・在野の研究者・好事家の人達の労作・大作の中には、いわゆるトンデモ本や奇説・珍説の類も、多々あるようには思われる!

しかし、それはそれで、いいのではないだろうか?!学問・研究あるいは表現・出版の自由等を、ここで持ち出すつもりは毛頭ないが、それが、史実解明への何らかのヒントになったり、思わぬ副産物を生み出したりすることにでもなれば、まさに儲けものでもある!

なお、純粋な意味での研究者として、多くの人の論文・著作物に出てくる人もいる!森浩一氏等は、その代表的な人であろう。彼の専門家としての豊富な経験と蓄積された有用な知識・情報、そして何より堅実で、真摯な発言・思考態度には、やはり多くの人が信頼と敬意を払っているようである。近年亡くなられたようだが、大変残念なことである!

さて、改めて、そうした民間・在野の研究者・好事家の人達の成果・著作物であるが、私が、最も大いに魅了された関裕二氏のそれは、別途改めて紹介、というよりは、いたるところで利活用させてもらう予定なので、それ以外の幾つかの、それこそ今の若者言葉ではないが、「気になった」人・本・サイトについて、ここでは、多少恣意的ではあるが、触れておきたい。

まず、この間一番インパクトが強かったのは、やはり兼川晋氏(今、経歴をみたが、何と私の出身大学の先輩ではないか!)の『百済の王統と日本の古代<半島>と<列島>の相互越境史』(不知火書房、2009年)であろう!あるテレビ局の番組プロデューサーで、「九州古代史の会」の元事務局長とある。訳書・共著を見ると、まさに「倭国」一筋ではないか?!

とにかく、九州王朝説で、ここまで緻密に、そして大胆な仮説実証の類は、

これまで見たことがない。とにかく、「すごい！」。

百済王統が、倭国あるいは日本の王統にも深く関わっていることは、これまでの読書から分かっていたことであるが、それと九州王朝との具体的な関係までもが、本当に驚きの連続の中で、示されている。とりわけ、謎の「九州年号」とされるものからの、推論と論証の数々は、やはり、無視できない史実の存在を確信させるものである。その後の、兼川氏及びこの本の評価は、どうなっているのだろうか?!

次が、菊池秀夫 氏の『邪馬台国と狗奴国と鉄』（彩流社、2010年）であろう。今の熊本県中北部にあったと（推測？）される「狗奴国」の存在に注目され、当地方の菊池（市）と狗古智・卑狗（彦？）の関係、阿蘇地方の製鉄（褐鉄鉱）の推移、そして何より、魏志倭人伝において、「邪馬台国の南にある狗奴国」が、確かにそこ（熊本県中北部）にあったのなら、「狗奴国の北にある」のは邪馬台国となる！見事な、背理法的証明ではないか！

この他には、多少記憶が遠のいてしまったが、斎藤 忠 氏の『消された日本建国の謎』（学研パブリッシング、2013年）があろう。もちろん、前著の『あざむかれた王朝交代日本建国の謎』『盗まれた日本建国の謎』等も含めてである。かなり難解で、強引？なところもあるが、例えば「701年」の持っている意味、すなわち正式な「日本国建国」（一般には「大宝律令」で認識！）の意味を抉り出している。まさに、括目に値するものである?!

「ヤマヒト」と「ウミヒト」の相克という全体の視点も、いわゆる伽耶勢力や百済勢力といった、半島南部の動静も含めた、倭国の成立とその具体的展開という点で、実に興味深いものである。これらの著作物の評価は、どうなのだろうか?!ちなみに、同姓同名の、著名な考古学者もいらっしやるようである！

一方、ネット上では、『勘注系図』の研究（kodai.sakura.ne.jp）や「鴨着く島」（kamodoku.dee.cc）、さらには「倭国通史」（www.geocities.jp）等が挙げられよう?!

『勘注系図』の研究については、後日改めて触れることにして、「鴨着く島」は、九州南部での「賀茂（鴨）族」の発見と近畿との関係、「倭国通史」は、著者の本の概要紹介であるが、真実の（?!）「倭国」解明、その着想と内容展開には、まさに驚きの連続である！

なお、「鴨着く島」の作成者は、そこにある顔からすると、かなりご年配のようでもある?!サイト作成の力量も含めて、ほとんど脱帽である！ひょっとしたら、神業か?!世の中には、本当にすごいことを、しかも淡々と？なされている人がいるものである！

（6月5日）

③ 「我が国の古代史」ではあっても、やはり「全世界史」の視点は必要である?!

栗本慎一郎 氏の『栗本慎一郎の全世界史-経済人類学が導いた生命論としての歴史-』（技術評論社、2013年）を、まったくひよんなことから、読み返すことになった！確か、「蘇我氏」のことが書いてあったなあ？というくらいの軽い気持ちで再読したのであるが、実は、とんでもない誤解、否、完全なる無理解であった！本当に、失礼なことである！

改めて、この本は、いい意味で、とんでもない本である！タイトルとか、言い回しとか、あまり誠実さ（上品さ？）を感じさせるものではないが（ある意味彼の持ち味?!）、世界（史）を見る目が180度（否、90度位かな？）転換させられた！文明の発祥は、かの四大文明（エジプト・メソポタミア・インダス・黄河）からだというような知識（思い込まされ）が、ほとんど瓦解してしまうほどのものであった。どうしてその時は、そのように思わなかったのか?!今の私が、変わったのか?!出版年をみれば、ほんの数年前である！

ちなみに、この失礼さには、二重の意味がある。一つは、この著名な学者？の研究分野に対する誤解（無理解？）である。以前、『パンツをはいたサル』とか『パンツを脱いだサル』とか、いわゆる「パンサル」ブームを創った御仁であるが、その人が、世界史、というよりは、その本質的な部分での「文明」を語り、その文明の興亡・交わり、あるいはそこにある国や民族の移動や影響関係等を、まさに真実の世界史という形で、縦横無尽に（天衣無縫かな？）論じているのである！

怪しげなタイトルからして、まさかそういうことではないだろうと思っていたが、「経済人類学」というものが、ほんのちょっぴりであるが、分かったような気もする（本人に度突かれでもしたら困るので、そのように言うておこう！否、やはり、ほんのちょっぴりである！）。

もう一つは、まさに私の「古代史の旅」と直結するものであるが、我が国最大の謎の氏族とされる、いわゆる「蘇我氏」の出自と、その氏族が果たした役割を、彼の言う「世界史」の流れから炙り出し、その解明を行っていることに対する誤解（無理解？）である。「蘇我氏」や「秦氏」といった古代氏族が、中国大陸ないしは朝鮮半島からの渡来氏族なのではないか、ないしはそれらと密接な関係があるのではないかというような感触はあったのであるが、まさか中央アジア（ユーラシア）の出身というようなことまでは、思いも寄らなかった！

というより、彼が、そのようなことまで調べ、分かっている?!などと、とても信じられなかったのである！「ほら吹き」の類いとしか、思っていなかったのかもしれない?!非礼千万にも、程があったのである。

もちろん、その真偽は、私自身では確かめようもないが、例えば、蘇我氏の一族とされる「聖徳太子」、彼の容貌が西方系（ペルシャ系？）であったとか、10人？の人の話を聞き分けたというようなことは、今でいうバイリンガル？で、

多様な言語を理解していた、つまり渡来人ではなかったのかというようなことが、今改めて思い出されるのでもある（もちろん、そのこと自体は、いわゆる「がせネタ」かもしれないが?）。ちなみに、その聖徳太子は、実在ではなかったとされている。私も、そのように思っている。ただし、もちろん、モデルはいる?!

さて、改めて我々は、その四大文明の中で一番古いのが、確かメソポタミアであり、その最初期、つまりその基盤を創ったのはシュメール（人）と、習っているはずである?!それは、それでいいのであるが、実は、そのシュメール（人・文明）は、今の中央アジア・南シベリアから移動していったものであるということである。

その証拠・論証は、本自体に譲らなければならないが、私は、まがりなりにも先に述べたような、シュメール（人）やユダヤ（人）の匂い?や痕跡（神社の鳥居や山伏のいで立ち、菊の御紋、聖徳太子の人物像、秦氏の素顔 等々）を、別の本等から、色濃く嗅ぎ取っていた!

ただそれは、これまでの古代史解明の本道とは、かなり文脈が違い（一番は何と言っても、地理的な問題である!広くとって、極東アジアの枠組み・地理的広がりではなかった!）、気にはなっていたが、何故かリアリティのないものとなっていたのである!そこに、どこか違和感があったということでもある!

そこでもし、それが真実であるならば、何故、そうなのか?!もちろん、その中には、イエス・キリストが、日本に来ていたとかというような代物もある。事実ではないにしろ、そうしたことが語られる（流布される）、何らかの原因（史実?）があったことはまちがいないであろう!すなわち、「火のないところに、煙は立たない!」のである?!要は、その「火」とは何か、誰が熾した（持ち込んだ）かである!

今回、この栗本氏の本を、改めて読んでみると、その辺りが、ひょっとしたら、史実としてつながってくるのかもしれない?!そんなひらめきというか、直感みたいなものを感じるのである。

シュメール人の出自、ユダヤ人（アシュケナーズ派）との交わり、そして何よりも、栗本氏が覚醒を促そうとする、北方の、いわゆる「草原の道」（「絹の道：シルクロード」ではない!）、及びそこで生起したであろう多種多様な民族・文化の発生・接触・交流（もちろん過酷な興亡?!）の余波や直接の影響が、極東の最果て「日本」にも、及ばないはずはない!むしろ、それこそ多種多様に、流れ込んできたのではないか?!

栗本氏は、その当事者が、まさに「蘇我氏」だとしているが、その「蘇我氏」という括り方や名称が、この場合妥当かどうかは別にして、私のこれまでの、いわば余分な?知識・情報が、新たな認識の骨格を創る（正確には広める?）契機となるのではないかということである。

（6月18日）

④ 旅の始めではあるが、ある大胆な？仮説が頭を擡げてきた！それは何か?!

自分で言うのも烏滸がましいが、素人の「ひらめき」とは、恐ろしいものである?! 今から述べるのが、まさにそれであるが、多分結果は惨憺たるものであろうし、身の程知らずもいいところとなろう?!しかし、それでも、ひょっとしたら?!という思いが、どうしても頭を擡げてきて、それを誰かに吐露したい誘惑に駆られるのである！まさしく怖いもの知らずとは、このことであろう?!とにかく、それは、ある古代氏族（群）の国内移動（移住?）の可能性に関することである。

まず、京都府宮津市の籠（この）神社に、『勘注系図』と呼ばれる（国宝指定）、著名な古代氏族の一つ「海部氏」の系譜を伝えるものがあるが、そこに載っている、ある人物（名）が、いわゆる「魏志倭人伝」に出てくる「邪馬台国」の女王、卑弥呼や壺与、そしてまた、彼女らが送り出した「遣魏使」の人物（名）と同じなのではないかということ、そしてもう一つが、偽作とも言われてはいるが、古代最大の豪族である「物部氏」の事績・系譜を示す『先代旧事本紀』、とりわけその「尾張氏系譜」（巻五）に出てくる人物（名）と、『勘注系図』のそれとの対応関係から、「物部氏」や「尾張氏」、もちろん「海部氏」も、そして「紀氏」も含めて、それらが同族または縁戚関係にあるということ、したがって、卑弥呼や壺与等が、そのことによって特定されてくるということが、そのベースとなる！（『勘注系図』の研究：kodai.sakura.ne.jp より）

さて、それらが、もしも本当だったら、そのことだけでも、大変な解明になるわけだが、実はそこからが、私の、件の「ひらめき」ということになる！すなわち、私は、それらの氏族（の先祖?）が、ある時期、ある理由によって、九州から近畿（大和）に逢着し、そこから東海・近江・北陸等へと、拡大・拡散していったのではないかと?!もし、そうであれば、さらにこれらは、とんでもない話へと広がっていくことにもなる?! だから、恐ろしい?ということになるのである！

その同一人の話であるが、卑弥呼＝宇那比姫命＜始祖彦火明命 6 世孫：別名→日女命・天造日女命・大倭姫命・大海靈ひるめ姫命＞、その宗女壺与（台与）＝天豊姫命＜始祖 〃 8 世孫：別名→大倭姫命・竹野姫命＞といった具合である。なお、卑弥呼が尾張氏＜始祖 〃 6 世孫建田勢命の妹＞、壺与（台与）が海部氏＜始祖 〃 7 世孫建諸隅命の娘＞とされている?!そうすると、まさに一族（→宗女）である！この他にも、難升米（景初二年正使）＝（中臣）梨迹臣（なしとみ）、伊聲耆（正始四年遣使）＝梨迹臣の弟・伊世理（いせり）、都市牛利（景初二年副使）＝武諸隅命＜始祖 〃 7 世孫：別名→由碁理（ゆごり?）・卑弥呼の甥＞等が挙げられている！

なるほど、これならば、魏志の記述とも一致する?!（同じく「勘注系図」の研究より）ただし、それだけなら、ある意味、何ということはない！それらを

事実として、受け入れればよいのである！しかしながら、とにかく私は、それに、いわゆる「倭国大乱」、それに伴う国々の興亡、人々の集団移動（→移住？）ということ、繋ぎ合わせてみたいのである！

と言うのも、私は、邪馬台国自体は、九州にあったと考えている！とすれば、何故丹後・北陸あるいは東海（の氏族）が、どうしてその邪馬台国と結びつくのか、実に単純な疑問（地理的隔絶）が出てくる！しかし、もしある時期に（この場合は、倭国大乱後の邪馬台国の台頭・消滅？）、これら海部氏・尾張氏（の先祖）等が、九州から丹後・北陸あるいは東海へ、正確には大和（葛城・高尾張）を經由し、その後当地へ移動したということであれば、そこの矛盾はなくなる?! そうなると、倭国大乱の真相や、消えたとされる、その後の邪馬台国の残像が見えてくることにもなる?!果たして、どうなのか?!

ところで、何故、そのようなことを思いついたのか?!それは、近畿・大和に見え隠れする九州（勢力）の影・匂い?（「東遷説」「東征説」も含めて!）、あるいはその時期の出土物の類縁性（例えば、後の「三種の神器」と呼ばれるもの）、さらには地名群の類似性（大和への移植?）等が、そこにはある?!また、海部氏のように、海人族（九州から出たとされる「安曇族」や「住吉族」等）との関連も、移動ルートや具体的な関わり具合はよく分からないが、大きな歴史の流れ（枠組み）でみると、その時の「西から東へ」は、かなり整合性を持って受け入れられるのではないかということである?!

AD57年の後漢からの倭奴国王への金印賜受、107年の倭国王帥升等の後漢への遣使、それ以降の、70~80年間の男王の統治（何代かは不明?）、そして180年頃に「倭国大乱」が起き、最終的には、30余国を束ねた「邪馬台国」を盟主に、卑弥呼が共立され、魏に遣使したりもした。さらに、不仲であった「狗奴国」との争いの中、卑弥呼は死に、その後少しもめた後、その宗女壹与が共立された。しかし、その後、この邪馬台国、ひいては倭国全体の消息（情報）は、歴史の闇へと消えていった。再び、倭国の消息（情報）が中国の史書に登場するのは、かなり後の、5世紀に入ってからである！（→『宋書』倭の五王のこと）。

要は、『勘注系図』や『先代旧事本紀』から、海部氏や尾張氏、物部氏等は同族であり、彼らは、まずは九州で「邪馬台国」を形成し（倭国大乱）、その後ある理由で近畿に移動（「狗奴国」との闘いまたは新来集団の進出?!）、そこから大和・東海・近江・北陸等へと拡散?!単純に言えば、邪馬台国は、尾張氏、海部氏、物部氏等の国?!さらに、彼らに放逐?!されたのは、それまでの倭国盟主であった「奴国」?!

これらが、今回の私の、恐ろしい?「ひらめき」なのである！もちろん、これを証明するものは、どこにもない?!それを補うのが「記紀」となるが、神話化や歪曲・捏造等もあり、結局は「謎の4世紀」となっている！何とか、解明され得ないものか?!

（6月24日）

⑤ 地名・氏族名等の「音価（読み）」から、人（氏族）の動きが見えてくる?!

さて、ここで改めて、我が「古代史の旅」を進める前に、幾つか確認しておきたいことがある。その一つが、地名・氏族名等の、いわゆる「音価（読み）」についてであり、その類似・類縁性についてである！例えば、よく指摘されるのが、北部九州と近畿大和における地名（群）の類似・類縁性である。ちなみに、南部九州（都城地方?）にも、それが指摘されていたように思う?!

それはともかく、そこでは、地名の類似・類縁性だけでなく、山や川等の名前が、その方位、なかには順序性まで伴って近似しているということである?! たまたま一致しているのかもしれないし、もちろん時代的・年代的には、まったく該当しない代物もあるであろう?!

ということで、一方では慎重さは求められるが、やはりそこには、ある人物・氏族等の思い（「郷土意識」「同族意識」等）が、色濃く込められているのではないか?! ただし、それは、現代でも同じであり、それ自体は、さしたる疑問もない?!

ところで、問題は、例えば元の出身地の名前をそのまま使用したり、その元の地名の前に「新」をつけたりする場合であるが、それらは、ある人物・集団の移動や類縁関係を示すものであり、それらが残っている地域は、そのことを大切にしてきた、あるいはそのことは、誰しもが至極当然のように思ってきたのではないかということである?! そして、実は、その最たるものが、「ヤマト」という音価（読み）なのではないかということである?!

ただし、その「ヤマト」については、まずそれが、いわゆる「邪馬台国」の音価（読み）から出てきているものかどうか、つまり、それが「ヤマト（国）」と呼ばれていたかどうかである（もちろん、本来の使用漢字が「臺→台」であったのか、「壹→壺」であったのかということも含めて）?! ちなみに、「邪靡堆」という表記もある<『隋書』（倭→倭?）国伝>!

さらにそれは、上古音の「甲類」「乙類」の関係らしいが、「ヤマト」なのか「ヤマトウ」なのかということもある?! 尤も、『万葉集』だったかと思うが、「夜麻登」もあり、そこでの音価（読み）は、やはり「やまと」ないし「やまとう」なのか（ここには、「ヤマタイ」はない!）?! それともう一つ、倭、大倭、大和、日本、これらが、すべて「ヤマト」と表音されていた（時代があった?!）という事実もある!

いずれにしても、「ヤマト」という音価（読み）が、非常に重要で、何か「不可侵の」、あるいは「憧憬・崇敬のシンボル?」みたいなものが、その音価（読み）には込められているということである?! もし、そうであれば、それは、何故か?! 一つの推論としては、読みや使用漢字の問題はあるが、件の「邪馬台国」がその鍵を握っているのではないか?! そして、当時の政権（藤原政権）は、その事実は知っていたものの、そのことを表に出せなかった、あるいはどこかに後ろめたさがあり、そのこと自体は壮言大書できなかつたということではなかつた

か?!

要するに、「邪馬台国」は、ある時期「倭国」の盟主であり、大陸（「魏王朝」）から王権の正統性・正統性を授与された、まさしく「由緒正しい」あるいは「高貴な」、そしてまた、その当時の「栄華や誇り」を彷彿とさせる、まさにその音価（読み）を使用した人々の、言わば「ふるさとの存在」であったのではないかということである。ただし、その直系の後裔達は、残念ながら、後の政権（藤原政権）から放逐された？人々であったろうことは、その後の流れから分かることではある?!

その他、例えば、アスカ（あすかべ・かすが・かすかべ・あさか・あそか等を含む）、カモ、ソガ（すが・さが？等を含む）、ミワ、ヒノクマというような、地域・氏族名が挙げられる！もちろん、地域名と氏族名の同一は、そこの地域の者、あるいはそこの地域の出身者・縁戚者ということであり、そういう意味での、例えば（大和）飛鳥ということになるのである!?なお、この（大和）飛鳥は、日本で2番目の飛鳥と呼ばれる所であるようで、最初の飛鳥は、大阪・河内にあったらしい?!しかも、他にも、「飛鳥（あすか）」と呼ばれる地域は、多々あるようである！

このように、この「アスカ」という言葉（表音）自体は、全国各地に散らばっており、「ソガ」についても、蘇我・曾我・素鷲・宗我、すが（須賀・菅）、さが（嵯峨・佐嘉？）等、これまた、使用漢字や読みが多少変形しているが、同根、同族の人々（氏族）が、それらを使用していたものと見なされるのである?!なお、それらの土地は、蘇我氏、東漢氏、秦氏等の、いわゆる渡来系氏族の集積地ということでもあるようである?!ということは、当然彼らが、その土地土地に移動していった（入植？）ということに他ならない?!

ちなみに、④で紹介した栗本慎一郎氏は、アスカという音があつて、それに特別に「聖なる」という意味を乗せるために、飛ぶ鳥を特別に聖なるものと見る思想から、「飛鳥」と表記した。大切なのは、あくまで「音」であつて、表記の方はかなりご都合的とする。「ヤマ」は、もともと東イラン高原から、仏教の広がる中央アジア、ユーラシアの人にとって霊界の主あるいは霊界をあらわす言葉とする（「閻魔えんまともなる?!」。「ト」は、古日本語で場所（タ行、サ行の一字で場所を表す語は、ユーラシアのあちこちにある。中国語の、「版図」の「図」もそう!）。

つまり、ヤマトとは、「良い霊の場」あるいは「祖霊の地」！本源地は、太陽信仰・ミトラ教のパルティア（安息国）・アスカ！ちなみに、アスカ人はエシュク人、つまりスキタイ人、一般にはサカ人とされているとしている！非常に難解だが、かなり魅力ある説明でもある?!個々の真偽は、ここでは何とも言えないが、もしもこれらが、（大和）飛鳥、あるいは蘇我氏と繋がるものであるのなら、さらに大変な史実となること必定である?!とにかく、音価（読み）は、重要な視点（鍵）なのである！（6月24日）

⑥ 本格的な旅の前に、やはり「出雲」には触れておかなければならない!?

これまで、私の「古代史の旅」の本格的な始まりの前に、いくつか、その前奏的な部分?を書き記してきた。もちろん、果たして「前奏」になっているのかどうかは、かなり怪しいかもしれない!

それはともかく、やはり、そういうことであれば、まさに古代史の最大の謎、「出雲」のことについても、ここでは、多少は触れておかなければならないであろう!端的に言えば、「出雲」のことが分かれば、我が国の古代史、少なくともその骨格は、確実に見えてくる(と思われる?)からである!

とは言え、このテーマ(課題)は実に深い!というか、重い?!何故なら、このテーマ(課題)は、いわゆる天皇家(現皇室?!)の歴史、過去のいきさつを、ある意味、白日の下に晒す契機を孕んでいるかもしれないからである?!ただし、もしそれが真実であるならば、それはそれで仕方がないし、改めて、その真実を真摯に受け止めて、これからを考えて(生きて?)いくしかないであろう?!事実は事実として、正しく認識されなければならないのである!しかも、我々の認識の問題とは別に、歴史は、そうした事実の積み重ねの上に(いいかどうかは別として!)、厳然と成り立っているのでもある!

さて、ここで言う「出雲」とは、現在の島根県東部一帯の、ある限定された地域のみを指しているのではない!一番分かり易い言い方をすれば(尤も、多少なりとも分かっている?人にとっては、ということにはなる?!)、「記紀」に出てくる「出雲の国譲り」の、すなわち「国を譲った(譲らされた?!)」側の国(勢力・氏族)のことである!さらに厳密に言うと、その国(勢力・氏族)が統治していた、全国各地の国(勢力・氏族)、その総体のことを指している!多分、それは、「豊葦原中つ国」と呼ばれていた国・地域(群)のことであろう?!

ちなみに、それは、素戔嗚尊、その後裔(子ども?)とされる「大国主命(大貴日命)」、その大和での名前?「大物主」を頭領とする、いわゆる「出雲(神)族」と呼ばれる人たちの国・勢力範囲のことでもある!だが、残念ながら、その版図が、明確に分かっているわけではない!そこが、別な意味で、かなりもどかしいところではある?!

ところで、これについては、今のところ私が一番推奨したい、関裕二氏の所論を、援用させていただくことにしたい!まず、彼によれば、「記紀」が描いた神話や史実?の世界は、ヤマト建国期(2~3世紀)における、国内外の各部族集団・人の動きと、それらが創り出した現実世界を起点として描かれ(そこを、編纂当時の政権担当者は、事実上の「建国」の時期と見なしていた?!)、そこから、その編纂当時の時期(8世紀前半)までの、部族集団や人の動きを、ある意味自分達の都合や言い分で書き記し、嘘や捏造を巧みに駆使しながらも、全体としては、真実の流れを語っているということである。

具体的には、編纂当時の権力者藤原氏(とりわけ不比等)が、自家の都合や言

い分を絡ませながら、当時の天皇であった（とされている？）持統（天皇）を頂点とした、まさに「天照大神」から続く、万世一系の天皇の支配する国の建国譚、つまり、その正統性や正当性を示すものとして、それらを著しているということである。とりわけ、『日本書紀』は、そのための史書でもあるということである?!

ただし、ここまでは、ある意味、多くの人が主張していることではあるようである?!

しかし、彼の場合は、その建国の真相（特に、神話という形で示されている部分!）を、幾つかの部族集団・人の動き・関わりとして、解明しているのである。それが、ここで言う「出雲（氏→族?）」であり、大和纏向（祭政都市）を主導したとされる「吉備（氏）」あるいは、その陰の大立者と目される? 「尾張（氏）」なのであるが、そこに、大和の出雲系、例えば倭（やまと）氏とか三輪氏、さらには賀茂氏、葛城氏等が絡んでくるのである。

なお、三輪氏あるいは大三輪（大神）氏は、もともとは北部九州に居たとされてもいるが、それと「宇佐氏（八満宮）」／宮司・「大神（おおが）氏、さらには「宗像氏（神社）」等との関係も見逃せないであろう!?

とにかく、「出雲」は、古代史最大の謎なのである! 記紀神話とは異なる「出雲神話」を載せる『出雲国風土記』、さらには「出雲国造神賀詞（いづものくにのみやつこのかむよごと）」等は、まさにそれらを示す証拠品でもある?!

繰り返しになるが、古墳時代以前、出雲地方はもちろんであるが、古大和（三輪地方）にも出雲（神）族がいたとされており、その一族「（意）富^{おお}家→和珥氏?」によると（「富家家伝」）、第9代天皇（開化）までは、（意）富家系と倭直系の王朝が交代で続き、神武～第3代は倭直系、第5～6代は出雲（（意）富^{おお}家?）系、第7代目孝霊は倭直系、第8～9代は（意）富家系だったという?!

だとしたら、第10代崇神と第8～9代は富家系の関係があり、記紀における初代神武と饒速日^{にぎはやひ}及びトミ（鳥見→富?）の長脛^{ながすね}彦の逸話が、それを暗示（投影）しているのかもしれない?! 一般には、第2代綏靖～第9代開化までは実在とはされていないが（→「欠史8代」）、果たして、その実体は?!

いずれにしても、ある意味「出雲（神）」は、現皇室の原郷なのではないか?! 現在も続けられているという、出雲大社の秘儀（「夜逃げ神事」等）は、そのことを示している?! だが、やはり、これだけでは何とも言えない?!

とにかく、ヤマト黎明期における「出雲」の存在。記紀においては、「国譲り」をさせられ、出雲大社という、ある意味「幽界」に閉じ込められている?! （素戔鳴尊）、大国主等の「出雲（神）」。

考古学的には、荒神谷、加茂岩倉の各遺跡（出土物もすごい!）、さらには、西谷墳墓群（出雲特有の「四隅突出型墳墓」）等の遺跡も、見逃せない!!

そして、何より有名な「神在月」には、出雲（神）の栄光? が、それこそ幽かではあるが、感じられるのではないだろうか?!

（7月28日）

⑦ 「継体（天皇）」は、何者なのか？そして、果たして何を「継体」したのか？!

ところで、第26代天皇「継体」が、我が国の古代史解明において、重要な（臭い？）人物の一人であることは、他言を俟たないであろう。尤も、彼を、「記紀」が示す、北陸（越前）から担ぎ出された、応神（天皇）5世孫で、やっとの思いで、晩年、大和の地に入ることができ、そしてそこで正式な主権者（大王→天皇）となった人物であるということだけでは、ここで言う「重要な（臭い？）」という意味合いは、半減する！

と言うのも、8世紀に入って、天智天皇の子、大友皇子の曾孫とされる文人・「淡海三船」によって考案された、いわゆる「漢風諡号」（死後に贈られる中国風の名前。それぞれの名前に、何らかの史的役割が投影？されているとされる?!もちろん「和風諡号」もある!）による、「継体」という名前の意味合いが、十分に（別の文脈で?!）斟酌されていないと、単純な理解に留まるという意味で、である！

これについては、通説では、第15代天皇「応神」の、まさに「5世孫」という、血統的には、かろうじての皇位継承権者ではあるが、一応、その王統を継承することができたということで、「継体」という名が与えられていると理解されているようである。

しかし、例えば、前に紹介した（本シリーズ②）、兼川晋氏の本で実証されている?!「九州年号」の实在、そしてその創始（者？）の年号ではないかとされる「継体（年号）」と絡ませてみると、ひょっとしたら、いわゆる「九州王朝」の後継者（→「継体」）という意味合いが炙り出されてくるかもしれないということである!?

だとしたら、だからこそ、大和に入るまでに、幾多の紆余曲折（大和周辺の各地に、都を転々とさせている!）があったのではないかという推察も、俄然現実味を帯びてくるのである?!つまり、他の大和の有力豪族が、彼の入りを、なかなか認めなかったというようなことも指摘されているが、背景には、そのような事情があったとすれば、それは、かなりの説得力が出てくるのではないかということである?!ただし、一応外部から入ってくるわけであるから、それなりの時間が、かかったということもあろうが?!

いずれにしても、もしそうであれば、別に新たな問題も発生してくる?!例えば、九州王統を引き継いだ（実際は、無理やり引き継いだ、つまり篡奪した?!）彼が、何故、北陸、あるいは近江の出身なのかである（父親は、琵琶湖北岸の彦主人王・息長氏の後裔）!!しかも、引き継いだ王統、すなわち、それが「応神王統」だとすると、その応神（王統）は、（元々は?）他ならぬ九州王朝（ひょっとすると、「邪馬台国」王統?!）と結びつくものではなかったのか、ということにもなってくる?!

もちろん、両者、つまり九州年号の創始者であった「継体」と、記紀に示されている「継体（男大迹王・男弟王）」は、全くの別人であり、記紀編纂者（時の

政権)が、その両者を、「継体」という暗号で結びつけたとも考えられるであろう?!とは言え、全くの別人ではなく、何らかの類縁は有していたのではないか?!例えば、後に誰かの入り婿となって、そちらの王統をも継承したとかである?!そうでなければ、まったくの創り話となるからである?!やはり、それは有り得ない?!とにかく、この応神王統や継体王統については(も?)、多くの、そして大きな謎が隠されていることは確かなのである?!

そんな中で、かの有名な神功皇后(息長帯日女尊)や武内宿禰、あるいは神功皇后の夫とされる仲哀天皇(北部九州で頓死?!)等のことが、その前触れ?として出てくるが、そこにある幾つかの謎も含めて、我が国の歴史、その成り立ちに大きく関わっているであろう「百濟」や「扶余」(→高句麗)、そしてそれ以前からの関係である「伽耶」(韓半島南部地域)という、外国?の地域が絡んでいることは、現時点においても、かなりの真実性があるように思われる?!

これらについても、これから徐々に考察していくことになると思うが(本当に出来るのか、かなりの不安はあるが?!)、要するに、この応神(天皇)から継体(天皇)、そして実は、その継体(天皇)の正嫡とされている欽明(天皇)へと至るあたりが、一つの重要な(臭い?)時期なのではないかということでもある?!

例えば、「継体」は、前出の兼川氏によれば、百濟王統(仇台系)の出で、昆支こんき(倭王旨)の弟の軍君こにきし(男弟王)、そして応神(のモデル?)が、その兄であり、百濟宗家(沸流系)の「兄王(滕?)」。さらには、例の「倭の五王/讚・珍・濟・興・武」(『宋書』倭(倭?)国伝)も、実は、九州王朝に入り込んだ(婿入りした?)、彼ら百濟王統の系列だということもある?!

また、同じようではあるが、応神(天皇)と継体(天皇)は百濟宗家(沸流系百濟)の兄弟王子で、兄応神(天皇)の死後、弟継体(天皇)が、その王統を継いだが、実は欽明(天皇)は応神(天皇)の子で、継体(天皇)の死後、その嫡子(安閑・宣化→従兄弟関係?)を排除し(→「辛亥のクーデター」と呼ばれる?!)、政権の座に就いたという解釈もある?!私にとっては、これらはみな、真実を理解する上で、かなり魅力的な説と思われるわけである!

ちなみに、その後の王権(天皇家)は、その欽明(天皇)の血統ということであり、そこから蘇我系(→上宮王家)と非蘇我系に分かれ、かの有名な乙巳の変(→大化の改新)において、非蘇我系の中大兄皇子(→天智天皇)と中臣鎌足(→藤原氏)が蘇我本宗家を倒し、その後蘇我系の天武(天皇)が、壬申の乱において政権を取り返したが、その皇后持統(天智の娘!→天皇?)の代から、藤原氏(不比等→百濟系?)が実権を握り、以来、天照大神(持統?)を始祖とする、万世一系の天皇家が連綿と続いてきたとされるのである?!

平安京に遷都した、後の桓武(天皇)の母親が百濟系であったことはつとに有名であるが、天皇家自体が、それ以前から百濟王統の血脈を有していたことは、確かなのではないだろうか?!

(8月27日)

⑧ 纏向（遺跡）、加えて伊勢（遺跡）のもつ重要性！そこから、一体何が見えるか?!

ここで、奈良県桜井市在の纏向（遺跡）、加えて滋賀県守山市在の伊勢（遺跡）のもつ重要性を確認しておきたい。何故なら、多分それらを残していった部族・勢力は、後のヤマト王権（→大和朝廷）、つまり日本建国の初期の中心部族・氏族？となっていたことは、ほぼ間違いないと言えそうだからである！

ただし、これは、これから何度でも登場してもらおう、関裕二氏の解明によるところ大、と言うか、ほとんどそれに依拠するものではある！まさに、私にとっては、まったく納得させられるものばかりなのである！だが、もちろん、その実態や成り立ち、とりわけその関係性の解明には、まだまだ全面的な合意があるわけではないようではある?!

とにかく、まず3世紀後半以降に、いわゆる定型化した「前方後円墳」が出現してくるとされるが、これがヤマト王権の象徴であることは、多くの人の認めるところではあろう?!!すなわち、この前方後円墳が、いくつかの地域（部族・一族）の埋葬文化の寄せ集めであり、ヤマト纏向に多くの人々が集まり、緩やかな連合体を形成していった、その一つの形（証拠）とされるということである。なお、その前段階に、纏向型前方後円墳と呼ばれるものがあり、その原型は、岡山県吉備の楯築墳丘墓とされている！したがって、この間のリーダー格は、吉備だった?!

いずれにしても、その前方後円墳が、3世紀後半、半ば忽然と、奈良県の三輪山山麓・纏向に、姿を現すのである！果たしてそこから、何が見えるのか?!!ちなみに、その寄せ集めの要素とは、具体的には、「葺石」が山陰地方の「四隅突出型墳丘墓」の「貼石」、墳丘上に並べた「特殊器台型土器」と「特殊壺型土器」が吉備、「濠」が近畿地方の「方形周溝墓」の「周溝」、豪華な「副葬品」は北部九州の影響とされている！

ところで、実は、この前方後円墳より先に出現していたのは、前方後方墳であった?!!その前身？である「方形周溝墓」の代表的なものが、この、滋賀県守山市の伊勢遺跡にあるのであるが、ヤマト建国の直前、近江と伊勢湾沿岸を中心とした東海地方（尾張周辺）が急速に発展していた！そして、どうやら丹波（丹後を含む）から、大量の鉄器や先進の文物が、近江と尾張に流れ込んでいた！

何故、丹波・丹後と近江、尾張がつながっていたのか。それは、弥生時代後期に出雲が発展していき、上記の「四隅突出型墳丘墓」という巨大な墳丘墓が山陰地方に広がっていくが、その過程で、北陸地方にも「四隅突出型墳丘墓」が伝播していく。だが、その間の但馬・丹波にかけては、この埋葬文化が見られず、出雲から越後にかけての諸勢力は、互いに遠交近攻策を採り、出雲は越前や越中と、丹波・丹後は越後と手をつないだ！

この主導権争いの中で、丹波・丹後は、朝鮮半島との間に独自の航路を開拓し、先進の文物を取り入れるとともに、内陸部の近江や東海、そしてヤマトと

も連携し、富を分散していた?!そこで、それと連動して、琵琶湖沿岸の近江に、弥生時代を代表する巨大環濠集落が出現する。それが、この伊勢遺跡と考えられるが、同遺跡は、弥生時代後期の倭国大乱の時代のもので、佐賀県の吉野ヶ里遺跡や奈良県の唐古・鍵遺跡と並ぶ、弥生時代最大級の環濠集落とされる。だが、あまり知られてはいない!

しかし、ここで注目されるのは、近畿地方の巨大環濠集落が弥生時代中期に解体され、消えてしまったが、その直後に、この巨大伊勢遺跡が出現しているということ、そして、その後ヤマトに纏向遺跡が出現した頃、一気に衰弱しているということである!しかも、それは、ヤマトに滅ぼされたからではなく、むしろその地に居た人々が、ヤマト建国のために、そちらの方に移動していったからではないかというのである!

そこに、九州・出雲勢力と利害の異なってきた吉備勢力が参入してきて、東国勢力を抱き込み、大同団結し、ヤマト建国を成した、そういうことでなかったのか、というのである?!詳しくは、ここでは紹介し切れないが、まさに首肯されるのである!

加えて、そうした人々の動き(土器の移動)として、3世紀前半(倭国大乱後?)のそれを示したものがある?!(松本武彦『日本の歴史—列島創世記』、小学館)。それによると、尾張や近江辺りから、九州に向かったものも多く、その背景としては、丹波・丹後が、北部九州の虎の威を借りた出雲と敵対し、遠交近攻策を採り、越後と結ばれるだけでなく、近江や尾張とつながったのではないか?!

その中心地が伊勢(遺跡)であり、そこ近江に前方後方墳が生まれたということではなかったのかというのである?!特徴として挙げられるのは、もちろんそこは、最初期の前方後方墳の出現地域であったこと、近畿と東海の銅鐸が集められ、埋納されていたこと等であるが、この近江が、一帯の中心的存在だったということでもある!

最期に、改めて興味深いのは、そこにあった「独立棟持柱」建物であり、後の伊勢神宮と同じ形式ではないかともされていることである!これは、その後の展開からも、重要な何かを示していることは明らかである?!そしてまた、その「伊勢」という名前自体も、東海の伊勢湾地方との関連性も浮かび上がらせるし、さらにそれと連動させるならば、北部九州の伊都(イト・イツ→イセ・イソ)とのつながりも考えられる?!

想像を逞しくすれば、多分?そこを含めた、北部九州地域の勢力(の一部)が、新興の邪馬台国に駆逐され(→倭国大乱?!)、新天地を求めて行き着いた所が、それらの地域だったのではないか?!その後勢力を蓄え、結集し、ヤマト建国を行った?!彼らは、多分海人族であり、舟を利用すれば、至る所に行き着けた!かの「海神」の活躍は、記紀の中でも、嫌と言うほど示されているのではないか?!

(8月30日)

⑨ 古墳、その種類と関係氏族は特定できるか?!前方後円墳は、何を意味するか?!

次に確認しておきたいことは、先の⑧で述べた、いわゆる「古墳」それ自体についてである。もちろん、「古墳」と言えば、「前方後円墳」が、つとに有名であるが、「前方後方墳」「円墳」「方墳」、珍しいところでは、山陰・出雲で盛行した「四隅突出型墳丘墓（方墳?）」といったものもあるわけである！一応これらは、「古墳」ということであるので、「墳墓」、つまり誰か（単身とは限らない!）の墓ということではある。副葬品等は、まさにその個人の遺品的なものであるう！

ただし、そこは、単に死者を葬った場所というだけではなく、死者ないしはその部族・一族の威容を示す、さらには、そこで持続的な「祖霊祭祀」を行うというような場所（聖地・霊場）でもあった、ということである！有名なのは、面積では世界第一位とされる「大仙古墳」（伝仁徳天皇陵）、あるいは最初期の「箸墓＝箸中山古墳（倭迹迹日百襲姫命陵?!）」であろう！後者の墳墓は、邪馬台国畿内説が「卑弥呼の墓」と主張するものであるが、私は、それに与するものでないことは、以前に述べた通りである！

ところで、その古墳であるが、やはり墳墓であるわけであるので、いわゆる親族・一族においては、その形状（機能とまでは言わないが）においては、それぞれ特有のものがあり、それらは、基本的には、どんなに時間が経過しようとも、ほとんど変わらないのではないか（もちろん流行的な要素はあるであろうが）?!とすることは、結果として、それらは、ある一族・氏族特有の形状を示すということになるであろう?!それが、先に挙げた幾つかの古墳の種類という形で、残っているということではないか?!

だが、もちろん、その大きさとか、その中に入れてある「副葬品」の違いによって、地位あるいは身分等が異なっているであろう?!しかし、その墳墓の形状自体は、それこそ自分達の一族・氏族の、ある種の「アイデンティティ」を示すという点では、まさに普遍的なものでしょう！現在でも、例えば沖縄地方に残っている「亀甲墓」等は、その典型でもある?!

それはともかく、実は、既にそういう観点から、その対応関係が、徐々に明らかにはされているようである?!例えば、「前方後円墳」はヤマト王権のシンボル、「前方後方墳」は「出雲」、あるいは「近江・東海」勢力（→尾張氏、息長氏等）のシンボル、といった具合である！ただし、前者は、前にも述べたように、「吉備」の方形周溝墓が原型ではあった。その基本は、多分「円墳」であろう?!

ちなみに、その「円墳」が吉備（→物部氏?）、「方墳」が出雲（→蘇我氏）ということにもなっていくようであるが、それと、同じ山陰・出雲で盛行した「四隅突出型墳丘墓（方墳?）」がどうつながっていくのか、高句麗とのつながりも指摘されているが、今のところ、私には、よく整理がつかない?!しかも、それと、いわゆる出雲（族）が、どうつながるかも?!

さて、そうした状況の中で、改めて、「前方後円墳」は、それ一つで、一族・氏族単独の墳墓なのかどうか？それとも、いわゆる「円墳」と「方墳」の「合体墓」なのではないかということが、ここでは関心をもたれるわけである！現時点では、ある種の運命共同体的な墳墓であり、その擬制的親族集団化を示すものではないかということである!?

その証拠（根拠）が、「円墳」と「方墳」の合体、そこにおける、例えば「高坏」・「特殊器台→埴輪」「貼石」「周濠」、そして「副葬品」等の、言わば関係氏族・一族（集団）の墓制の中核的要素の共存・融合性があり、したがって、まさにそれらが合成・合体されているのではないかということなのである?!もちろん、一方の「前方後方墳」も、ある意味、このような観点でみると、一つの合体墓と言えるのではないか?!

なお、「前方後円墳」は、7世紀前半の、「物部氏」の没落とともに、消滅していくという説もあるようであるが、それは、単なる偶然なのか？あるいは大いに関係があるのか？

もし、関係があるのならば、「前方後円墳」の出現は、まさに「物部氏」と直接つながっており（「物部氏」主導・中心で、その墳墓は出来上がったもの?!）、墳墓自体は、一番「吉備」の要素が強いとされているので（「高坏」「特殊器台」<→埴輪>等）、その物部氏は、「吉備」（そこもある時期からのものであり、それ以前に彼らは、どこからかやって来た?!）の出だということにもなる?!

そうなると、少なくとも初期ヤマト王権は、「吉備」を中心として、出雲（族）→蘇我氏、尾張氏等によって、樹立されたものではないのか！いわゆる「大和三山」と言われるものがあるが、その「畝傍山」…蘇我氏（出雲系）・男性・八尺瓊勾玉（忌部氏?）／「耳成山」…物部氏・女性・八咫鏡（石凝姥いしこりどめ命?）／「(天)香久山」…尾張氏・女性・草薙剣、というような関連付けもある?!これらは、この氏族達が、初期ヤマト王権を構成していたことを示すものと思われるが、もしそうだとしたら、何とも象徴的な三山構成ではないだろうか?!

いずれにしても、古代史解明の鍵は、このヤマト王権の初期構成をまずはきちっと押さえ、それがどのように変遷していったのか、もちろんそこでは、半島勢力（大きくは、伽耶勢力と百済勢力）が、どのようにその政権に入り込んできたのか、とりわけ百済王統との融合関係が、どのように進んでいったのか？ということにある?!

記紀における天皇名で言えば、「崇神」「応神」「継体」「欽明」といったあたりと推測されるが、もちろん「記紀」成立期の持統・藤原（不比等）コンビの頃の「ヤマト王権」の実態も、それらと、やはりきちっと整合性を持たせた形で、いかに解明できるかであろう!?!その一つの鍵を握っているのが、こうした墓制のあり方の解明であることは、ある意味間違いないのではないだろうか?!

（9月5日）

⑩ 建国期の日本（倭・大倭・大和）の真相は、実は「記紀」が示してはいるのだ?!

さて、これまで述べてきたように、甚だ深い森・謎の茂みに隠れ入っているような建国期の日本（倭・大倭・大和）の真相ではあるが、改めて、その全体像を解き明かしつつある人がいる?!少なくとも、私にはそのように見える人がいる?!その人物こそが、近年驚くほど多くの書物を世に出している関裕二氏なのであるが、これまで私が一番強く影響を受けてきた、と言うよりは、一番総合的で、しかも説得力のある論考を行ってきている人ではないかということである!

あまりに多産?で、しかも世間（読者）受けするようなものも、一方では、多々出されているようであり（出版社等の意向・戦術もあろうか?）、かなりの嫉妬心?も覚えるが、彼の洞察と史実解明のフレームワークは、他の追随を許さぬものとなっているのではないかということである!

ただし、私が言うのもどうかとは思われるが、著作物自体は、残念ながら?ほとんどが、いわゆる「読み物」として扱われており、信頼性のある?学術研究書としては、見なされていないようではある!それはそれで、仕方がないわけであるが、私にとっては、どこか退屈で、イライラばかりが募る?多くの「学術研究書」を超えて、その論理的な仮説の体系と論証の数々は、本当に衝撃的であり、しかも納得させられるものばかりなのである。

もちろん、いくつか納得できない部分や勇み足のような感を与えるものも、決してないわけではない?!例えば、女王卑弥呼の、「邪馬台国（倭国女王）偽僭説」等は、まさにそれである!しかし、それこそ縄文期から、8~9世紀頃までの、我が国の歴史、厳密には黎明期のそれが、まさしく全体像的に示されていると思えるのである!

ということで、多分私と同じような思いで、彼の著作物を読み、そのような評価をされている人は多いことであろう?!では、一体何故、そのようなことが言えるのか?もちろん私なりであるが、それについて、ここでその概要を、多少整理しておくこととしたい。何故なら、とにもかくにも、この後の私の「古代史の旅」は、それなくしては、ほとんど前には進まないからである?!

繰り返しになるが、私の直接の古代史研究?のきっかけは、彼の著作物との出会いにあったのであり、彼が指摘する事実?こそが、これまで何とも歯痒い思いで受け止めてきた、我が国古代史の真相（建国期の日本の真実!）に、最も近いのではないかということなのである!

そこでまず、その存在自体は、学校でも教えられ、我が国の古代の歴史が、そこには示されているということだけは了解されている、いわゆる「記紀（古事記と日本書紀）」の扱いについてである。ただし、実際にどのようなことが書かれているのかは、ほとんどの人は知らないし、またそのことに、深く頓着する人も少ない?!

さらには、特に「古事記」の方であるが、その文学作品的な要素の方に興味・関心が向けられ、それが歴史書であることを、つまりそこに書かれていることが真実なのか、そこに書かれていることが、どういう事実を指しているのかというような問題意識は、特に、一般の人にはもたれていない?!単純に言えば、冒頭の「神話」の部分が、全くの虚構であり、事実ではあり得ないという情報あるいは評価が、そこにはあるからであろう?!

翻って、そういう状況の中で、改めて注目されるのが、近年ほぼ定説化されてきた感のある、藤原氏（不比等）の介在である（記紀の成立時期が、そこに重なっている!）。その藤原氏（不比等）こそが、記紀、とりわけ正史とされる「日本書紀」の作成当事者（黒幕?）であり、その内容構成は、藤原氏（不比等）の言い分、都合のよい部分は大言され、逆に彼らにとって都合の悪い部分、あまり知られては困る部分は、嘘やごまかしによって、それこそ巧妙に創作されているのではないかということである?!

私も、そのことは、俄かには信じられなかったが、関氏の本や、他の人の著作物を読み進めるうちに、徐々にそのように受け止められるようになったのである!

とにかく、もし、そうであるならば、そこに書かれている事実?を、その編纂における意図・背景等から精査し、その結果に、当時の状況（真実?）を明らかにする、一方の考古学等の成果を採り入れることによって考察すれば、少なくとも、その大きな輪郭くらいは分かってくるのではないかということになる?!ちなみに、古事記の方は、日本書紀の内容に不満や言いたいことがある、あるいは自分達の正統性や貢献を著したい!本当は、真の貢献者・後継者は自分達である!といった主張がある、ある一族・勢力のもののようなものである?!

その編纂（完成?）の中心人物は、多人長（『古事記』を作成したとされる太安万侶の子孫）とされ、あからさまな政権批判、日本書紀の否定は行わないという前提があった?!実際、その時々政権から抹殺、放逐されることは、是非とも回避されなければならなかったのであって、その限りにおいて、書かれていないことも含めて、「言いたいことは言わせてもらう」というスタンスであったということである?!

なお、そこには、「原古事記」のようなものが先にあって、それを修正したものとも、あるいはまた、日本書紀のたたき台的な書物（「原日本紀」?）が先にあって、それらを下に、書き記したものかもしれないともいう?!それは、おそらく、天武天皇が詔勅?したとされる『帝紀』『国記』等であろうか?!

いずれにしても、結論からすれば、次の⑩で述べる、記紀の基本的な編纂方針からも分かるように（ある意味炙り出しのような形ではあるが!）、建国期の日本（倭・大倭・大和）の真相は、実は「記紀」に示されてはいるということである?!

（9月11日）

⑪ では、具体的な記紀編纂の基本方針とは、一体どういうものであったのか?!

そこで、改めて、その記紀編纂の具体的な基本方針であるが、当時（8世紀初頭）、対外的に（特に当時の国際中心国家唐に対して）、正式な国家として認めてもらうために、いわゆる「国史」を編纂することが、まさに喫緊の課題であった。何故なら、国史のない国家は、成熟した国ではないということになるからである。

そこで、その実質的な編纂（内容構成等）の中心人物、さらには良き理解者?（本当は、黒幕で、虚偽の首謀者?!）であったのが、当時の最高権力者藤原不比等、その人であったのであり、そこに絡まる持統天皇等であったわけである?!誰が、どのように関わったのかということもあるが、とにかく、まずはそこでの編集方針は、彼らの思惑と承認を必要としたということである?!

改めて、その基本方針であるが、次の4つにまとめられるのではないか?!

1. 「国史」をもち、しかも長い歴史を有する国とする。

まずは、いわゆる「国史」をもち、しかも出来るだけ長い歴史を有する国とするということである。何故、そのようなことをしたのか?それは、上でも述べたように、国史（正史）の保有、しかもその長い歴史の存在は、政権（皇統）の正当性・正統性を保証するとされたからである。そのために、神話を創作し、はるか縄文時代?に遡って、当時の皇室の起源を設けたのである?!

ただし、当然ではあるが、考古学的証拠からは、そのような事跡は発見されない!要は、いわゆる辛酉革命（1260年単位の天命による体制変革）の思想が導入され、そしてここが重要だが、そこでは、3世紀頃の状況が明確に意識されていた、つまり現政権の発生時期や具体的な状況は、事実に基づくものにしたということである!そこが、現政権の事実上の出発点であったからでもある?!

2. いわゆる「大和王権」の創始者は、九州から来たとする。

次に、記紀は、「大和王権」の創始者（神武）は、九州から来たとする。だが、その神武の東征と、その前に降臨したとされるニギハヤヒとの関係をどう考えるかが、もう一つの重要な点となる?!これについては、当時の遺跡・考古物（纏向遺跡）と突き合わせればよいのであるが、もともと彼らの祖先が、そこ（大和）にいたのならば、わざわざ天孫降臨神話を設けて、九州の高千穂というような僻地?を選ぶ必要はなかった、つまり、大和のどこかでもよかったわけである!

しかし、そのようにはしなかった! 事實は、やはり九州からの渡来であったということであろう?!そして、一方で、それまでの盟主的存在であった「出雲」勢力（本来の皇統?）の存在を仄めかしながら、それを神話の世界にデフォルメさせ、その関係を明示していない?!実は、ここが一番の問題でもあるが、スサノオ、大国主（「大穴持」等の異称あり）、大和の大物主（出雲神）等の存在と関係が執拗に述べられ（出雲系神話）、本来の王権は、出雲系にあったのではないかとさえ思わせるのである?!

やはり、それも事実であったので、無視や抹殺はできなかったということであろう?!

3. 天照大神を創出（捏造?）し、そこから続く、万世一系の天皇中心国家であるとする。

次が、天照大神を創出（捏造?）し、そこから続く、万世一系の天皇中心国家とするということである。そこで問われるのが、そもそも神武元年（BC. 660）を、何故推古天皇即位年（この年もまた「辛酉」年?）から起算したかである。それは、彼女を最初の「女帝」とし、後の持統女帝の正当性・正統性を、その虚偽の作為から主張する意図があった?!

すなわち、それを、他でもない「辛酉」元年にもってきて、いわゆる「万世一系」の皇統譜を創り上げたということである?!そこには、天武後の持統を天照大神に見立て、現政権の正統性・正当性を、その天照大神から賦与されているという虚構を創りたかったからである?!他にはない?諡号の交替（大日本根子広野姫→高天原広野姫）は、そのことを如実に示している?!

ただし、ここがミソ?であるが、それも含めて、夫の天武の系統が続いたように見せて、実は父親の天智の系統に切り替えたこと、さらには、この持統女帝の登場によって、全く新たな王朝が始まったことを示している!?それが、神々の体系、天照大神の位置づけ等に反映されているわけである?!

4. 神話に、関係の氏族・人物等を投影させ、それらの関係あるいは正当性・正統性等を賦与する。

最後が、上記とも関わるが、現政権（藤原氏）は、どこかに後ろめたさがある、自家あるいは部族関係の推移を、自家及び友好関係にある部族の後裔等に、一定の配慮をしながら、年代や史実を変えたり、入れ替えたり、あるいは外交等の文献等から移植したりしながら、示した?!例えば、彼らが、篡奪者（乗っ取り?）あるいは傍流であったということである。したがって、できるだけ真実を隠し、ごまかし、偽造しようとしたということでもある!そして、そのための嘘や捏造の部分は神話（神代）の形とし、都合の悪いところ（本当のこと・知られたいくないこと等）は、ぼかしたり、はぐらかしたり、創作したり、時期等をずらしたりしたということである!

つまり、まずはそうした虚偽・造作の中で、全体としては、現在の政権（藤原政権!）を正統・正当化するような内容とし、それまでに実在した邪馬台国あるいは倭国の実態（実体?）、さらには出雲の先在、そしてそれらと日本国の関係や各関係氏族（韓半島・渡来人を含む）との相克を可能な限りぼかし、最終的には、蘇我氏・物部氏・尾張氏等を抹殺する一方で、至るところで、編纂当時の氏族・人物（の先祖等）が、どのようにそれに貢献したかを暗示（賦与?）させるように、神話のストーリーを考案し、それを投影させたのでもある?!

（9月11日）

⑫「記紀神話」のモチーフから見えてくるもの?!まさにそれは、建国の構図だ?!

さて、⑪で述べたように、「記紀編纂の基本方針」、あるいは「記紀神話」のモチーフから見えてくるものは、3世紀前半の、まさに日本建国（ここでは大和王権、後に大和朝廷と呼ばれるものではあるが!）の構図なのではないか?!そしてまた、それらを、遙か昔の事績というように、神話（「人代」以前の「神代」の物語）の形で創出し、その建国に関わった部族・人物等をそこに投影させ、それらの関係あるいは正当性・正統性等を暗示（賦与?）させているのではないかというのであった!

しかし、それは、出雲（族）やその関係勢力の存在、さらには、その前代、あるいは背後にあった?九州倭国（邪馬台国を含む）の存在や、それらとの関係を隠して、あるいはぼかしてであったわけでもある?!それらが、高天原での神生み・国生み（伊弉諾・伊弉冉等）／三貴子誕生（アマテラス・ツクヨミ・スサノオ）／アマテラスとスサノオの誓約（ウケヒ）／アマテラスの天の岩戸隠れ／スサノオの追放・出雲降臨・八岐大蛇退治、そして出雲神話（大国主の活躍・国譲り）、最後が、天孫降臨（ニニギ）・日向三代（「海幸・山幸物語」等）の話になっているのである?!

ちなみに、その後が、いわゆる「人代」となるが、神武を初代天皇＝始馭天下之天皇（ハツクニシラス・スメラミコト）とし、これは、実際は紀元3世紀前半頃の纏向遺跡／箸墓古墳等（祭政都市）が造られる頃のことを示しているわけであるが、そこは、どうしてもはずせなかった!現政権（皇統）は、淵源としては、そこから由来しているとしたかったからであろう?!しかも、そのプロセスは、（南）九州から近畿・大和盆地への移動、そしてそれ以前の、そこへの部族結集（天孫族・天神族の渡来→ニギハヤヒの出現?!）であったということである?!

そしてそれを、一方の、第10代の崇神天皇の事績（四道將軍の派遣等）としたのではなかったか?!したがって、それも、初めて国を治めた天皇、つまり御肇国天皇（ハツクニシラス・スメラミコト）としたということである?!

ところで、以上述べてきた大和王権の成立時期、すなわち3世紀頃の邪馬台国（これについては、有名な「魏志倭人伝」に記載されており、その存在は確実である!ただし、その所在地については、現代もなお、「邪馬台国論争」として決着がつかないことは、多くの人の知るところである!）は、九州中部（筑後・肥後地域）にできた新しい国（これは、57年、107年の倭国の範域には入っていなかった、新たな勢力ではないか?!）と思われるが、その時期これが、最終的に九州の倭国を統一したということか?!

もし、そうだとしたら、何が、統一（共立）の理由（担保）だったのか?そこも、押さえなければいけない?!考えられるのは、①本来の倭国内部から、その勢力が独立して、強くなった。②内部の一部と外部の勢力（国）が同盟して、権力を掌握した。この場合、外部からの誘い、圧力があって、そうなったか、逆

にそこに支援を求めたかである。考えられるのは、出雲（スサノオ・大国主、その後の宗像氏？）との関係なのではないか?!

最後は、③全く新たな勢力(国)がやって来て、権力を掌握したということか?! これについては、筑後（久留米市）の高良大社（神功皇后や武内宿禰関係?!）の存在が気になる場所である?!

そこで、改めて、その建国の構図をまとめてみると、3世紀の前半頃、九州では、件の邪馬台国が台頭してきて、奴国先導の倭国をまとめ上げていった（乗っ取り?!）。そして、魏に遣使し、「親魏倭王」の称号も貰った! 南に隣接する「狗奴国」との争いは絶えなかったものの、当分の間は、安泰だった?!

問題は、そこでの出雲との関係であるが、同じ3世紀の前半頃、近畿・大和に、突如として大規模な「祭政都市（纏向）」が出現する。ここをリードしたのが、いわゆる吉備勢力（物部氏）であり、近江・東海勢力（和珥氏?、尾張氏等）、さらにまた丹波・丹後勢力であった?!

だが、ややこしいのは、彼らと出雲勢力との関係であり、さらにまた神武東征にみる、南部九州勢力（日向→カモ族?）との関係なのである?!

ここから言えることは、日本国の建国期においては、北部九州を中心とする倭国・邪馬台国連合の推移の中で、ある時から（ほとんど同時期?）吉備から出た?近畿・大和の勢力が、出雲勢力や南部九州勢力と手を結び、その後、北部九州勢力との衝突・融合・離反を繰り返しながら、最終的には近畿・大和の地で、まさに統一国家日本（ヤマト）が、創り上げられたのではないかということである?!ただし、これらは、記紀には直接的には示されていない!やはり、そこには、絶対に明らかにできないことがあったということである?!

ここで浮上するのが、卑弥呼やトヨ（壱與 or 臺與）のことであるが（神話には、卑弥呼または卑弥呼+トヨが天照大神に投影されている?!）、二人の素性・関係性が、改めて問われるであろう（「魏志倭人伝」では、13歳の「宗女」とされているが、実はこれが、『日本書紀』では、神功皇后に投影されている?!）?!これについては、④で、初期大和王権を構成した、彦火明命（ヒコホアカリないしはニギハヤヒ?!）系統の、尾張氏・海部氏等の存在・関係性（可能性）について言及しておいた!

最後に、今回のこととは直接関係はないが、『日本書紀』の直接の執筆者（4人の文人とされる?）は、その記載内容に対して、歴史家としての最低限の良心?は発揮しているとされる（例えば、「継体」の死去に関わる説明→『百濟本紀』との整合性への謎かけ?）?!

また、その『日本書紀』の確定版は、藤原不比等の息子の一人、藤原武智麻呂（→南家）の手によって出され、後の桓武天皇が最終仕上げを行ったとされる?!もちろん、この国史編纂の流れと、そこにおける具体的な関係づけは難しい?が、最初は、天武天皇の代から始まったことは確かなようである?!

（9月13日）

⑬ 改めて、どこに考察の起点をおくべきか?!それは、やはり「倭国大乱」では?!

以上、これまで、我が国古代史の解明にあたっての幾つかの「確認」と、他人（関裕二氏等）の分析枠組みではあるが、我が国建国期、すなわち纏向（遺跡）出現期頃の状況を、私なりに描かせてもらった?!その当否はともかく、そこから、多少は？見えてきたものは、それを実現した人間（部族・勢力等）の移動や接触（もちろん、そこには、摩擦や衝突あるいは同盟や分裂等もあったろうが?!）ということであり、それがまさに、黎明・建国期の日本を創り上げてきたということである?!

つまり、「そこに居づらくなった、そこに居るよりは、別な所へ移った方がよい!」、あるいは「あそこの人達と手を組んだ方がよい!」というような動機やきっかけが、そこにはあったということである?!

ちなみに、その背景には、生活条件の変化、それが、気候の変動、あるいはそれに伴う他部族・勢力等との摩擦・軋轢、そして、それらの結果としての殺戮や政権篡奪等によるものがあつたろうことは、多分に推測されることではある?!もちろんそれは、本源的には、いわゆる人類の「出アフリカ」であり、各地への「グレート・ジャーニィ（大いなる旅!）」であることは言うまでもないであろう?!

問題は、その「出アフリカ」、「グレート・ジャーニィ」によってもたらされた、極東地方での人々の動きであり、そこで繰り広げられた、個別、具体的な人々の動きである!ただし、その姿・形は、考古学、あるいはその隣接諸科学の成果等によって、徐々に分かってはきている?!とは言え、それらは、まだまだ断片的であり、その多くが、ある意味諸説芬々の状況でもある?!とりわけ、我が国の黎明・建国期の様相は（それを、どこに当てるかにもよるが）、はっきりとしないということである!

そういう中で、具体的な評価はいろいろあるようだが、それらを書き記したものである!いわゆる「記紀」があり、それが、頼りと言え、頼りなのである!もちろん、単純な解釈や全くの拒否ではなく、そのモチーフや記載内容、例えば「神話」の形で示されている出来事等を、一方の、考古学あるいはその隣接諸科学の成果等と照らし合わせながら、着実に解き明かしていくということである!

まさに、⑩⑪等でフルに援用させてもらった、関 裕二氏のような仕事ぶりである!しかし、それにしても、やはりそこには、何かの考察の起点が必要となってくる?!

これについては、現時点では、私は、人々の移動・接触を生起させた大きな歴史的事象（事件?）、いわゆる「倭国大乱」（2世紀後半）が、その起点になるのではないかと考えている!何故なら、それは、先に述べたような、我が国黎明・建国期を創出した、まさに人間（部族・勢力）の移動・接触、しかも、かな

り大掛かりな移動・接触劇だったのではないかということからである！

しかも、そこでは、「魏志倭人伝」に記載されている「邪馬台国」や「女王卑弥呼」あるいは「宗女台与」といった、3世紀前後の事績や人物のことが、同じ3世紀頃のことを記述したと思われる「記紀」が、直接それに触れていない?! そちらの動きや人物等が、記紀が叙述する真実?とは、無関係だったということか、あるいは単純に知らなかっただけなのか?! それにしては、彼女らの存在を匂わすような記述、例えば神功皇后の事績等は、とても無関係、無情報であったとは思われない! やはり、そこには、何かがあったということでもある?!

いずれにしても、そこは九州(倭国)であり、自分達とは、直接のつながりはなかった(と言いたい?)ということであろうが(王統、すなわち「親魏倭王」の王統という意味で?!)、以前にも述べたように、邪馬台国は、まさに「倭国大乱」の中で登場してきた国である!

つまり、その邪馬台国以前に「大乱」があったのであり、その「大乱」は、その前後、あるいはその途中で、多くの国の興亡、あるいは人(部族・勢力)の移動・接触をもたらしたはずなのである?! その移動・接触の結果が、九州における邪馬台国(連合)の出現であり、一方でまた、近畿大和での、他の部族・勢力等の結集があったとすれば、当然そこに何らかの関連性があったということではないか?!

例えば、大和・近畿の部族・勢力は、その時期に九州から移動してきた部族・勢力か、あるいは先に移動(移住?)していた同じ部族・勢力を頼って移動・接触してきた部族・勢力であった?! だからこそ、邪馬台国や卑弥呼・台与の存在は無視できないが、それらを自らの栄光あるいは先祖の偉業とはできなかったということである?!

ということで、その倭国大乱とは、まずは紀元57年に後漢王朝から「漢委奴国王」の金印を貰った国、さらには107年に「倭国王」として遣使した帥升の国等に混乱が起き、やがて「邪馬台国」を中心として、その「倭国」が糾合されたという事績(事件?)ということになる?! そして、そこに居づらくなった(敗れた?)倭奴国や邪馬台国(連合)の一部?の部族・勢力が東方に逃れ、その後日本(大和)を建国したのではないかということになる?!

その傍証?の一つとして、『新唐書』(1060年)には、「日本古倭奴也」とあり、「日本」(大和)は、古くは「倭奴」と呼ばれた国であった?! だとしたら、改めて解明の鍵は、倭国を統一?した邪馬台国が、その後、具体的にどのようなようになっていったのか(残存 or 解体 or 他からの乗っ取り等?)、そしてまた、それと連動して、一方の近畿・大和が、どのような変遷を辿ったのかが、全体の整合性を持った形で、いかに説明できるかであろう?!

単純に、邪馬台国が、どちら(九州 or 大和)にあったかというようなことでは、決して済まされない話なのである?! (9月17日)

⑭ 記紀は、倭国大乱を高天原神話として描いている?!だとしたら、どのように?!

ここで、前にも出した「大いなる仮説」(これもほとんど妄想に近いであろうが?)を、追加提案してみたい!それは、⑫⑬で述べてきたような、我が国の黎明・建国期の状況(史実?)について、「記紀」は、必要とされた?捏造や造作を、それこそ至るところで行ってはいるが、大きな骨格の部分は、おそらく真実?として描いているのではないかということであるが、その最初の骨格的な部分が、他ならぬ「倭国大乱」であり、そこから生じた様々な事象を、件の「高天原神話」に投影させているのではないかということである?!

その根拠としては、前に述べたように、いわゆる3世紀前後の「倭国」や「邪馬台国」の状況、そして、そこにおける「卑弥呼」や「台与」のことは知っていたのであり(もちろん、何らかの理由で、そのことをあからさまにはできなかったということであるが?!)、そのことは、時代的には矛盾するが、「神功皇后摂政期」という形で示されているということである?!素材?が何もないところでは、造作はできない?!まずは、そういうところである!

さて、とするならば、記紀編纂当時の政権は、おそらくは、その直前の「倭国大乱」についても知っていたのではないかということであり(「魏志倭人伝」で偶然にも知ったということでは、決してないはず?!)、そのことについても、同じ理由から、直接には示すことができなかつた?!だから、古き「神代」の時代のこととして、それを「神話」という形で表すことにしたのではなかつたか?!

ただし、そこでは、多分、当時の遣唐使達が持ち帰った「ギリシャ神話」や「聖書」等における寓話・モチーフ、あるいは国内の部族・氏族等に伝わる伝承、さらには古老等の話を、適宜挿入・改竄し、創作?したということではあろう?!

そこで、改めて「高天原神話」であるが、まずは「神生み・国生み神話」で始まる!これは、当時の「倭国」の状況と捉えられなくもないのである?!ただし、これについては、中国の古い書籍を参考にした、言わば観念上の創作(宇宙観・世界観)であり、史実の反映だとは、直接には言えない?!

しかし、例えば「八百万の神」というような捉え方は、それを構成した国々(部族・勢力等)のことを指すということになれば、それはそれで、一つの形にはなるであろう?!尤も、これは、いわゆる「縄文時代」からの自然崇拜、つまり森羅万象に宿る魂(精霊)を畏敬する信仰形態(アニミズム)のことを指すとも考えられるが、発想の根幹は、そこから来ていると言えなくもない?!

いずれにしても、最後には「三貴子」と呼ばれる神が登場し、結局は「アマテラス」と「スサノオ」の二貴子(一応「姉弟」とされるが!)が残り、その「姉弟」の「誓約(うけひ)」によって、前者から「五人の男神」、後者から「(宗像)三女神」が生まれることになる!

ちなみに、前者が「天つ神」(稲作を中心とした弥生時代族?→渡来系)、後者が

「国つ神」(弥生時代以前の縄文時代族→在地系)とされ、前者が後者を駆逐(支配?)していくという構図が、そこには嵌め込まれている(実際に、名称はともかく、「縄文」から「弥生」へと時代が推移したことは、紛れもない事実!)?!

まさにこれは、後の「出雲の国譲り」を先取りした構図?ともなっているが、そのことが、神話の世界に組み込まれているということである?!なお、このことは、近年の考古学の成果によって、まさに「事実」であったことが判明してきているのでもある(出雲地方における、数々の驚くべき考古学的発見のことである!)?!

とまあ、このような「神話」の流れが読み取れるのであるが、これを、改めて「倭国大乱」に当て嵌めてみると、まず、(最初期の)倭国は、多くの国々からなり(半島南部と北九州地域)、そこに高木神を奉斎する国(倭奴国・伊都国)が倭国全体をリードする形が出来つつあった(紀元57年、さらには107年頃)?!しかし、そこに、「アマテラス」と「スサノオ」に代表される「邪馬台国」と「出雲系」の二大勢力が登場し、利害関係や姻戚関係等の相違で(これが、例の「誓約」の結果を示している?!)、最初は協力関係にあったものの、両者は徐々に離反し、ついには「出雲系」が放逐された(これは、「魏志倭人伝」に記されている、台与の共立前後の状況か?!)?!

とは言え、一方で「出雲系」は、かの「オオクニヌシ」の活躍で、出雲を拠点に、「葦原中つ国」をまとめあげていく!だが、その後「出雲の国譲り」となり、最終的には「ニニギの天孫降臨」、そして「日向三代」へと続き、「人代」としての神武の東征が描かれるのである!

ちなみに、「出雲の国譲り」については、後の「崇神」の事績に投影されるとも言われるが、要は、出雲が、大和(王権)に飲み込まれたということである?!

けれども、それにしても、別の意味でややこしい?のは、その後の「邪馬台国」の推移である。おそらくそれは、九州に残った勢力と近畿・大和に移った勢力(近江・尾張・丹波?!その最初の根拠地が、大和の葛城地方?!)の二つに分かれ、さらに九州に残った勢力は、新来の「渡来百済系」と融合・離反し、またその離反勢力(吉備勢力?!)が、後に近畿・大和に合流し(乗っ取り?)、最終的には「出雲系」及び「東海・近江・丹波(初期大和=三輪政権?)」を追い出した?!

つまり、この推移の中で、一応「出雲系」(ある時の盟主であった!)の「台与」と「事代主?」の勢力が、こうした各部族・勢力の融合・離反の中で、孤立・抹殺されていったということでもある?!

だが、その血統と本来の事績は、まさに日本建国の当事者であったということである?!それが、実は、この時点では唐突?となるが、伊勢神宮の内宮・外宮の意味であり、その存在の重要性なのでもある?!

(9月20日)

⑮ 倭国・邪馬台国と出雲の関係、その輪郭は、やはり明確にしておく必要あり?!

そこで今、改めて、⑫⑬⑭で述べてきたような、「倭国大乱」と、その後の「邪馬台国の推移」について考察する必要が出てきた。ここで、私は、その一つの大きな関係（の塊?）が、既にお分かりのように?、「倭国・邪馬台国」と「出雲」の関係なのではないかと考えている!それを導き出させるのが、他ならぬ「台与」なのであるが、それに関わっては、時代的にはまだ、その整合がはっきりしない（実際には120年繰り上げされている!）、いわゆる「神功皇后」のことが気になってくる?!彼女は、一応?息長帯姫とされ、近畿近江の息長氏の一族とされているが、その活躍?ぶりが、記紀において、まさに邪馬台国時代の卑弥呼ないし台与（おそらく台与であろう?!）として描かれているからである?!

ということで、もし、そうであれば、その神功皇后（息長帯姫）と、記紀では夫とされる仲哀天皇との関係が、まさに「倭国・邪馬台国」と「出雲・大和」の関係として描き出せれば、それこそ謎は氷解?するのであるが、何せ120年の繰り上げ、ただそれだけでも当惑させられるので、事は容易ではないのである!史実と造作が混在していることが、当然、予測されるのである!

そこで、私が、一方で秘かに注目しているのが、あまり知られてはいないが、（実際の?）「台与」とおぼしき女性で、大国主（オオナムチ）の娘とされる「伽耶（賀夜）奈留美」である。ということは、大国主の子とされる「事代主」（→住吉大神・竹内宿禰?）の妹ということになるが、大和の「飛鳥坐神社」等に、出雲系の神様の一人として祀られているのである!まさに、そのことは確かなのであるが、不思議なことに、それこそほとんど事績が分からない女性（神?）なのでもある!

そう、「延喜式」の「出雲国造神賀詞」に現れるのみなのである!尤も、その人物が、女性であるという確証はないという人もいるようだが（「ナルミ」という名前が、必ずしも女性を表すものではないということらしい?!）、もちろん名前だけでは判断はされないが、彼女?が、別な所（文献）では、例えば「下照姫」とか「高照姫」というようにも書かれているようなので、やはり女性であると捉えてよいであろう?!

いずれにしても、「台与」が、この出雲系の「伽耶奈留美」という女性であるならば、120年繰り上げられている「神功皇后」を持ち出さなくても、私の仮説は成り立ってくるわけである?!とにかく、邪馬台国にいた（来た?!）台与が、出雲とつながっていたということが分かれば、まずはそれでよいのである!

ところで、こうした九州と出雲の、そして当然ながら?近畿・大和との類縁性を示す、形質人類学からの研究結果もある!それは、前にも紹介したように、渡来系形質からみた、人の移動?!を示すものであるが、ある時期の渡来系形質のひろがり調べたもので、具体的には、弥生人・古墳人を統計的に分析し、

現在の福岡市からの距離とその形質の広がり方をみたものである。結婚などによる普通の形質の広がり方をしたときは、右下がりのカーブ、そして、そのカーブが緩やかな場合には、形質の分布範囲が広く、急な場合には狭いということであるが、弥生人は、西北九州へと向かう海岸ルートは急に落ちていくのに対して、山陰へと向かうルートでは値は落ちない。つまり、この時の弥生人（福岡市周辺の人々）と山陰ルートの人々とは、同じ集団・部族である可能性があるということであり、北部九州（→筑紫王朝？）と出雲（→豊葦原中つ国・出雲王朝？）は、同族または同盟国だったのではないかということであった?!これが、まさに、倭国大乱と関係があるのではないかということでもある?!

一方、古墳時代人は、九州を南へと向かうルートは急なカーブを描き、相互の関係はほとんどなく、豊前の平野部を通して東九州を南下するルートは緩やかなカーブをなしているが、これも、相互の関係はあまりないとされる。ただし、弥生人と同様、東へと向かうルートではカーブをなさず、近畿になると、逆に上昇するという!つまり、渡来系形質は、稲作の適地である平野部に向かって広がり、山陰や近畿へは普通の広がり方ではなく、人の移住などを伴って広がった可能性があるということであった。単なる移住（分散?）なのか?それとも集団の分裂・離脱なのか?とにかく、そこでは、王権（皇統）の移動（篡奪?）も考えられるのである?!

さらにまた、別の形質からも、古墳人は、九州内では、筑前（福岡市）から離れるほど横広になり、本州では、北部九州（筑前）と近畿・山陰を二つのピークとして、中部瀬戸内が谷間のようになっているという。また、関東・東北も同様な値であり（北部九州や近畿・山陰と似ている!）、それはまた、近畿からの流れで理解できるという。これは多分、出雲系の、関東・東北地方への進出の結果（「前方後方墳」文化?!）だろうと推測される?!

これに加えて、さらに別の形質からは、九州内では南九州を除くと、そう大差はないが、本州では、同じように、北部九州と近畿・山陰をピークとして、中部瀬戸内が谷間のようになっている。逆に、また別の形質では、九州内では、北部九州と他の地域に差があり、本州では山陰・近畿が高い値を示すものの、大差はないという。また、関東・東北の古墳人は、北部九州の弥生人・古墳人と、ほぼ同じであるとされる。そういうことであった!

とにかく、以上のように、北部九州に、ある弥生人の一派が渡来（移住=コロニー化）し、その後、彼らの主流または一派が、出雲及び近畿に移住したということが、これらによって説明され得るであろう!ただし、単なる移住、水田稲作の伝播なのかどうかは、これだけでは証明できないが（食料増産 or 勢力争いで負けた?!）、これはまさしく、記紀が描く、西から東への動きを、ある意味科学的に証明するものとは言えるであろう?!

（9月20日）

⑩ 改めて、人々の移動はどのように描かれ、全体的に、どこまで整合するのか?!

さて、これまでの⑫⑬⑭⑮での考察?から、改めて、どのような史実?が見えてくるのであろうか?!単純に言えば、そこに、民族・部族の移動・接触・交流があったということであり、それが歴史の大きな骨格を創るものであったということであるが、そこに見える?「倭国大乱」前後の部族・勢力等の移動・接触・交流あるいは殺戮・篡奪?!,そして、それに伴う人々のさらなる移動等(「東遷」とか「東征」等)は、当然、その人達の身体的形質(遺伝子レベル)からみた証拠も、同じように見出されるのではないかということでもあった?!

ここでは、そのことも含め、今の私の理解の範囲(力量?)の中で、改めて人々の移動は、一体どのような全体像で描けるのか、その可能な限りの言及を試みたいと思う。

ここで、最も注目されるのが、いわゆる「渡来人(系)」であり、その移動の事績であろう!何故なら、彼らが、いわゆる「弥生時代」、そして、その後続く「古墳時代」を創り出していった主体(張本人?)であったということは、ほぼ間違いのないであろうからである!ただし、その「弥生時代」や「古墳時代」が、そうした渡来人(系)によって、すべてもたらされたわけではないことも事実ではある(これは、近年の考古学・人類学等の成果によって明らかにされている)!つまり、「弥生人」や「古墳人」が、すべて渡来人(系)ということではなく、一方の、先住の「縄文人」も、積極的に、それに呼応・順応・同化していった部分があるということである!

そして、この中には、紀元前3世紀後半頃?の、いわゆる「徐福渡来」(伝説?)とか、例えば九州山地の山間部に残っている「焼畑農業」の痕跡とかいったものは、南方(中国江南地方)からの、人々の渡来(移住?)を物語っているということも、一方で押さえておかなければならないであろう!

そこで、一応ここでは、そのことを踏まえた上で、以前に紹介したことのある、兼川晋氏の『百済の王統と日本の古代』に記されている、渡来人(系)の、様々な部族・勢力等の移動の状況を俯瞰し、そこから膨らんでいく(大陸及び朝鮮半島あるいは本州全体の範囲の中でという意味!)、人々の移動の全体像把握にチャレンジしておきたい!

まず、一番古い渡来人(系)としては、「呉の太伯の後裔」を自称したとされる、すなわちAD57年に「漢委奴国王印」を貰った「委奴国」の人々(王族だけかもしれないが?)である。彼らは、中国南部から九州中南部に渡来し、そこから北上して、一時北部九州から出雲にかけて、大いに勢力を張っていたとされる。遺跡的には、吉武高木や須久岡本の遺跡を残した人々であろう?!

次が、その後、朝鮮半島から、壱岐・対馬を経由して筑豊に渡来してきた、「天神系」(秦・辰韓人/多羅伽耶の人々?→秦氏→後の秦王国?)と呼ばれる部族・勢力で、先住の「委奴国」(の人々)を、一部は駆逐し、一部は服属させた。だが、

この時はまだ、「天孫系」（現在の糸島に渡来したとされる部族？）は来ていないとされる！

その後、委奴国（の人々）は、筑豊の天神系とバランスを回復するが、糸島に渡来した天孫系（伽耶系？）によって、再び駆逐されるか、服属した！その天孫系は、「三雲遺跡」等を残した、伊都国に「世々王あり」と言われた王達たちであったとされている?!

だが、この天孫系渡来人の王達は、続いて半島から博多湾岸に渡来してきた「倭」の勢力（半島倭人で、これが皇孫系とされる！）に敗れ、伊都国は衰弱し、そこにいた「神武兄弟」（彼らは、「魏志倭人伝」に記載されている「一大卒」とされる?!）は、一応皇孫系として筑豊に移住するが、皇孫系に敗れた天神系王族と物部一族（の一部）は近畿に駆逐されるか、残った王族と物部一族は皇孫系に服属した（これが、豊系の基本的血統とされる!）。

その後、豊系の基本的血統には、崇神・垂仁の「イリヒコ系（伽耶系?）」や景行・成務・仲哀・神功の「タラシヒコ系（阿羅・多羅系?）」、さらには「扶余系」の軍君（コニキシ=昆支）の血統も混淆する！これが、時代を重ねつつ、豊・筑豊の物部・大王系を作り出していくとされる！

一方、これとは別に、九州内陸の筑後地方に、「新しい渡来人」（半島の南部に残っていた倭人と沸流系百済の王族の混血種で、母系から言えば倭人、父系から言えば扶余人）が来た。同時に、楽浪郡の滅亡により、「中国系」も渡来して、それらが委奴国とも同化し、倭国とも同化し、伊都国とも同化し、いつのまにか「筑紫の物部系」になった！なかには、「葛城」や「蘇我」を称したりするものもいた！その本拠地が、佐賀県にあった「基肆国」（→木・貴国→紀伊国?）ともされる?!なお、伊都国というのは、もともと呉の太伯の後裔や楚の熊氏の後裔が称していたのだから、いわゆる熊襲のことである！ともされている。

一応これらが、兼川氏が示した渡来人（系）の全体像であるが、やはりこれだけでは、よく分からない?!ただ、少なくとも縄文時代の晩期から弥生時代にかけて、北部九州をはじめとした西日本に文化的影響を与えたのが朝鮮半島南部であり、その影響は、稲作農耕、土器、石器、住居、習俗まで含んでおり、きわめて強いことは明らかである?!

ちなみに、この朝鮮半島南部地域には、4世紀以降の例ではあるが、弥生人とよく似た人骨もあるという！文化とあわせて総合的に考えると、渡来人（系）の主流（弥生人?）は、半島南部から渡ってきたと考える他ないのであるが、そうだとした場合、半島から列島へという、一方向的な視点で捉えてよいものでもない?!時間的な差異が前提となるが（どちらが古いか!）、往還していた、あるいはまた、列島から半島へと動いた人、事物もあるというようなことも、当然視野に入れておかなければならないであろう?!

(10月5日)

⑰ 「記紀」は、「応神」の系譜造作のため「神武」を創出した?!それは、何故か?!

やはり?先の⑯は、結果的には、極めて不十分となった(近いうちに、改めて詰めよう!)。ここで、その不十分さを先送りするわけではないが、今俄かに蠢き出している、新たな閃き(妄想?)を提示してみることにしたい!それは、記紀が、応神(第15代)の系譜造作のために、神武(初代)を創出したのではないかという、とんでもない話である?!だが、根拠(傍証?)はある?!

一つは、双方の漢風諡号に被された(託された?)意味(「神武」と「応神」の対応!)、もう一つは(こちらの方が大きい!)、応神の母である神功皇后(摂政)の、記紀での意味(事績と時期!→120年の繰り上げ!)である。特に後者においては、そこでの応神の出生の秘密?(父親とされている人物の怪しさ?!)である!

したがって、その秘密?の訳が分かれば、そもそも応神が、一方で言われているように、後発の渡来人(系)であり、その怪しげな?出生造作も、それ故に十分にあり得るということである?!

どういうことかと言うと、この応神については、その実在の確かさは、多くの人の認めるところであるが、古墳時代のある時期に、まずは九州に渡来し、その後、近畿・河内に移動した人物ではないかと考えられている(河内王朝とも呼ばれているが、いわゆる騎馬民族的な文化や生活様式をもった扶余系、あるいはその同族とされる高句麗・百済系とされている!)?!したがって、それが本当ならば、後の継体や欽明、あるいは天智・天武等は、すべてその子孫ということになり、日本の皇室は、まさに、そこに淵源があるということになる?!

だが、いずれにしても、そうなると、当時の記紀編纂者達が目指していた、天照大神から連綿と続く「万世一系」の皇室の系譜づくり(の嘘!)が、そこで(も?)見破られてしまう?!多分そこで、彼らは、他ならぬ応神の系譜づくりに、大いに腐心したことになる?!ただし、そのこと自体は、このシリーズの最初でも述べているように、あまり拘る必要はない!具体的に、誰が、どのように、当時の皇統に入り込み、その後の皇室(政権)を確立・維持したかを知ることが、史実解明にとっては、重要となるだけなのである!

ところで、この応神は、5世紀の中国(南宋)のことを記した『宋書』等に出てくる「倭の五王」の一人、「讚」にも比定されている(次の「仁徳」とする人も多いが?!)!そこで、例えばこの「讚」が、まさに「応神」であったならば、「倭の五王」は、扶余系あるいは高句麗・百済系の渡来人であったということにもなる?!

さらにまた、この応神が、外国から来たのではないかという話は、別の文脈からもある?!伽耶ないし百済の王族(本宗家)の皇子で、人質として日本(倭国)に送られてきて、誰かの養子(婿養子?)となり、その皇統の中に入り込み、その皇統を自らのものにしたというようなことである!

しかも、驚くなかれ、この応神と、後の(一応5世孫とされるが?!)継体が兄弟

であり、その双方が、誰かの養子（婿養子？）となり、近畿・河内に、あの巨大古墳（大山陵古墳等）を建造したとも言われている?! 応神が兄王、継体が男弟王と呼ばれるのはそのためでもあると、されるわけである?!

ただし、そのことについては、また改めて考察することにして、ここで指摘したいことは、そうした応神の出自とか、我が国での活躍? を、記紀が、どのように盛り込んでいるかなのである! まさにそこが、件の記紀編纂者達が腐心した、最も核心の部分ではなかったかということである?!

さて、これに関わって、記紀には、もう一つ、どうしても書き記さなければならぬことがあった?! それは、皇統譜の本源とも言える? 倭国・邪馬台国、あるいはそこにおける女王卑弥呼や台与の存在である。繰り返しになるが、そのことは、当時の最重要国（中国）の「魏志倭人伝」に厳然と書かれているからであり、それを黙殺することは出来なかった?! やむなく、つまり、彼女らが直接の先祖ではなかったがために、邪馬台国や女王の存在を、遠回しに匂わせることにはしたということである?!

実は、ここからが、私の閃き（妄想?）なのであるが、この時同時に、応神の虚像（すり替わり?）が必要となってきたということである?! 何故なら、応神は、そこで遠回しに匂わせられた卑弥呼ないし台与（→神功皇后）と、その夫仲哀（本当は、住吉大神?!）の子として、その出自が示されていたのである! ということは、実際の女王（多分台与!）と誰かの子として、応神にすり替わる人物を、新たに創出しなければならなかった?! それが、他ならぬ「神武」ではないかということである?!

そして、それこそ荒唐無稽な話となるかもしれないが、卑弥呼・台与の時代を神話にし、もう一つのカラクリとしての「アマテラス」と「スサノオ」の関係を創出し、彼（創出された神武!）を、彼女らの末裔とした?! つまり、本当の3世紀前後において、アマテラス（卑弥呼・台与）の系統に、応神の（渡来系百済の?）系譜をつなぎ入れ、一方のスサノオ系（これが真の皇統系譜＝出雲系?）との一体化（融合）を図ったということである?!

けれども、それ自体は、ある意味事実なのであり、その関係は、「神功皇后」と「住吉大神」の関係に昇華されたが、実はそれは、卑弥呼・台与（多分台与!）の邪馬台国と出雲の関係を、示すものでもあった?! ここでは、実在の、卑弥呼・台与との対であるスサノオ・オオクニヌシが、実際に誰であったのかは特定できないが、神武を、それらの人物との間の子としたのである?!

しかし、実際の神武（応神の虚像ではない、実在した人物!）は、まさしく九州南部? から近畿・大和に移動（移住?）していた人物であり、だからこそ、その人物（実際の神武）の先祖としての、いわゆる「日向三代」の天孫降臨の地も、そこにしたのではないだろうか?!

(10月6日)

⑩ 見えてきた南九州の影?!タケツヌミ（賀茂族）は、神武の「影」?!

さて、⑪での突然の閃き（妄想?!）は、必然的に、応神のすり替わりとして創出された神武?!のモデル（影?!）となった人物の、いわゆる「東征」の出発地、日向、すなわち南九州へと目を向ける必要性を提示する?! その人物は、「魏志倭人伝」にある、倭国の一つ投馬国（後の日向国?）の王族かもしれない?!

いずれにしても、そういった類いの人物で、おそらく有力なのが?、「タケツヌミ（ノミコト）」なのではないか（「記紀」等では「八咫鳥」とも言われ、神武の東征に助力し、後に「賀茂族」の頭領となり、近江・丹波・越等との関係も無視できない人物!）?!だとしたら、これまで多くの人を悩ませてきた、ある種永遠の不可思議も、それこそ氷解する?!

近畿・大和から遠く離れた南九州、しかもその幽遠の地に（ただし、このこと自体は、「神の降臨」という、特別な要素も加味する必要がある?!）、何故皇孫（ニニギノミコト）が降臨しなければならなかったのか?!同じ創出ならば、そしてまた、「神話」という形であればなおさらのこと?、どこでもよかったわけだし、地理的には申し分のない?（確からしさを感じさせる!）近畿・大和のどこかの霊山?に、その降臨の地を選べばよかったのである?!

では、何故、そうしなかったのか?!要は、応神に擬される（すり替えられる!）人物は、ある意味誰でもよかったわけであるが、条件としては、創出した神功皇后摂政期の時代（すなわち卑弥呼・台与時代?）にあって、それに相当する（モデルとなり得る!）人物でなければならなかった?!

つまり、必ずは、そこは押さえておかなければ、たとえ神話としてではあっても、まったくの空想（絵空事）となり、その嘘も簡単に見破られることになるからである?!それ（実在の人物）が、南九州出身の「タケツヌミ（ノミコト）」、その人だったということである?!

京都在の上賀茂・下鴨の両社、あるいは紀伊半島に所在する「熊野三山」（本宮・那智・新宮の各大社）、そしてまた出雲における「熊野大社」等の存在、全国各地に散在する「賀茂」という名の地名は（使用漢字は異なっても）、この人物（部族）の存在の大きさ（偉大さ→本当の皇統譜?!）を感じさせるには十分過ぎる?!そこで、改めて問題となるのは、その「タケツヌミ（ノミコト）」が、本当に南部九州出身だったかどうかである?!

ということで、その、他ならぬ「タケツヌミ（ノミコト）」の出身地であるが、「記紀」とは異なる立場や内容が盛り込まれているとされる『風土記』、その一つである『山城国風土記』（逸文）に、それを実証する?記述があるという?!それが、「可茂と称うるは、日向の曾の峯に天下りましし神、賀茂建角身命（カモタケツヌミノミコト）、神倭石余比古（カムヤマトイワレヒコ）の御前に立たして、大倭の葛木山の峯に宿りまし、そこより漸くに遷りて、山代の国の岡田の賀茂に至り給い、山代河（木津川）に随いて下りまして、葛野川（桂川）と賀茂

河と会うところに至りて、賀茂川を見晴かして言い給う。」である！

すなわち、「日向の曾の峯に天下りましし神」が、まさしくそうであり、「日向」とは、今日の宮崎・鹿児島、しかも「曾」とは、その大隅地方に当たる?! 彼が、いつ、何故、そのように移動したのかは分からないが（鉄、丹生等の鉱物資源を求めて?!）、もしそれが真実であれば、この私の閃きは、単なる妄想ではなく、見事に?!「記紀」の永遠の謎を説明できるものになる?!

ただし、神武の東征の出発地は、南部九州ではなく、北部九州（福岡）の日向（ひなた）地方ではないかという説もある?!もちろん、その説も、今のところありだとは思われるが、「曾」という記述、そして、これまで述べてきた「応神」のからくりと、ここでのタケツヌミの話とを整合させるならば、やはり、その出立地は南部九州であると言えるであろう?!

なお、もしもそうであったとしても、北部九州からの人（王権?）の移動がなかったということではなく（前にも述べたように、それは確かな事実ではある!）、あくまでも「応神」の系譜造作のために創出された、邪馬台国時代の、まさに神武に相当する人物が、応神のモデル（すり替わり）として選び出され、そのモデルの出身地が、南部九州であったがために、天孫降臨の地も、そこに措定されたということである?!

だが、もちろん、そのモデルが北部九州出身であっても、系譜の造作上南部九州出身にされても、記紀のストーリー自体は、それはそれで、十分成り立つわけではある?!とにかく、その創出された人物こそが、倭国・日本国の創始者でなければいけなかったのであり、その血筋も、これも創出されたものではあるが、神（天照大神）の子孫でなければならなかったのである！それが、「神武」という名の尊称であり、「ハツクニシラス・スメラミコト」の意味なのでもある?!

ちなみに、一方で、神武と応神は同一人物で、二つの時代に分けられて描かれているというような指摘もあるが（他ならぬ関 裕二氏も、この説の提唱者である!）、この私の閃き（妄想?!）からすれば、ある意味当然の帰結にもなる！何故なら、二人は、ある種の虚像（裏）と実像（表）の関係なのだから?!

このように、「神武」と「応神」の関係を、そうした視点で捉え直すと、思いも寄らない事実が見えてくるのであるが?!、重要なのは、改めてここからである！どういうことか言うと、そうすることによって、他ならぬ「応神」の血統や位置づけが、神代の昔から保証されることになるということである！それによって、その万世一系の、一員にもなるのである?!

神功皇后摂政期は、まさにそのためにも創られた物語ということになるが、それもまた、そこに投影されている人物や時代があるはずである?!それが、本当の応神こと、百濟王（兄王）ないしは天日矛（ツヌガアラシト?!）として描かれている人物であり、彼らが活躍した時代なのでもある?!

(10月9日)

⑱ 事代主・住吉大神こと?!天日矛（ツヌガアラシト?!）が本来の祖?!

先の⑰⑱において、それこそ、とんでもない閃き（妄想?!）を提示した！実は、そこで書き切れなかったものがあるので、ここでは、まずはそれを披瀝して、その後、それを受けた、さらなる大仕事？に挑戦してみることとしたい！しかし、それは、本当に手が震えるくらいの、大仕事なのかもしれない?!

そこでまず、その書き切れなかったものとは、他でもない、関係の？4人の人物、すなわち神武、崇神、応神の、3人の天皇と神功皇后の、それぞれ4人の漢風諡号に付く、「神」の文字の意味（関係?）についてである！もちろん、その諡号自体は、それぞれ何らかの意味合いを持たせたものであろうが（「漢籍」等から援用して?）、ここでは、それらが、それぞれ独立のものかどうかということである?!

これについては、先（18）に見たように、「神武」と「応神」の虚像（裏）と実像（表）の関係?!、そして「神功皇后」については、自らの子である応神の天皇即位?、それに功をなした（ことにする?!）存在?!、そう考えると、何かそこには、ある種の因縁を絡ませた意図が、明らかに潜んでいるのではないかと思われるのである?!

なお、もう一人の「崇神」は、「応神」よりも先の皇統の初代であり（だから、それも「ハツクニシラス・スメラミコト」とした?!）、別の系統・種族（純粋な伽耶系?!）であったこともあり、その二人の「神」（神武と応神）を「崇める」という意味での命名ではなかったかと、ある意味とんでもない解釈（推理!）をしている?!

ただし、この「崇神」については、大物主、つまり大和の出雲神に崇られたので、それを崇めるという意味だという解釈もある?!さらにまた、「神」は「鬼」でもあり、崇る存在でもある、そうした解釈をする人もいる！要するに、神とは、存命中は偉大な？存在であったが、何らかの理由で（裏切りとか、失脚を余儀なくされたとか）、この世（ある人達?）を恨んで、死んでいった者のこととされるわけである?!ちなみに、この辺は（も?）、実は関裕二氏の所論でもある！

先の4人の人物が、果たして、そのような恨みをもって、死んでいったのかどうか?!少なくとも、崇神を除いた3人に、その気配は十分にあるようであるが?!、その根拠（具体?）については、また別の機会に触れることとしたい！

ところで、改めて、次なる（結果的には最大の?）大仕事？であるが、端的には、百濟（残国）王（兄王）あるいは天日矛（ツヌガアラシト?!）の素性解明である！後者については、例えば福井県敦賀市にある気比神宮は、大加羅の王子ツヌガアラシト（→気比大神?）を祭神としているが、その気比大神と応神が名前を交換したという逸話がある?!これは、両者が同一人物であることを匂わせているとも言えるが、そのツヌガアラシトと、もう一人の新羅王子?天日矛が、実は、同一人物ではないかとも考えられている?!何故なら、この二人の来日譚

が、時期も国も、多少違うのであるが、話の筋も、渡来のモチーフも、ほぼ同じだからである?!

要は、ある時期（多分4世紀?）に、彼（ら）に投影されている人物が渡来し、直接的には、その後の皇室の祖となったのではないかということである?!他ならぬ関裕二氏も、そのように捉えられている!なお、天日矛の方は、同じ日本海側ではあるが、兵庫県の但馬地方に、その根拠地があったようである（→出石神社）!

とにかく、ここで言いたいことは、天日矛ないしツヌガアラシトは、ここで注目している「応神」の、実際のモデルなのではないか、つまり、その応神も、別の実在の誰かの「すり替わり」だったということである?!何故なら、まずは、応神は、先に述べているように、邪馬台国時代の神功皇后（多分台与?!）の子とされているからである!そもそも、時代設定が合わないのである!

だが、その神功皇后は、一方で、別名「息長帯姫」ともされ、その先祖は「天日矛」とされている!ならば、その応神のモデルは、「天日矛(ツヌガアラシト?!)」ということにならないか?!実在の人物と、それに仮託されている人物の錯綜は、ある意味仕方がないことであるが(そういう意図がある?!)、問題は、それを、(誰が)、何故、どのように造作しているかである?!

いずれにしても、誰かが、どこかでやましいこと(裏切り、乗っ取り?!)をしているということであるが、それを示唆しているのが、謎の人物「武内宿禰」(あり得ない長寿!)の存在であり、出雲神大国主の子とされる「事代主」や彼の別像と思われる?!「住吉大神」の存在である?!だが、ここでも、その根拠(具体?)については、別の機会に触れることとしたい!(余談だが、かの関裕二氏は、「浦島太郎伝説」は、彼らがモデルとなっているとしている!実に、面白い!)

さて、そうなると、最後の百済(残国)王(兄王)という人物が、改めてクローズ・アップされてくる!つまり、天日矛ないしツヌガアラシトが、かの「応神」のモデルということになれば、その虚像(「応神」)に仮託されている(すり替えられている)誰かが、別にいるということになる?!

そこで考えられるのが、次の「仁徳」であるが、彼が、ここで言う百済王(兄王)に仮託されているということになれば、ある意味矛盾はなくなる(記紀における彼の事績は、とても信じられるものではないが、漢風諡号からすると、そのように思えなくもない?!)?!そして、彼(「仁徳」)が、実際の倭の五王(五世紀頃)の一人、「讚(藤?)」と呼ばれた百済(残国)王(兄王)のすり替わりであれば、その事績は、まさにその「讚」のものだということになる?!

だが、この後、この王統の応神(→欽明)系と継体系の、兄弟血統間の後継者争いが続き、それらはまた、記紀において、かなりの潤色や造作が重ねられているようである?!これらについては、このシリーズの総仕上げ?として、改めて考察することにしている!

(10月15日)

⑳ 改めて全体を眺めると…壮大な構図（カラクリ?）が見えてくる?!

これまで⑰⑱⑲において、まずは「応神」に目をつけ、「神武」と、そのすり替わりのモデル「タケツヌミ」の関係（カラクリ?）を炙り出し、その関係から、「神功皇后」こと「息長帯姫」と「天日矛（ツヌガアラシト?!）」の関係、そしてまた、その「天日矛（ツヌガアラシト?!）」と「事代主」や「住吉大神」、さらには「武内宿禰」の関係、そして最後には、百濟（残国）王（兄王）こと「讚（藤?）」と「仁徳」の関係にまで、その類推（推理?）の幅（連鎖?）を広げてきた!

自分で言うのも憚れるが、それらが、本当に一連の事実（カラクリ?）ということになれば、それを真に解き明かすことが、壮大な?史実解明の第一歩となることは明らかである?!

とは言え、ほとんどの人は、それは眉唾物で、とてもじゃないが、信じられるものではないと、それこそ軽く一蹴するであろう?!もちろん、それはそれでよいのであるが、ここでは以下、改めて、以上のことから導き出される?、さらなる全体像（カラクリの大きな枠組み?!）を明らかにし、そこから、記紀全体の、より整合的・体系的な解釈の枠組みを提示してみることとしたい!果たして、暴挙（愚行?）の、さらなる積み重ねとなるかどうか?!

まず、最初に、その構図（カラクリ?!）の中で、一番の鍵を握っているのは「応神」であろう?!そのすり替わりのモデルとして、賀茂族の「タケツヌミ」が選ばれ、彼の存在と事績が、初代「神武」という人物に仮託されているということであるが?!、その虚像としての「神武」は、「ハツクニシラス・スメラミコト」として、遙か昔（神代→BC. 660年）の人物とされた!歴史を古くみせるためであるが、ある時期（多分4世紀?）に渡来した人物を「応神」とし（でっち上げ?）、彼を、その「神武」と表裏の関係にしたということである?!

ただし、実?年代的には、それを、邪馬台国時代とせざるを得なかった?!何故なら、その「応神」は、卑弥呼ないし台与（多分台与!）からの仮託である神功皇后の子として、「設定」されたからである!そうすることで、彼を、万世一系に組み入れることができるからである?!しかし、その神功皇后期は、邪馬台国時代のように見せかけてはいるが、順序的には、別の皇統であった?「崇神」の後とされた?!事実は、まさに、その「崇神」の後であったからである（結果、120年の繰り上げとなった!）?!

ちなみに、神功皇后は、おそらく皇統の始祖?として設定されてはいた?!卑弥呼ないし台与（多分台与!）を、「オオヒルメノムチ」、すなわち（後の?）天照大神に見立て、神功皇后が、あたかもそれであったかのようにしたからである?!もちろん、実際も、そういう立場ではあったろう?!

一方、別名「息長帯姫」である神功皇后は、他ならぬ「天日矛」の末裔とされ、その「天日矛」は、「ツヌガアラシト」、あるいは「事代主」や「住吉大神」、さらには「武内宿禰」とも関係があるように描かれ、言わば「応神」は、彼ら（特

に「住吉大神」や「武内宿禰」?!)の子というようにも匂わされた?!もちろん、天日矛が、ある時期の覇権者?であった、あるいはその後の覇権者は、彼からの派生であったわけであるが、そこは秘匿されたのである?!記紀編纂者達は、自らの直接の先祖が、どこかでやましいことをしている(裏切り、乗っ取り??)、あるいはその直接の系譜ではなかったということ、隠しておきたかったということであろう?!

なお、これについては、先に加えて、豊前(香春岳の秦王国?→秦氏・額賀氏や宇佐→宇佐氏・宗像氏)との関係、あるいは丹後半島(「竹野姫」→豊受大神・比売大神?)との関係等も、おそらく浮かび上がってくることであろう?!

ここでは、直接そのことは触れられないが、問題は、その後の覇権者?!であった「倭の五王」、とりわけその最初の「讚」(Cf. 讚・珍・濟・興・武)、多分彼が、件の「百濟(残国)王(兄王)」であろうが、彼と「応神」(→実は「仁徳」?!)の関係、そして、その後の「継体」、さらには「欽明」、そういった重要人物?の、各々の素性とその関係であろう?!ただし、最終的には、「欽明」の末裔が(天智にしる、天武にしる?)、その後の皇統の継承者であることは間違いない!しかも彼らは、百濟出身ではあるが、それまでの王権の縁戚者でもあった?!

しかし、そういったことは、直接には明示されなかった!と言うより、最終的には、藤原不比等・持統体制によって創出された!、連綿と続く天照大神(高天原)からの万世一系に糾合されたのである?!しかも、その頂点に立つ天照大神は、実は、持統の昇華(本来の天照大神は別の神様であり、しかも、それは男神であった?!)という形でもあった?!

以上が、「タケツヌミ」が「神武」に、「卑弥呼・台与」が「神功皇后」に、「天日矛(ツヌガアラシト?!)」が「応神」に、「百濟王(兄王)」=倭王「讚」が「応神」(実は「仁徳」?!)に、そして最後に、倭王「武」が「欽明」に仮託されている?!という、その(カラクリの)全体像である!改めて、日本の現皇室の直接の出自は、倭王「武」(ワカタケル大王?)=「欽明」からということになるが、そうだとすると、記紀では、「継体」は「応神(→「仁徳」)」の5世孫、「欽明」は、その「継体」の最後の子となっている!

だが、本当は、「応神(→「仁徳」)」と「継体」は兄弟、「欽明」は「応神(→「仁徳」)」の子かも?!いずれにしても、これについても、このシリーズの総仕上げ?で、必ず採り上げなければならない!

ちなみに、「欽明」の、漢風諡号もさることながら、「天国排開広庭尊アメクニオシハラキヒロニワノミコト」という和風諡号は、冷静に見ると、それこそ偉大な意味合いである?!ただし、事績としては、いわゆる「任那復興」関係以外は、顕著なものは示されていないとされている(ある意味当然か?!)!しかし、血筋的には、まさしくその後の系譜の原点的な位置づけなのである?!

(10月15日)

㊦ やはり変?!本当にその理解で良いのか?!が、沢山ある!どうする?!

これまで、20回に亘り、私の「古代史の旅」の、言わば序奏(助走?)として、始めた動機や経緯、それに当たっての、幾つかのトピックとその確認、そして、その中から湧き出てきた仮説(珍説?)の幾つかを(もともと持っていた疑問や妄想?も含めて)、ほとんど前後の脈絡はなかったかもしれないが(しかも、十分ではなかった?!)、現在の私の出来る限りで披瀝してきた?!

いずれにしても、一応これをもって、その第一ラウンドとしたいのであるが、改めてここでそれらを整理すると、我が国の黎明・建国期は、いわゆる「弥生人→渡来人(系)」によってもたらされ(そのプロセス・様相は、かなり複雑多岐ではあるが?!)、最終的には、藤原氏に収斂していった百済系渡来人によって、倭国→日本国として成立してきたということは言えそうである?!

もちろん、先住の(先に列島へ渡って来ていた!)縄文人(これとて、多種多様な種族・民族から成る?!と弥生人が、そっくりそのまま入れ替わったのではなく(縄文人がすべて駆逐されたわけではないということ!))、総体としては、まさに両者は融合的に生き合ってきたということではある?!

さて、そうした推移の中で、私は、多分そこに組み込まれている(と思われる?)記紀の叙述から、もちろんこれまでの、多くの人達の研究や考察の成果を活用させてもらいながらではあるが、一つの大きな流れ(骨格)を構想させてもらっている。それが、「タケツヌミ」が「神武」に、「卑弥呼・台与」が「神功皇后」に、「天日矛(ツヌガアラシト?!)」が「応神」に、「百済(残国)王(兄王)」=倭王「讚」が「応神」(→実は「仁徳」?!に、そして最後に、倭王「武」が「欽明」に仮託されているのではないか?!という、誠に壮大な?記紀の骨格(カラクリ!)なのである!

そこで、ここからは、さらなるラウンド(→第2ラウンド!)に入っていくべく、今の私は、記紀の解釈も含めて、これまでの「やはり変?!本当にその理解で良いのか?!」ということに着目して、それらを再び?俎上に乗せながら、曲がりなりにも得た?!第一ラウンドの成果を、さらに膨らませていきたいという思いに駆られている!

ただし、ここで言う「やはり変?!本当にその理解で良いのか?!」というものは、例えば、武内宿禰が390歳?の長寿だったとか、聖徳太子が、10人の人の話を同時に聞いたとかいうような、通常の間人ではあり得ない?話は、また別である!

もちろん、この他にも、いわゆる「神話」上の荒唐無稽な話は、ここには入っていない!要するに、そうした、明らかに造作されたこと(つまり、ウソや作り話!)は、ここでは除くということである。

だが、何故そうした造作(ウソや作り話)がなされたかの考察は、別な文脈では重要ではある!

さて、その「やはり変?!本当にその理解で良いのか?!」であるが、例えば「魏志倭人伝」中に、「奴国」という国が2ヶ所出てくるが、本当に、同じ国を2度挙げているのかどうか?!である。

これについては、これまでのところ、最初に出てくる「奴国」（「伊都国」の次に出てくる!）が、周辺国（旁国）を一通り紹介し終えた後、地理的な関係（つまり、それらを一回りした?!）を示唆するために、最後にもう一度、その国を挙げたというように解されているようであるが、本当にそれで良いのか?もう一つ別の「奴国」が、どこか（旁国の最後?!）にあったということはないのか、ということである?!

さらには、同じく「魏志倭人伝」中に、「伊都国」という国があるが、何故この国だけ、「好字（佳字）」（他の多くは、卑字?!）が使用されているのか?単なる事実なのか?!、それともそこに、（魏側の）何らかの意図があったのか?!これについては、読みとして「イト」ではなく、「イツ」だというような議論はあるが、ほとんど「好字（佳字）」・「卑字」の議論はない?!本当に、それで良いのか?!

そして、さらには、例えば伊勢神宮には、本当に天皇家の祖先が祀られているのか?!ということもある。これは、皇祖神を祀っている（はずの?）伊勢神宮には、持統天皇と、明治天皇以降の天皇を除いて、歴代天皇が参拝していないようであるが、本当にそういうことであったのか?!例え「神話」の中であったとしても、自らの祖先神とされている神（天照大神）をお参りしていないということは、常識的にはあり得ない?!そこに、どういう事情・謎があるのか?!

なお、これについては、多くの論者が指摘していることではあるが、あまり突っ込んだ論及はない（やはり、それはタブーなのか?!）?!

しかも、さらには、そこの内宮と外宮の関係がおかしい?!（内宮・天照大神は、実は男神で、外宮・豊受大神の女神と夫婦神ではないか?!）とか、初代神武天皇の陵が、明治時代以前にはなかった!明治に入って、やっと?橿原にそれが建てられた!（→本当は、神武天皇はいなかった?!）とか、天皇家の菩提寺であった「泉涌寺」には、天武～孝謙までの、いわゆる「天武系」の歴代天皇が祀られていない?!（→血統・系譜が違うということを宣言している?!）というような話もある?!

以上、これらについては、改めてこれから追究していきたいと思っはいるが、さらに記紀においては、必要以上に?!誇張造作されている人物がいる（逆に怪しい?と思われそうだが、そのことも、誰かが想定していたとしたら、記紀、とりわけ日本書紀は、ある意味痛快な?歴史書とも言える?!）!

その代表が「神武」であり、「神功皇后」であり、そして「聖徳太子」である?!三人とも、とても実在とは思えないが、その扱いからは、逆に、そこに投影されている人物の存在の重さ・大きさが炙り出されてくる?!これらもまた、改めて追究の対象としていきたい?!

(10月15日)

㉔ 早速、気になる?!もう一つの「奴国」?!そして、その国名の関連?!

さて、先の㉓の中で、早速気になるのが、まずは、もう一つの「奴国」?!そして、そこにおける?国名の関連である!すなわち、この「奴国」という国名は、例の「魏志倭人伝」において、倭(国)の構成国として、別立てで?2度出てくる!問題は、邪馬台国?の周辺国(旁国)の最後として、2度目?に出てくる「奴国」である?!

ただ単に、別な(そして、ほとんど情報もない?)国なのか?!あるいは、本当に、同じ国を2度挙げているのか?!ということであるが、これについては、これまでのところ、最初に出てくる「奴国」(「伊都国」の次に出てくる!)が、周辺国(旁国)を一通り紹介し終えた後、地理的な関係(つまり、それらを一回りしたということ?!)を示唆するために、最後にもう一度、その国の名前を挙げたというように、理解されてはいるようである?!

しかし、本当にそれで良いのだろうか!もう一つの「奴国」が、別にあったということは、全く考えられないのであろうか?!読み方はともかく、同じ(表記の)国が、特に断りもなく、そこだけ2度出てくることは、やはり変なのではないだろうか?!実は、私は、その理解については、以前から、かなりの?違和感を持っていた!

繰り返しになるが、「同じ(表記の)国が、特に断りもなく、そこだけ2度出てくる」ということが、本当にあるのかという疑問である!ただし、残念ながら、私には、今のところ、それを覆すだけの証拠など、何一つない?!

ということで、ここでは、その可能性の範囲内ということで、私は、一方で、例えば倭国大乱を契機として、当時の倭(国)の盟主的存在であった(後漢から「漢委奴国王」の印綬をもらっていた!)奴国の人々が、列島各地に散らばっていたのではないか(安曇族あるいは海部族、いわゆる海人族の拡散?!)、あるいは、もともと奴国の人々は、中国江南地方からの移住者(本人達がそう名乗っていた!)であり、北部九州の博多湾岸だけではなく、九州中部ないしは南部にも、いわゆる「国(クニ)」を有していたのではないか?!

とにかく、その双方の国(クニ)は同胞・同類であり(だから同じ国名?!)、その往来もあったのではないか?!古代における広大な交易路(海路)の存在は確かであり、彼らが、それを担っていた(たとえ一部であったとしても?)と考えられないか?!だとしたら、当然「二つの奴国」があったとしても、何ら不思議ではなくなる?!

それと、もう一つ気になるのが、南部九州の、いわゆる西都原古墳群のことであるが、その男狭穂塚(瓊瓊杵尊?)・女狭穂塚(木花開耶姫?)の存在と、その築造時期はともかく(それら自体は、年代的にはかなり後?!)、その地域一帯の種族・部族の存在である!そこは、「魏志倭人伝」に言うところの、いわゆる「投馬国」であるかもしれないが?!、というよりは、実は、さらにその南方の、現

在の都城市があるところであるが、そこの地名群と、以前にも述べたことであるが、北部九州の甘木地方及び近畿大和の地名群が、よく似ている?!ということであり、単純にそれは、何故かということにもつながってくるのである(何故、そこに「都城」という名があるのかということも含めて?!)。

その一帯の「諸県君(牛諸井)」や、仁徳妃のひとり「髪長姫」との関係も、もう少し後のことであろうが(→男狭穂塚・女狭穂塚?!)、とにかくその辺りには、(北部)九州倭国(はっきり言って、奴国!)の匂いというか、影というか、何かそういうものが感じられるのである?!海幸山幸の物語を残している(とされる?)南部九州ではあるが、その物語のモチーフは、北部九州と南部九州との、何らかの関係を示唆しているようにも思えるのである?!

さらには、ひょっとしたら「武内宿禰」との関係?!、すなわち南部九州の「弥五郎どん」伝説(「武内宿禰」の分身?)も、やはり同じように、気になる部分でもある?!ちなみに、その「武内宿禰」(→「弥五郎どん」伝説)については、文脈が多少噛み合わない部分もあるが?!、例の関裕二氏の壮大な?解釈から、多分に導かれるのかもしれない?!

どうということかと言うと、北部九州の支配(乗っ取り?)に成功した神功皇后・武内宿禰の出雲勢力(それと連合?した丹波・越・近江・東海、そして吉備も?!)、いわゆる「初期大和王権」が、何らかの理由で(切り離し?!→裏切り?!)、その派遣部隊である彼女ら(神功皇后・武内宿禰)を放逐し、滅ぼそうとした?!そのため、彼女らは、北部九州を逃げ、南部九州に落延び、その末裔(子ども?)である「神武」が、先の因果で出雲に崇られた?「崇神」に呼び寄せられ、記紀に示されているような「神武東征」になっている?というストーリーである?!

ちなみに、その彼女らの、南部九州への逃亡劇及びそのルートが、まさに「天孫降臨」の姿だとされているのである!

だが、出雲勢力(の一部?)が近畿・大和勢力に追い出された(裏切られた?)、いわゆる「出雲の国譲り」の何らかの史実は、その通りであると、私も思うが、その南部九州への逃亡(それを「天孫降臨」とすることや、そのルートも!)や「神武東征」(「日向皇子」の大和への招聘?)については、まだまだ合点のいかないものとなっている?!

しかも、今や私は、「神武」や「神功皇后」「武内宿禰」、さらには「崇神」も?!、誰かの「すり替わり」であり、そのモデルが、他にいる?!としているので、上のすべてを、単純に肯定することはできないのである!そしてまた、その逃亡ルートが、「笠沙の岬」(薩摩半島西側)という場所が絡んでいるので?!、有明海経由とされているが(つまり、邇邇芸命の降臨地がその付近ということ!)、その途中には、おそらく「狗奴国」勢力が蟠踞していたと思われるので、そちら回りの移動(逃亡?)はないと思っているが、いかがであろうか?!

(10月31日)

②③ 「狗奴国」の所在地が決まれば、「邪馬台国」の所在地も決まる?!

ところで、②の最後の部分で出てきた、いわゆる「狗奴国」の存在であるが、これもまた「邪馬台国所在地論争」と絡んで、なかなかその場所が特定され得ていない?!それは、そうであろう!それが示されている「魏志倭人伝」では、邪馬台国と狗奴国は「南で隣接」(「女王国」と境界を接する!)と書いてあり、その邪馬台国が決まらなければ、狗奴国の所在地も決まらないということである?!単純には?、邪馬台国「九州説」では、名前(読み)の酷似?もあって、現在の熊本県一帯(狗奴くぬ→熊くま?)ということで、すぐに落ち着く?が、「畿内説」では、現在の和歌山県(熊野地方)、あるいは(誤方位の可能性から?)愛知県(濃尾地方)等に比定されてもいる?!

もちろん、それぞれは、まったくの恣意で比定されているわけではないので、どれが正しいと簡単には言えないが、とにかく幾つかの候補地?が、その国(「狗奴国」)だと、互いに言い続けることは、学問的にはあり?であろうが、他ならぬ史実解明にとっては、甚だ残念、と言うか、まったくの損失?とも言えるのではないか?!

さて、これについて、面白い視点と説得力のある論考(研究)がある!菊池秀夫氏の、『邪馬台国と狗奴国と鉄』(彩流社、2010年)である。彼の発想は、もし「狗奴国」の所在地が分かれば、その「北!」にある「邪馬台国」も分かるという、ある種の背理法的手法?であるが、それによって、「邪馬台国」と「狗奴国」の所在地を割り出しているのである(→狗奴国は、現在の熊本県一帯?!)。私には、その結論は、大いに受け入れられるものであり、何故これが定説にならないのかと、訝しがる思いがするが、やはり、あのアカデミズム?、あるいはそことのつながりの為せる業なのか?、そのことを大きく採り上げたものはないようである?!

要するに、マスコミも、ほとんど騒がない(かった)?!本当にそうであるならば、誠に口惜しいことである?!ここでは、その詳細については触れられないが、発想の面白さ(鋭さ?)と論証の確かさ・深さには、やはり瞠目させられよう?!

その中で、特に注目されるのが、「女王国」や「狗古智卑狗」へのアプローチ、そして、ここが一番重要であるが、「狗奴国」と思われる地域における「鉄」と、それに関わる諸勢力の分布並びに移動という部分である!

これは、従来よく分からなかった(私だけか?)、弥生時代から古墳時代にかけての九州北部と九州中部の関係、そして、その九州中部(とりわけ阿蘇地方や大分県の大野川流域)と九州南部(この場合は宮崎県!)との関係が、ある人々・勢力の移動としてつながり(最終的には近畿大和にも?!)、単なる「狗奴国」探しだけではなく、いわゆる「神武東征」や「九州勢力」の東への移動が、考古学的な根拠も伴って、大きな動的・面的な理解として捉えられるものでもある?!

とにかく、彼も述べているように、記紀等の文献資料や考古学等の成果の、

細かい部分の解釈や表記上の齟齬があっても、大局的・全体的に説明できる大きな枠組み（筋！）を大切にするという捉え方は、今最も大切な視点なのではないかということでもある！（→今必要な古代史解明の必須アイテム?!）

以下、彼の、すなわち大局的・全体的に説明できる大きな枠組み（筋！）を紹介すると、まず、弥生時代の末期、九州には大きく五つの勢力があった（北部九州の女王国連合の国々／熊本県北部の菊池川流域／熊本県中部の白川流域／大分県西南部の大野川流域／宮崎県中部の勢力。ただし、その大野川と白川流域、大野川と菊池川流域の勢力には関連性があり、この三つの勢力は同一のグループとされる！）。

そこに、鉄器の出土分布と密度の関係や大型武器の出土状況を重ねると、さらに大きく三つのグループに分かれる（九州北部：玄海灘沿岸、響・周防灘沿岸、筑後川流域・筑紫平野の地域／九州中部：白川・菊池川・緑川流域、大野川・大分川流域の地域／九州東南部：日向灘沿岸の地域）。

そこで、その関係であるが、まず女王国連合の国々と菊池川流域の勢力は交戦していたので、菊池川流域の勢力は狗奴国の一部（中心人物は狗古智卑狗→菊池彦?!ただし、その中心は白川流域）。その九州中部と九州東南部は近畿・大和と関連性があり（特に宮崎県中部・一ツ瀬川流域には、二か所から庄内式土器?!、日本最古と推定できる前方後円墳、日本で2番目に多く鉄製武器を出土→川床遺跡。）、九州東南部の東遷しか考えられないという。

また、大野川流域（高添台地や鹿道原台地の大規模集落）、白川流域（西弥護免の集落）は、突如として廃絶（自らの手によって家屋を解体したり、焼いたりしている。集落の消滅は、争いによって追われたのではなく、自らの意思で移動を決意?!九州中部は九州東南部と一緒に別のところへ移動?!）。それらの勢力と宮崎県中部の勢力との関係は、後に大和王権となった宮崎県中部の勢力が、北に存在した狗奴国や女王国連合の国々を飛び越えて、畿内へ移動したとは考えにくいので、宮崎県中部の勢力も狗奴国の一員となり、狗奴国が女王国連合の勢力を破り、畿内へと移動したと考える方が自然?!

他方で、玄海灘沿岸の博多遺跡から、大型の鞆の羽口が発見され（これは、九州中部の技術?!）、その技術は、奈良県桜井市の勝山古墳などにもある（同古墳は纏向遺跡の中にあり、箸墓古墳より古い?!）?!玄海灘沿岸の地域は、女王国連合の領域であり、九州中部と九州東南部のグループが統合して（「神八井耳」一派→多氏のことか?）、九州北部の女王国連合の国々を滅ぼし、博多遺跡に鍛冶工房をつくった後に、纏向に移動した?!

幾つか異論・反論もないわけではないが、以上の枠組み（筋！）は、以前に述べた近畿・大和における北部九州の影や匂い、さらには神武に関わる「タケツヌミ」の存在と動きを絡ませてみると、さらに大きな（正確な?）史実解明の枠組み（筋！）を提示してくれるかもしれない?!そのことは、別途、改めて考察してみたい！

(11月7日)

②④ 「出雲」と「大和」、半島→九州→近畿、その時空に交わる史実?!

ところで、今や、私は、ある大きな時空の交わり、あるいは流れとでも言おうか、「出雲」と「大和」、そして朝鮮半島→九州→近畿という、時間と空間の交わり・流れ、ただしそこには、九州北部・中部・南部、あるいはそれぞれの海岸線に沿った地域・勢力の関係と動き、さらには吉備をはじめとする瀬戸内海の地域・諸勢力（当然、四国も含む!）、もっとさらには、今で言う東海・関東・東北の地域や諸勢力の関係と動きも含まれてはいるが、その大きな時間と空間の交わり・流れが、まさに我が国建国のプロセスの骨格ではないかということ、認めないわけにはいかない?!

これは、ほとんどが、他ならぬ関裕二氏の一連の著作からのアイディアとえば、まさにその通りなのであるが、彼の最新作『台与の正体 邪馬台国・卑弥呼の後継女王のゆくえ』（河出書房新社、2016年）によって、それはさらに強いものとなっている?!ただし、何回も言う?ように、そのすべてが了解されるものではないことも、改めて名状しておきたい!

いずれにしても、まさにこうした状況にある、現段階の、私の「古代史の旅」ではあるが、実を言うと、今後のアプローチにおいて、大きな分岐点を意識せざるを得ないのである?!それは、このまま、その関裕二氏の大きな認識の枠組み（仮説体系?）を下に、そのまだ了解できない部分を、私なりに逐一考察し、そこに上積み?していく作業を行っていくのか、それとも、それはそれとして意識しながらも、別な角度からのアプローチ（現在、頭の中にあるのは、例えば、百済系の人々、特に「倭の五王（讃・珍・済・興・武）」と呼ばれる人々及びその末裔達の、我が国への渡来、移住、そして皇統奪取?という、その動きを精緻に追っていくこと!つまり、多分彼らが、記紀等の、最終的な制作者?だと考えているが!）を、自分なりに行っていくのかということである?!

もちろん、その二つは、いずれの日?にか、同じ（関係してくる?）史実の解明につながっていくだろうとは思われるが?!、やはりその途中では、まだまだその他の仮説（体系?）とのぶつかり合いに、遭遇しなければならないということである?!要は、記紀が示す、とりわけ「応神」、「継体」、「欽明」、この三人の天皇?の出自や関係の部分を、どのように解明するかであるが、どこ（誰の説?）から、それを導いていけばよいのかでもある?!

ということで、これからどういうアプローチをしていけばよいのかを、自ら判断する意味も含めて、ここでは、現在までに、果たしてどのような史実解明の枠組み（仮説体系?）が出来上がっているのか（見え隠れしているのか?）、ほとんど自信などないに等しい私であるが、一度その全体像の描出にチャレンジしてみたいと思う?!とにかく、それがないと、本当に意味のある、さらなるステップもないであろうからである?!

そこでまず、3世紀前後、北部九州と近畿大和に、大きな集団・勢力（国?）

のまとまりがあったというところから、話を組み立てていきたい。周知のように、前者が、「魏志倭人伝」に示されている倭人集団・勢力、すなわち卑弥呼・台与を女王とする「邪馬台国連合」であり、後者が、纏向遺跡を残している（倭人）集団・勢力で、後の「大和王権」を形成した「近畿大和連合」であるが、人物比定の問題や所在地論争が大いにあるにしても、とにかく、そこに厳然と、それぞれの集団・勢力（国？）のまとまりがあったことは、考古学的見地からも、明らかなのである（くだいようだが、そのどちらかが、たとえ「邪馬台国」であっても、もう一つの勢力・国がなかったわけではない！）？！

史実解明にとって大切なのは、その双方の集団・勢力（国？）のまとまりの出自であり、関係なのである？！

そこで次に、その、それぞれの集団・勢力（国？）のまとまりであるが、前者は、その以前から、そこにいたということであるが（もちろん内部変動は当然ある?!）、後者は、ある意味忽然と、そこに集まってきた集団・勢力（国？）のまとまりということである！これを単純に、（同族の？）西から東への「東遷」と考えてはいけませんが（もちろん、その可能性もある?!）、別な意味で、前者は、外部からの刺激（侵入等？）を伴って存立（変貌？）していた?!後者は、何らかの理由で、そこに移動してきていたということである？！

そうならば、当然、前者は、その外部からの刺激（侵入等）とはどういうものであったのか（それは、「倭国大乱」であろう？）?!後者は、それらの集団・勢力（国？）のまとまりが、どのようにしてそうなったのかが、明らかにされる必要があるであろう？！

なお、前者については、まだ明確な説明（仮説体系？）は得られないが、後者の説明（仮説体系？）では、最も説得力があるのが、（関裕二氏の）「タニハ連合（丹波・丹後・近江勢力）」と尾張・物部氏（ニギハヤヒ系）、そして出雲・葛城氏の集結話である?!具体的には、最初に尾張・東海勢力が大和（纏向）に進出し、そこに「タニハ連合」が加わり、さらに、おそらく「物部氏」と思われる吉備勢力が参入し、出雲勢力（葛城地方）もそこに加わった?!

問題はここからであるが、そのように勢力拡大した「大和」は、出雲勢力（の一部）を北部九州に送り込み（倭国皇統、そして多分、鉄の争奪戦?）、九州倭国（邪馬台国連合／倭国皇統主権者）を崩壊させた?!出雲勢力（の一部）がそれにとって代わったが、大和の裏切り?によって、その出雲勢力（の一部）は、北部九州を追われてしまった?!

それが、「天孫降臨」、「出雲の国譲り」等の話へと、つながっていくとされるのであるが、尾張・東海勢力、「タニハ連合」、そして物部氏（そこには、同族?としての「紀氏」「海部氏」、多分実は「尾張氏」、さらには「蘇我氏」も含まれている?!）の協力と確執が、その後の大和王権の歴史となっていくということである?!

(11月18日)

㊤ 「邪馬台国」前後を、改めて問う?!「ヤマト」は、九州の思い出?!

さて、先の㊤では、現段階の、倭国・日本国建国に関わる、私の認識の枠組みを描出してみた（関裕二氏のそれに、ほとんど依拠はしているが!）。だが、お分かりのように、「魏志倭人伝」に示されている倭人集団・勢力、すなわち卑弥呼・台与を女王とする「邪馬台国連合」の、まさにその前後の状況の具体が、ほとんど示されていない?!

また、一方では、大和纏向の（倭人）集団・勢力で、後の「大和王権」を形成した「近畿大和連合」については、その形成過程については、関氏の仮説体系?でほぼ説明できるとは思われるが、実は、その、それぞれの集団・勢力が、いつ、どこから、それぞれの本拠地?に来て（移動・移住?）、そしてどのように大和に集結し（何故も含めて!）、その建国をなしたのかが、もう少し具体的に示される必要がある?!

何故なら、纏向には、それ以前は、そのような（倭人）集団・勢力はいなかったからである!そこで、ここでは、先の認識の枠組みを下に、これまで私なりに述べてきた関連史実?（あまり脈絡はなかったかもしれないが?）をそこに組み入れ、私の、さらなる史実解明への認識枠組みの拡大・強化（→仮説体系化?）に進んでいくことにしたい!

まずは、「魏志倭人伝」に示されている倭人集団・勢力、すなわち卑弥呼・台与を女王とする「邪馬台国連合」の、まさにその前後の状況の具体であるが、実は、以前私は、海部氏の『勘注系図』の事を出し、そこに示されている?卑弥呼・台与等の事を述べた（→㊤）。その「邪馬台国連合」の主力?が、海部氏・尾張氏・紀氏等であり、その主力?達に駆逐?された勢力が、「奴国」（あるいは「伊都国」?の王統=呉人系倭人?→安曇族）で、彼らは、他の列島各地へ移動した?!

なお、海部氏・尾張氏・紀氏等は、もともとは、伽耶系倭人として朝鮮半島南部に住んでいたが（彼らも、中国江南出身の倭人であり、列島との往来はあった?!）、ある事情（戦乱・苦役・飢餓等?）で、新天地を求めて九州に来た。だが、北部九州沿岸には、既に先客（安曇族）がいたため、その内陸部、さらには有明海沿岸部に、その本拠を構えた?!そして、そこで次第に勢力を増し、「邪馬台国連合」を形成した?!ただし、出雲勢力（→宗像族?）との協力（同盟?）で、そうなった?!これが、（北部九州での）「倭国大乱」の経緯であった?!

しかし、その後、「邪馬台国連合」の主力?は、南の狗奴国との戦いに敗れたか、あるいは新たな半島からの来訪（侵略?）者に放逐され（多分こちらであった?!）、ほとんどが九州島以外の地に、それぞれ移り（逃れ?）住んだ?!海部氏の場合は、大分県国東半島や四国・淡路島・紀伊半島（伊勢・志摩を含む?）、さらには丹波・越地方（そこは、「アマ・アマベ・アマルベ」等の地名を残しているところで、他にも、かなりある?!）、同族の尾張氏・紀氏等も、もちろんそれと軌を一にしている?!

そして、ここが重要であるが、彼らが近畿大和で、再び勢力を盛り返し（三輪・葛城王朝?）、倭国（邪馬台国）王統（親魏倭王に基づく?!）を奪還（再興?）した?!だから、その地を、（再び?）「ヤマト（倭）」とした?!まさに、「ヤマト（倭）」は、九州の思い出であり、誇りでもあった?!

だが、その後再び、彼らは、北部九州で勢力を蓄えていた、新来の百済系王族が支配する倭たい（大倭?）国の東遷（河内進出→倭の五王）によって、近畿大和の中心から追い出された?!しかも、その九州には、倭たい（大倭?）国の一部が残り（貴/基肆/木国→太宰府?）、その双方によって（百済特有の「檐魯たんる制」=一種の分国主義か?!）、列島は支配された（→倭王武の「上表文」?）?!

一方、近畿大和の中心から出された海部氏・尾張氏・紀氏等は、それぞれの地で（その名が地名となった?!）、一応の安定をみた?!ただし、その後の大和王権からは、配慮はされながらも、基本的には遠ざけられた?!それを暗示する?ものが、かの「ヤマトタケル」の物語ではないか?!

ここで、改めて注目されるのが、物部氏である?!記紀等によると、物部氏の祖は「ニギハヤヒ」とされ（直接の祖は、子の「ウマシマジ」とされる!）、神武より先に、どこからともなく（関氏は、それを「吉備」としている!）、大和に舞い降りたとされているが、ここで重要なのは、そうした人物や事績、それ自体の事実性ではなく、その人物や事績に託されている（と思われる?!）、言わば、その「ストーリー性」であることは言うまでもない!要するに、その人物・事績が、何故、そのように語られているかということである!

それは、具体的には、以前述べたような記紀の編纂方針によるものであるが（⑩）、端的には、それは、記紀編纂者（当時の政権）の正統性・正当性を示すものであった!具体的には、物部氏や蘇我氏の、本当の正統性・正当性（特に後者）を隠蔽し（捏造や造作によって?!）、全体としては、3世紀前後の「近畿大和（倭）国」の成立をもって、我が国のスタート（「纏向」→建国）とし、そこからの連続の中に、自らが位置しているということを示しているということである?!

ただ、妙なことを言うようだが、記紀編纂者達は、例えば「邪馬台国」や「卑弥呼」「台与」のこと、さらには、それ以前の「漢委奴国」のことも、「魏志倭人伝」等によって知っていたわけであるが、それでも、何故、この国（「倭→日本国」）のスタートを、神武による、近畿大和での建国?にしたのか?しかも、何故、その神武の出立地を、他ならぬ南部九州にしたのか?

そこを、どのように繙くかではあるが、端的には、そこは、ある意味どうでもよかった?!つまり、彼らにとっては、天孫降臨（渡来?!）という高貴な出自?があれば、それでよかったのであり、大局において、自分達はその末裔?!であるということが、記されればよかった?!実は、そのことが、彼らが、もともと「倭国」にいた氏族・種族ではなかったことを示す、確かな証拠ではないのか?!

(12月16日)

②⑥ 「奴国」は、呉人の一派?!その「安曇族」は、弥生時代の立役者?!

ここで、多少閑話休題的になるが、過日、飛騨高山、信州安曇野を訪ねたことを記しておきたい！旅の目的は別にあったが、折角の機会だからということで、一度は訪ねてみたいと思っていた「穂高神社」にも、足を運んだのである！この神社の主祭神は「穂高見命（ほたかみのみこと）」と言って、海神（わたつみ）族の祖神（おやがみ）とされ（安曇連の祖）、実は、かの有名な「金印」（漢倭奴国王印）の出土地である、福岡県志賀島にある「志賀海神社」を根拠地とした海人族、すなわち「安曇族」の頭領であるということである?!

何故、それこそ九州から遠く離れた、しかも海辺ではなく、内陸部の山間の土地に、海人族所縁の神社があるのか?!以前からそのことを大変不思議に思っていた私であるが、何せ素人の身であるので、直接訪ねたからと言って、何も分からないであろうと、高を括っての参拝?ではあった！案の定?境内や社殿、あるいは摂社等も、一応見て回ったのであるが、通常の神社訪問とほとんど変わらなかった?!そう！私には、有名観光地の一つでしかなかったのである！だが、正直今回の訪問は、それで良かったのである！訪れること自体に、意味があったのである！

しかし、である！ある意味、何という僥倖だったのであるか?!実は、その神社の社務所に、他ならぬ安曇族のことを記した本が、4種類も売られていたのである！それが全部、龜山勝という人の本で、私はその中の一つ『安曇族と徐福 弥生時代を創りあげた人たち』（龍鳳書房、2016年）を迷わず購入し（神社で本を買うなんて、思ってもみなかった!）、移動の電車や帰りの飛行機の中で、それこそ夢中になって読ませてもらった！

決してその道の専門家ではなさそうであるが、長い間、独自に安曇族の調査研究をされているようで、それこそ、専門家以上の研究姿勢と記述の確かさが滲み出ている本であった。冷静に考えれば、本の購入という点だけをみれば、本屋で買おうが、神社で買おうが、ある意味ビジネスに乗っかっただけなのではあるが、とにかく、私にとっては、久しぶりの驚愕の書でもあった！それこそ、思わぬお土産となった次第である！

さて、もちろん、そんなことはどうでもよく、要は、その本に、どういうことが書かれていたのかが重要である！私の事前の豆知識?によると、安曇野という地名や、そこにある穂高神社が、いわゆる海人族（「安曇族」）の奉斎する神社であることは知っていたわけであるので、端的には、いつ、どこから、彼らが、そこに入植?していたのかということで、まずは、どこの海から、どこの川を遡って、その地に着いた（行き来していた）のかということが、一番に知りたいことであった！

私の予想としては、ほとんど直感的ではあるが、日本海側の信濃川・千曲川辺りではないかと思っていたが、やはりそうらしいと、書かれていた！古代の

移動・輸送手段としては、ほとんどまともな陸路がない所を、四苦八苦しながら歩行していくよりも、海岸線に沿って海を走行し、大きな河川があれば、そこに入り、遡行し、たとえ分水嶺があつて、その河川が途切れていても、また、近くの、反対側に流れる河川を見つけ、そこまでの間は、乗っていた舟を引き揚げ、陸地を移動させ、その河川にまた舟を浮かべ、そこを下っていく。

あるいはまた、川の浅瀬で舟が操行できなくなった場合には、双方の岸から、綱のようなもので引っ張って動かしていたというような、移動・輸送の仕方をしていたというようなことも知っていたので、多分この地方の安曇族も、そうして入植してきたのであろうと考えていたのである。

したがって、問題は、それが、どこの河川であつたのかということであつた！しかも、その河川の存在は、稲作と直結していることは、ある意味当然であるので、一方で、河川の氾濫の心配のない、しかし水回りのよい、ちょっとした高台の耕地が確保されるところ、そしてまた、船の資材（大木）、鉄等の精製に必要な薪材の供給可能地といったようなところが、まずは選ばれていたということである。

このように、改めて、ここで新たな知見を得たことは、こうした海人族の入植活動が、まずは、稲作に適した、水の管理が出来やすいところで、今で言う「棚田」のような地形が最初であつたこと、そして、そうした稲作を行う人（農耕民→入植希望者）を、大きな船を使って、おそらく大陸から連れてきたのではないかということであつた！そうした海・河川の移動・輸送の達人であつた海人族が、「安曇族」、すなわち呉人の人々でもあつたということである！その海人族「安曇族」の根拠地が、まさに九州の志賀島であつたということでもある！

なお、名前に関することであるが、「安曇」→「安積・安住・渥美」等、「志賀（島）」→「志賀、滋賀、鹿」等、こうした名前の類似・連鎖が、全国至る所に認められることを思えば、まさに「安曇族」は、その海人族としての特性・有利性を如何なく発揮し、古代のある時期、少なくとも、件の「弥生時代」における「大立役者」だつたのではないかということでもある？！

また、「穂高」という呼称も、どこに記されていたか、今は失念しているが、関東・東北？に存在していたらしい「ホタカミ国」？、あるいは、現在の「北上（きたかみ）川」が、ひょっとしたら「ほたかみ川」と呼ばれていた可能性すらある？！

ただし、彼らは、例の「神功皇后」の朝鮮征討？において、海人族のリーダーとして活躍したことは分かっているが（→安曇磯良丸）、彼女らの没落で？（これ自体が史実であつたかどうかはともかく）、歴史から遠ざけられて（放逐されて？）いることは確かである？！おそらく、「天津甕星あまつみかぼし」（天香香背男あめのかかせお）の話等は、多分、こうしたことと関係しているであろう？！

（12月16日）

㊦ 記紀編纂には、もう一つの「基本方針」？があった?!それは、一体何か?!

改めて、記紀、厳密に言えば『日本書紀』が、以前㊥で整理?した「記紀編纂の基本方針」の下に、我が国建国の歴史を記して（創出して?）いることは間違いないが（「持統天皇」の時期までだが!）、ここで、やはり「もう一つの基本方針」?を意識せざるを得ない（ただし、それが、「基本方針」と言えるかどうかは怪しいが!）?!端的に、それは、一体何か?!

それは、㊦で述べた、「応神天皇」の扱い（位置づけ）に関わることであるが、それ以前の歴史については、直接自分達とは関わりのない時代（経緯）であったがために、彼をどのように、その歴史の中に取り込めばよいのか、ある意味その一点から、それまでの史実?の再構築（創出?）を行ったのではないかと、思えば思う程、そのように思えてくるということである?!

もちろん、それ以後も、いわゆる蘇我氏や物部氏といった、本来の皇統氏族?!を、捏造や潤色を駆使して、悪者にしたり、彼らの存在（出自?）をうやむやにしたりして、まさに歴史改竄?を行っているとは思われるが、そのことと、応神天皇の系譜組入れの努力?とは、同じ捏造や潤色があったとしても、まったく意味が違うのではないかと思うのである?!

では、どのように違うのか?!これも、端的には、創出された?応神（多分、倭の五王の最初の「讚」の虚像?!）が、それ以前の皇統（伽耶勢力?!→崇神系）より後から入って来た、つまり、それらとは異なる血統?の、外国、すなわち百済からの渡来者（侵略者?!）であったということである?!したがって、その応神（「讚」?!）を、どのように、構想している「万世一系」の流れに組み入れるか、そのことが、記紀編纂者側には、もう一つの大仕事だった?ということである?!

ちなみに、何故このようなことを、改めて持ち出したのかと言うと、その時代（4～5世紀）が、俗に「空白の4世紀」とか「謎の5世紀」とか呼ばれてはいるが、実際は、その時代の事績の投影であったろう「神功皇后」や「天日矛」の話が、あまりにも創作性が強く（逆に、そこに恣意性がある?!）、史実がぐちゃぐちゃにされている（ように思われる→かなりの混乱状態が生起していた?!）?!さらにまた、そこでは、例えば「倭の五王」（『宋書』等に記されている!）と、彼らに対応させられている天皇の事績（「雄略天皇」等）が、ほとんど結びついていないということもある?!

その決定的な証拠?が、600年の倭国王「アメタラシヒコ＝「日出処天子」の事績（『隋書』）である（記紀と、あまりにも違い過ぎている!）?!要するに、「応神系」と「倭の五王」、そして「アメタラシヒコ」の話（事績）とが、すっきりと一本の筋として繋がらないということであるが、そもそも、彼らの、そうした事績（『宋書』等に乗っていること自体）が、記紀に記されていないのである?!

そこで、もし、そうであるならば、その原因は、やはり「応神」にあるのではないか?!何故なら、他ならぬ「倭の五王」、そして「アメタラシヒコ」の話は、

外国の史書に出てくる話であるので、たとえ情報が少ないものであったとしても、一応、その記述は信頼できるのである（誤報や誇張等があったとしても、記述する側が作爲的な捏造や潤色を行ったとは考えられない!）?!

こうなると、例えば倭の五王の最後の「武」が、一体誰であったのかということが、改めて「鍵」を握ってくるが、通説?では、「雄略天皇」とされている。しかし、彼は、とても実在した天皇であったとは思えない?!むしろ、「武」を匂わせるために、創作?されたのではないかとさえ思われる?!それを示す逸話?が、葛城山中での「一言主神」との邂逅譚であるが、あたかも一言主神の方が、時の天皇であったと言わんばかりである?!しかも、そもそも一体何故、そんな話を載せる必要があったのか?!

いずれにしても、私は、時の政権（藤原政権）は、「応神＝昆支?（百済王族）」＝倭王讃から始まった、そして、次の「仁徳」（同一人物ではある!）で、その具体的な事績を担わせたと考えている。彼らは、九州から近畿（河内）へ移動し（大型前方後円墳を築造!）、一方で、最初、これも九州（当時「秦王国」と呼ばれていた国?）にいて、その後、近江・越の豪族（息長氏・額賀氏）に婿入り?していた、応神の弟?、すなわち「軍君ヨニキシ＝ヲホド王（男弟王）」こと「継体」が後に続くも、最終的には、応神の子である（記紀では、継体の嫡子!）「欽明」が、それらをまとめあげ（⑳）、その後、彼の後継が、皇統の正嫡となっていった?!

したがって、倭王「武」は「欽明」であり、その後裔の「蘇我氏」、そして彼らと姻戚関係をもっていた「物部氏」が、全体としては、正統・正当な後継者であったということである?!特に「蘇我氏」は、九州時代に「上宮王家」と呼ばれ、その後「播磨」、「河内」を経て、「大和（飛鳥）」に移動した?!ただし、ここでは、九州と近畿（飛鳥）に、言わば二つの政権（倭国と日本国?→㉔で記した百済の「檐魯制」?!）が、多分「白村江の戦い」までは、続いたものと思われるのである?!

なお、「太宰府」は、その二つの政権の、片方の政権（形式上は、兄＝本家筋?!）の（最終?）所在地であったが、「白村江の戦い」後、唐の「占領地→都督府（直轄領?）」とされ（倭国を代表する政権ではあった?!）、後に解体され、近畿大和朝廷の出先機関（政庁?）となった?!当時、「遠朝廷とおのみかど」と呼ばれたのは、そのためである?!

また、「白村江の戦い」は、近畿の「天智」の愚行?とされるが、実は九州政権の方が動いたもので、彼の政権は、ある意味仕方なく（百済王族としては、弟筋である?!）協力?したものである?!したがって、彼が、太宰府防衛のために、水城を造ったというような話は、後からの潤色である?!701年の、大宝律令の制定とされる年が、九州政権最後の年であったとする人もいるが、私には、その方がはるかに、全体の辻褄は合うように思われる?!

（12月19日）

⑳ 再び、記紀の骨格を確かめる！そこから、改めて見えてくるものは？！

さて、そうすると、㉑を受けて、記紀編纂者達が、改めて、一体どのような歴史の構築（改竄・捏造?!）を行ったのか、その大きな骨格を再確認する必要が出てくる?!以下が、そのあらましである?!

まず、ともかくも、5世紀の「倭の五王」の最初の人物、すなわち「讚」（彼が、時の政権の直接の先祖だった?!）を、いかにして、その万世一系の皇統譜に組み入れるかであった?!そこで考えられたのが、これも改竄・捏造の成果?であるが、彼を、神功皇后と仲哀天皇（実は、武内宿禰＝事代主＝天日矛?!のすり替え?!ある種の虚像?!）の子としての「応神」に、挿げ替えることであった?!何故なら、そうすることによって、それまでの皇統の正嫡とすることができるからである?!

ただし、繰り返しになるが、その神功皇后と仲哀天皇（武内宿禰＝事代主＝天日矛）の子というのも、それこそ創作の賜物?であり、彼らの関係の実体は、また別にあった?!それでも、その神功皇后と仲哀天皇（武内宿禰＝事代主＝天日矛）の関係が記されれば（確定されれば!）、それはそれで史実?となり、一応前後関係は保証されることとなるのである?!多分、それでよかった（成功した?）のである?!

次であるが、ここからは、これまで述べて（確認?して）きたことでもあるが、その神功皇后と仲哀天皇（武内宿禰＝事代主＝天日矛）の関係を軸にしながら、「邪馬台国」建国時及びそれ以降の、いわゆる九州倭国と近畿ヤマトの、まさに離合集散・確執の真相?（経緯）を、様々な情報・思惑を絡めながら、まとめていった?!

そこでは、邪馬台国連合（奴国や伊都国、あるいは狗奴国を含む?!）のその後、そして、それらと大いに関係のある出雲や吉備、あるいは大和や近江、丹波、伊勢、紀伊、東海等の、各地域（氏族・勢力）の動きや関係を、ある意味忠実に?記していくことであった?!

ここで、ある意味としたのは、もちろんここでも、自らの正統・正当性を確立（証明?）するための捏造や潤色等は、ふんだんに込められているということである?!その最たるものが、まさに「神武東征」の物語であろう?!

なお、その「神武東征」の物語であるが、これは、前にも述べたことであるが（㉒）、応神の正統・正当性を保証する要素を、もちろん盛り込んだものであった（むしろ、そのことが目指されていた!）?!そして、その後、これまではあまり踏み込んではいないが、実際の最初の王権（ヤマト王権＝三輪王朝?）が、実は、最終的には吉備によって主導されたもので（ニギハヤヒ→崇神?）、その後出雲系（オオモノヌシ）と融合し、九州倭国（邪馬台国?）を凌ぐ（飲み込んだ?）ものとなったことを、大局的に述べている?!そして、それらを誘導していったのが、実は尾張であり、近江であり、丹波であったということである（④⑧⑨等）?!

しかし、これらは、史実として示すことはできなかつたのであり、すべて「神話」という形で述べられていることは、何度も述べてきた通りである?!ここでは、その最たるものが、おそらく「出雲の国譲り」の物語でもあろう?!

ところで、別な意味で、最も意を注いだのは、これも、以前述べたように(⑩)、書紀最後に登場してくる「持統天皇」、その人の扱いであつたらう?!そこでは、まさに黒幕?である藤原氏の思惑?が、もろに露呈しているとも言えるが、彼女をもって、高天原の天照大神としたということである(もちろん、そのモチーフと必要性は、当然邪馬台国の女王卑弥呼にあることは言うまでもない!)?!

その最たるものが、まさに「天の岩戸」の物語であり、後の「天孫降臨」の物語であらう?!ここでは、女王卑弥呼ないし台与を、高天原の天照大神に昇華させ、「持統天皇」自らが、その地位?に仮託されていることは、ほぼ間違いないであらう?!ちなみに、「天の岩戸」のある部分(再び顔を表した部分!)は、女王の君臨と、そこにおける卑弥呼と台与の交代劇が暗示されている?!

以上、このように、記紀は、ヤマト建国期の歴史(あるいは以前も含めて?)を、ある意味知り尽くしており、それが自らの正統・正当性を直接保証するものではなかつたがために(当然と言えば、当然である!),それらを、いわゆる「神話」の世界に封じ込めるとともに、一方で、その神話の世界から抜け出したように、「神武」と、その後の事績(個人や氏族等の関係や争い等?)を展開させているのである?!もちろんそれは、史実の反映でもあるが、もう一つは、後の応神の実在?を、秘かに?盤石にさせるためのものでもあつたということである?!

ちなみに、神武、崇神、応神並びに神功皇后の、いわゆる「神」を巡る話は、以前にも出したが(⑨)、他ならぬ「崇神」については、あまり深入りはしていなかつた?!しかも、何故、そこにおける「神武」と「崇神」が、同じ読みをもつ「ハツクニシラス・スメラミコト」とされたのか(神武→始馭天下之天皇/崇神→初肇国天皇)、それについても、十分な説明(推理?)はできていない?!使用されている漢字、それ自体の意味、あるいは、その表記が、全体としては、どういう意味合いをもつのか?ということについては、私にはよく分からないが、二人とも、我が国建国の創始者であつたという意味合いは、同じであるとされている?!

だが、(時代的にも別の時代とされているのに!)、やはり「建国の創始者」が二人いるということは、おかしいことではないか?!これについては、先でも結論的なことだけは述べていたが、改めてそれを示すと、本来の建国者は、別系統の「崇神」(もちろん、誰かの虚像?!→ニギハヤヒ?!)であつた。しかし、史実?、すなわち物語全体の構成(創作?)上、「神武」を(も?)、もう一人の建国者にせざるを得なかつた?!まさに、そういうことではなかつたか?!

(12月21日)

⑳ 事実！としての「倭の五王」期?!その解明が、重要な鍵となる?!

ところで、ここに来て、「謎の5世紀」と呼ばれる、いわゆる「倭の五王」の時代の史実?を、いかに復元できるか?!ひょっとしたら、それは、記紀全体を解明する最良の手立てとなるのではないか?!それがまた、我が国の、建国の歴史全体を解明する、重要な鍵（橋渡し）となるのではないか?!

改めて今、私は、そのように思い始めている?!端的には、その時代以前及びその時代以降の史実?が、それによって、一つの筋（本来の流れ?）として、描けるのではないかということである?!

だが、これは、これまで縷々述べてきたことと異なるということでは、決してない!要は、いつ、どこで、誰が、何故、どのように（したから、そのようになったのか?）の理解、いわゆる5W1H的な真実の把握が、改めて必要なのではないか?!それが、「倭の五王」期の解明によって、十分になされるのではないか?!今、まさに、そういう感触（期待?）を抱き始めているということである?!

では、改めて何故、そのように言えるのか?!それは、その時代以前及びその時代以降の物語?にも、多くの人々が指摘しているように、様々な捏造や粉飾が施されており、それぞれの史実?解明が、なかなか出来ないということもあるが、一応それはそれで置いておくとして、この「倭の五王」時代が一番分かりづらく（支離滅裂?）、前後の史実?の接続が難しい?!

したがって、これは、ある意味逆転の発想かもしれないが、そうした史実?の捏造や粉飾が最も激しく行われている（その大きな要因を有している?）が故に、そうなっているとしたら、まずは、そこをきちんと解明?することが先決なのではないか?!そうすれば、その前後、あるいはそれを含む全体の史実?が、より鮮明になってくるのではないかということである?!

ということで、そうなると、この「倭の五王」時代の解明に当たって、具体的には、何が、その突破口となるのか?!それは、明らかに、「応神天皇」の奇妙な?!出自であるが、その応神を巡る「神功皇后」や「仲哀天皇」あるいは「武内宿禰」、さらには、後の「雄略天皇」の解明ということになる!

前者については、以前にも述べたが（⑰⑱等）、後者については、通説では、「倭の五王」の最後の「武」が「雄略天皇」とされているが、彼と、他の「倭の五王」との血脈関係は、どのように整合するのか（多分、しない!）?!

ただし、これについては、これまでも、一応その疑義は出されているので、ここでは、別のアプローチから、すなわち中国史籍に示されている「倭の五王」との照合関係の不確かさ（無さ?）に、改めて着目してみたい!

そこで、これを手助け（論証?）するのが、実は、以前にも紹介した兼川晋氏の『百済の王統と日本の古代』（不知火書房、2009年）である?!そこでは、倭の五王が、応神や継体、さらには欽明、そして、まさにここの部分が一番の不審の元?ともなろうが、いわゆる600年に隋の煬帝に書簡を送った「日出処天子」、

すなわち「アメタラシヒコ」の正体（その居住地も含めて!）と、どう関わるのか?!

通説では、ほとんど苦しい釈明?にしかならないのであるが、その関係が、ある意味正しく?究明されているのである?!

ちなみに、この辺りが、私が最も信頼、依拠している、関裕二氏の所論と違う（あまり追究されていない?）部分のようにも思われる?!

それはともかく、まず、「倭の五王」とは、当時、(九州)倭国を支配?していた百済王族であり、残国（ある時の百済の一部?の呼称?!）の「兄王」（母系が倭人、父系が扶余・高句麗系→沸流系余氏と呼ばれ、百済王族の宗家!）が、「神功皇后」「武内宿禰」の九州拠点（ヤマト政権の駐屯地?!）であった「貴国」（基肄国?→後に、今の久留米市の「高良大社」に移動?!）に渡来し、その後実権を奪い（これが、「出雲の国譲り」の原形?!）、「倭王」を名乗った（彼が、応神のモデル?!）。

その「兄王」の子が、讚、珍であり、次の済、興、武が、別系ではあるが（→温祚系余氏）、同じ百済王族として、「倭王」を継承した?!つまり、珍と済（温祚系余氏毗有王の子・慶司→近蓋鹵王）は直接には繋がらず（珍の養子?!）、本国の事情で、済が百済に戻り（通説では死んだとされている?!）、百済王となった?!

そこで、すぐに、済の子の興が倭王を継ぐが、その即位に際して、仇台系百済（この時の百済の主家）の余慶（→蓋鹵王）が、彼の後の弟の「昆支」（=「旨王」。百済七支刀に見える?!）と「軍君」（男弟王→後の継体?!ただし、彼は、記紀が描く、越出身のもう一人の?継体=彦太尊とは異なる?!）を、倭国に送った?!

その後、昆支（旨王）は百済に戻ったが、軍君は、豊（「豊の国」→倭国の分国?!）の政権者として頭角を現し、筑紫の本家（後の、国造とされている「磐井」家?!）を滅ぼし（→「磐井の乱」）、倭国を乗っ取った?!

なお、百済王統には三系統（沸流系・温祚系・仇台系）があり、沸流系が宗家とされている?!

問題は、この軍君（継体）と最後の武（王）の関係であるが、武（王）は筑紫の本家の「磐井」であり、軍君は豊（倭国の分国?!）の政権者であったが、その後、兄王（→応神?）の子の「欽明」（蘇我氏の祖とされる「稲目」?!に仮託）に滅ぼされ（→辛亥のクーデター?）、倭国皇統は、この欽明（稲目）の後裔（いわゆる「蘇我氏」!）によって継承されたというように繋がる?!

ただし、この蘇我氏（本宗家）も、後に藤原氏によって滅ぼされ（→645年乙巳の変、通説では「大化の改新」と呼ばれる!）、我々の知る奈良・平安の時代を迎えることとなる?!

だが、ここでは、彼の解く、(九州)倭国の、筑紫と豊の関係（「檐魯制」→二都制?!「豊の国」とは、いわゆる「秦王国」と呼ばれた国か?!）が、まだよく分かっていないので、これも含めて、さらなる解明が必要となる?!

（1月9日）

③⑩ 結局は、九州と近畿・大和との関係を、もう一度洗い直すしかない?!

②⑨では、改めて「謎の5世紀」と呼ばれる、いわゆる「倭の五王」時代の史実?を、いかに復元できるか?!ひょっとしたら、それが、記紀の全てを解明する手立てではないか?!としてきたが、結局は、その時期に対応する「応神」や「仁徳」等、さらには「雄略」や「継体」等、そして新たに「欽明」の、その時代の天皇とされている人物の具体像やその関係、そしてまた彼らの居住地(王都)を、どのように把握すればよいのかという、新たな、しかし、考えてみると、何のことはない?、最初の疑問に戻ってこざるを得なくなった?!

つまり、九州と近畿・大和との関係である?!しかし、九州倭国説(→筑紫と豊の関係)もあり、やはり一筋縄ではいかない?!もう一度その辺りも含めて、洗い直すしかないということであろう?!

とにかく、こういうことではなかったか?!まず、記紀編纂者達は、「倭の五王」の正統な?後継者であった蘇我氏(本宗家)を引き摺り下ろしたこと(「乙巳の変」→「大化の改新」)、したがって、その蘇我氏(物部氏も含めて?)の出自や、その大本の「倭の五王」のことを、万世一系の事績に、直接組み込めなかった?!そしてまた、その「倭の五王」の嫡流の九州倭国(→磐井)の存在も、隠蔽せざるを得なくなった?!

一方で、それらを煙に巻くように?、時の持統天皇を「天照大神」に昇華させ、そこから発する万世一系の皇統系譜を、「神話」を創作・駆使しながら構築した!そこでは、史実としての「卑弥呼や台与」の位置づけ、あるいはそこから形成されていった真実の動き(「出雲の国造り」や「ヤマト建国」等)を、その皇統系譜構築の過程に、巧妙に絡み合わせた?!だが、そこで腐心したことは、史上明らかな「倭の五王」を、どのように、そこに融合させるかであった?!

そういう中で、「神武」や「崇神」、そして「応神」、さらには「雄略」「継体」「欽明」といった重要人物(天皇)を虚構し、実際の人物を、そこに投影させたのである?!もちろん、時代とか、人間関係等は、必要に応じて、かなりの操作を加えた?!

その最たるものが、「神功皇后」や「武内宿禰」であり、「住吉大神」や「大物主」、さらには「事代主」等であったろう?!だが、当然、それらにも、それに比定される人物がいたということではある?!

例えば、「神功皇后」は、邪馬台国の卑弥呼や台与に(多分、メインは後者!）、「武内宿禰」は、「天日矛(ツヌガアラシト)」に、そして、「住吉大神」や「大物主」、さらには「事代主」は、その彼の、別の形(分身?)としてである?!

後者については、それだけ「天日矛(ツヌガアラシト)」の存在は大きかった?!多分、彼が、ヤマト王権の、真の確立者だったからであろう?!伊勢神宮や住吉大社、さらには、それらと密接な繋がりがある?出雲系の各社(「出雲大社」「熊野大社」等)、宗像大社、さらには宇佐神宮等は、そうした彼らの離合集散の過

程で生じた、ある意味での記念碑であり、そこに生きた人々の、鎮魂の地でもあったのではないだろうか?!

それと、もう一つは、そこでの地理的・場所的な問題ともなるが、やはりそこには、九州と近畿・大和との関係が、まさに大きな骨格をなしているということである?!しかも、それらは、多分ある時代までは、同族か仲間関係であったろう?!しかし、そこには、何らかの諍いや外部からの侵入があり、移動や、様々な離合集散が繰り返されたということでもある?!

具体的には、奴国や伊都国(安曇族?!)が、各地に版図を造り、それを頼って、邪馬台国連合(九州倭国)から、海部氏・尾張氏・紀氏等が各地に移り住み、そこに物部氏(吉備?)が参入し、最終的には、蘇我氏(上宮王家)が、大和飛鳥の地にて、新たな政権を造った?!それを奪った(奪還した?)のが、同じ九州出身の天智であった?!その新しい拠点が、滋賀県大津市(近江京)であった?!

ところで、こうした地理的・場所的な問題は、大きくは、最初は北部九州が舞台ではあったが、いわゆる「邪馬台国」前後(「倭国大乱」期)において、近畿・大和の方に、もう一つの政権勢力が構築され(尾張・近江・丹波・吉備・出雲による三輪=ヤマト政権?!)、その政権が徐々に、祖国?九州倭国を侵食、そして最後には併呑し(乗っ取り?!)、まさに倭国=日本国を樹立していったということ、いみじくも示しているのではないか?!

ただし、九州倭国には、筑紫の倭国と豊の倭国?、その二つの政権勢力が両立し、多分後者が、ある時期に近畿に移動し(→息長氏?)、それを中心として、ヤマト政権は、中央政権としての形(皇統)と力を備えていった?!これらは、基本的には渡来系倭人によってなされたものであるが、当初は、半島南部の伽耶系倭人、そしてその後は、百済系倭人(百済系王族!)によってのものである?!

もちろん、それ以前は、中国江南から渡来した南方系倭人(呉・越の末裔。基本的には、倭の「奴国」等の、安曇族等の海人族であった?!)が、倭国(→邪馬台国連合)を形成していったことは、言うまでもない?!ちなみに、藤原氏が、その総仕上げを行ったということであろうか?!

最後に、肝心の「倭の五王」とは、一体誰を指しているのか?!今のところ、讚=百済・残国兄王(応神?)の子(→仁徳?)、珍=讚の子(→履中?)、済=百済・温祚系余氏毗有王の子・慶司(=近蓋鹵王)(→反正?)、興=済の子(→允恭?)、武=済の子=筑紫の君・磐井?(→安康?)というような対応関係が描けるが、とにかく、これを見る限りにおいては、倭王武が、雄略である可能性は、ほとんどない?!やはり、後の政権による皇統譜の創作は、中国史籍に見える「倭の五王」の系譜とは異なるということである?!

では、これらの仮説体系?を、これからどのように膨らませていくかであるが、これもまた、改めてこれからであろう?!

(1月9日)

31 「倭の五王」が百済王族であり、最初は九州に来ていたとしたら?!

③⑩では、最後に、肝心の「倭の五王」とは誰かということで、讚＝百済・残国兄王（応神?）の子（→仁徳?）、珍＝讚の子（→履中?）、済＝百済・温祚系余氏毗有王の子・慶司（＝近蓋鹵王）（→反正?）、興＝済の子（→允恭?）、武＝済の子＝筑紫の君・磐井?（→安康?）というような関係を揚げてみた!

もちろん、これは、兼川晋という人の所論を、ほとんど採り入れたものであるが、私も、以前からそのように受け止めていたので（百済系だということ!）、今のところ、それに乗っかることとする?!若干、首を傾げるところもあるが、基本的には、それで一步進めていきたいということである?!

いずれにしても、そのことが事実（に近いもの?!）であれば、それを核として、我が国建国の歴史を解明していかなければならない!しかし、その確たる証明はできない!ならば、そのことを、ずっと主張し続けることしかできないのか?!

ただし、それに近づくことは、それなりに出来る?!その方途は、一つは、これまで通（定?）説とされていることの誤謬または矛盾を指摘し、よりよい通（定?）説に改善することである!もう一つは、あることに関わる諸説を、可能な限り集約していき、一定の通（定?）説に格上げ?していくことである!ちなみに、もう一つは、新たな発見や説得力のある論を構築することである!

だが、私の場合には、最初にも述べたかと思うが、そのようなオリジナルなものは、出しようがない?!ということで、ここでまた、そういうことを言い訳?しても埒があかないので、少しでも前に進むことにする!

例えば、ここでの「倭の五王」とは直接関係はないが、初代天皇の「神武」についてである!紀元前660年の即位ということで、たとえ年代が操作（繰り上げ?）されているとしても、彼自身は、やはり架空の存在としなければならない?!単純に言えば、その時代には、彼自身は、生きていなかったということである?!

とは言え、そういうことがあったと目される3世紀前葉?に、彼に仮構された（モデル?となった）人物はいた?!私は、それを、日向の曾の出身の「タケツヌミ」（「賀茂・鴨族」の祖。神武期では「八咫鳥」として登場?!）としたが、一方、実在は確実とされる第10代天皇の「崇神」についても、ある意味事情は同じである?!

かの関裕二氏は、神武の大和入りに顔を見せている?「ニギハヤヒ」（物部氏の祖。吉備から逸早く大和に入っていた?!）が、彼に仮託されているとしているが、私もそのようには受け止めている?!なお、「神武」「崇神」ともに「ハツクニシラススメラミコト」（用字は異なる!）とされ、その意味で、二人が重要な人物（立場）であったことは間違いない?!

ちなみに、その間の天皇は「欠史8代」と呼ばれ、「神武」と「崇神」の間を繋ぐための虚構の存在ともされているが、単純に存在しなかったと言うならば、それはそれで、また問題ではあろう?!

とまあ、こんな感じのアプローチとはなるが、改めて「倭の五王」時代のことを、いくつか取り出してみたい！最初は、第15代天皇「応神」についてである。通説では、この「応神」からは、まさしく実際に存在した天皇で、現皇室のルーツだということにも捉えられている？！

一方、「倭の五王」（讚・珍・濟・興・武）の時代とは、年代的には395～515年、まさに「空白の4世紀」「謎の5世紀」の、ほとんどということになる?!一般には、中国（北朝系?）の史書に、その間の、とりわけ4世紀の情報がないということになっているが、南朝系の『宋書』『南齊書』『梁書』等には、「倭国」の情報ではあるが、あることはあるのである?!

要は、こちら（南朝系）の情報が、正しく?認識されていないということではないか?!と言うより、その時代の「記紀」の記述と、その「倭国」の情報との整合性が、ほとんど取れていないということである?!

そこで、まずは、「応神」の生存・在位期間であるが（200～310年・270～310年※干支2運=120年、引き上げられているとされるので、在位390～430年?また、110歳の寿命とされているが、当時の「2倍歴」も考慮する必要はある?!）、とにかく大きな齟齬（混乱?）がある?!

しかも、その出生譚（父親が「仲哀天皇」とされるが、実は「住吉大神=武内宿禰=事代主?!」とも?!）が、怪しさの極みでもある?!また、母親とされる「神功皇后」自体も仮構された人物だと思われるので、そのまま彼女の実子とは見做されない?!

一方、それを、それこそ百済からの渡来王族と考えれば（兼川氏）、その怪しさは氷解?する?!何故なら、そのことはまったくの虚構ではなく、それなりの真実性が賦与されるからである?!それが、例えば百済・残国の「兄王」（在位477～506年）であり、彼（の後裔）と、一方の「神功皇后」「武内宿禰」の九州及び新羅征討、及びそこから「応神」の生誕と彼らの東征の話、そしてそれらを実証する?「河内王朝」（「仁徳」等の活躍?!百済系の要素が大きく顕在化してくる?!）との関係である?!

これらは、まさに「倭の五王」時代と、大いに符号しているので、河内王朝の始祖とされる「応神」が、百済系王族（「兄王」or「昆支」）であることは、かなりの蓋然性がある?!ただし、その「応神」が、百済・残国の「兄王」あるいは、その後渡来してきた百済王族の「昆支」であったのか、それとも両者は同一人物だったのか、それは、今のところ何とも言えない?!

とにかく、「応神」（とされる人物）が、百済からの渡来者であったと考えると、様々なことが整合してくる?!とは言え、その整合性も、例えば「宇佐神宮」と「応神」の関係、つまり、それがどのように繋がるのかといったこと等もあるので、さらに整えられなければならない?!

（1月15日）

32 改めて、「宇佐神宮」と「応神天皇」は、どのようにつながるのか?!

㉑の最後で、再び? 「宇佐神宮」と「応神天皇」の関係を出してきたが、周知のように、宇佐神宮には、「応神天皇」とされる「八幡大神（大菩薩→「神仏習合」?!)」、その母とされる「神功皇后」（息長帯姫）、そして、これは謎の女性（「宗像三女神」とされている!）とされているが、「比売大神」という、3祭神が祀られている?!

おそらく、「比売大神」は、邪馬台国女王「台与」と考えられるが（そうなれば、「台与」=「宗像三女神」となるが?!）、彼（彼女）らが、具体的（実際?）には、どのような関係にあるのか、そのことを明らかにする必要がある?!

ちなみに、そこでは、主祭神?の「応神」（「一之御殿」とされているが、左側!）を差し置いて?、中央の正殿?（二之御殿とされてはいるが?）に、「比売大神」が祀られている?!当然右側（三之御殿）には、「神功皇后」（息長帯姫）が祀られている!

同社によると、八幡大神（応神）は、571年（欽明天皇の時代）に宇佐の地に現れ、725年に現在地に御殿が造立され、祀られてきた（→宇佐神宮の創建）。比売大神は、神代に宇佐嶋に来たとされ（『日本書紀』）、八幡大神（応神）より古い神、地主神として祀られてきたが、八幡神が祀られた6年後の731年に、神託により二之御殿が造立され、宇佐国造が、その比売大神を祀ってきた。

そして、三之御殿は、神託により、その後の823年に造立されたとされている。これによると、571年（欽明天皇の時代）に、より古い、宇佐の地主神である「比売大神」の所に、八幡大神（応神）が現れたとされることが、最も気になる場所である?!

いずれにしても、一つの答えは（「応神」が、百済・残国の「兄王」あるいは百済王族「昆支」であったかどうかはともかく!）、以前の⑩⑪でも述べたように、記紀編纂者達が、（百済からの渡来者である?）ある人物を、いわゆる万世一系の皇統譜に入れるために、「神武」や「崇神」という天皇を併せ創出し、彼らとの関係（対比?）の中で、まさに「応神」という名の天皇を仮構したのではなかったか?!

そして、実は（一種のカラクリ?ではあるのだが?!）、一応その「応神」が「神功皇后」の子とされるのであれば、その母親である彼女（こちらは、多分「息長帯姫」自身として?!）と、その彼女に仮託されている（と思われる?）、邪馬台国女王「台与」（あるいは「宗像三女神」?!）が、一緒に祀られていることは、ある意味当然と言えば、当然であろう?!逆に、創祀年から分かるように?、そのように、辻褄を合わせたということになるのではないか?!

一方、それはそれで押さえておくとして、ここでの問題は、何故「応神」が、「宇佐神宮」がある大分県の宇佐の地と関係があるのか、あるいはまた、その「応神」が、九州に渡来した百済王族であったとして、何故、その宇佐の地に現れたのか、その疑問（謎?）にこそ、答えなければならないということである?!

そこで、一つの答え（の可能性？）としては、その宇佐の地が、当時「豊国」の一部（ひょっとしたら、中心地？）であり、その「豊国」が、件の「応神」の生誕地（これは、あまり可能性はない？）、あるいは渡来地または渡来後、その地に移動してきた?!ということが考えられる?!

さらにまた、自らは、その宇佐の地には赴いていないが、彼の後裔達が、その地に移動し、八幡大神や宇佐神宮を創出した?!そういうことも、一応考えられる?!

ちなみに、後の有名な「宇佐八幡託宣事件」（「道鏡事件」とも言う?!）からも明らかのように、皇統譜あるいは実質的な政権保持者と、そこが大いなる関係を有していたことだけは確かであろう?!

ここで、以前にもちょっとだけ触れたことがあると思うが、その視界に入ってくるのが、北九州東部?の「秦王国」と呼ばれた地域（これが、「豊国」の母体?!）であり、その地域との繋がりが見える「額賀つぬが氏」（この地の「香春神社」の神主?）や、それこそ「息長氏」との関係である?!

彼らは、基本的には近畿（近江や若狭）の氏族と見なされているが、この地との関係は、大いにある?!多分、いつの時点かは定かではないが、彼ら（の一部?）が、近畿（近江や若狭）へ移動（移住?）したものと考えられる?!もし、これが本当であるならば、さらなる整合性が生まれてくることになる?!果たして、どうなのか?!

ところで、その「秦王国」（「豊国」?）と言えば、謎の古代氏族「秦氏」を忘れてはいけぬであろう?!事実、豊国、とりわけ「豊前」には、この秦氏が、大いに居住していたようである（これは、事実である!）。ただし、この秦氏については、ここで扱うには膨大過ぎるので、別の機会に譲ることとして、ここでは最後となるが、今回宇佐神宮に関わって、「比売大神」という女性に、別な意味で考えさせられた（ヒントになった?）ことは大きい!

それは、当社が、「比売大神」を「宗像三女神」（多紀理/田心姫・湍津姫・市杵島姫）としていることである。「三女神」というのは、それぞれ違う名前がつけられてはいるが、本来は一人の神（女性!）であろう?!そして、そのヒントの一つが、もう一つの真実?、（出雲の）大国主命の後（正妻ではない!）とされている、三女神の一人「多紀理姫 or 田心姫」との関係である?!もちろんそれは、出雲と宗像氏の関係であるが、その宗像氏（「三女神」）が宇佐とも関係しているということで、出雲と宇佐の関係も、そこに見え隠れしてくる?!

ちなみに、玄海灘沖の「沖ノ島」（海の「正倉院」とも呼ばれ、辺津宮があり、祭神は多紀理/田心姫!）のことであるが、彼らが、朝鮮や中国との往来に当たって、その地を聖地化していたことが（航海の安全祈願!）、改めて分かる?!当然、そこには、瀬戸内や日本海が、彼らの生活圏として、共有されていたこと（同盟?）が判明してくる?!

（1月20日）

33 百済系?!「応神」が、何故「宇佐」「宗像」「出雲」と関わるのか?!

改めて、⑩⑪⑫で、百済系王族?の「応神」が、「宇佐」「宗像」、そして「出雲」と関わっているのが見えてきた?!果たして、それは、どういうことを意味するのか?あるいは、それを、どのように整合させればよいのかである?!確認であるが、「八幡大神(応神)」や「神功皇后」が宇佐の地で祀られたのは、8世紀である!

そこで気になるのが、同じく8世紀(731年)に、神託により二之御殿が造立され、宇佐国造が祀ったとされる「比売大神」(「宗像三女神」?!)であるが、宇佐嶋に来たのが「神代」とされていることである!

その「神代」というのは、記紀に言う「高天原時代」であるが?!、実は、それは、前にも述べたように、おそらく3世紀前後の「倭国」(の状況)を指していると思われる(「弥生時代」の終末期?)?!だとすれば、この3世紀前後に、件の「比売大神」、すなわち「宗像三女神」は、宗像から?宇佐に移動(結婚あるいは進出?)してきたということになる?!

どれが、あるいは何が真実かは、今のところ何とも言えないが?!、そうした、人の移動あるいは関係づくりと言え、その時期の「倭国大乱」(2世紀末)あるいは、その後の「邪馬台国」の存亡?に関わる「倭国乱」(卑弥呼と台与の交代劇?3世紀中葉)が、ここで脳裏を過る?!

いずれも、例の「魏志倭人伝」に書いてあることなのであるが、仮にそれが、ここでいう「比売大神」の、宗像から?宇佐への移動あるいは関係づくりと関わりがあるのであれば、そこに示された「倭国大乱」や「倭国乱?」の輪郭(内実?)が、新たに見えてくることにもなる?!

ただし、それは、繰り返すように、応神との関係では決してない?!応神は、後の百済系王族(の後裔?)による、万世一系の皇統譜づくりの最大かつ最強の駒?ではあったが、まさにそれだけの関係であった?!

だが、それを踏まえるにしても、ここでは、改めて「倭国大乱」や「倭国乱?」に目を向ける必要がある?!すなわち、仮にそれが、前者の「倭国大乱」(の一コマ?)であったならば、その当時、出雲(大国主)と宗像(族)が同盟(婚姻関係?)を結び(奴国・伊都国を押さえるために?!)、宇佐の地に進出し、倭国支配の橋頭堡を築いた?!それが、まさに「倭国大乱」を引き起こしたというものである?!

もう一つは、それが、後者の「倭国乱?」(の一コマ?)であったならば、卑弥呼が死んで、その後男王が立ったものの、小乱があり、改めて宗女の「台与」が女王を継いだとされるが、これも同様に、出雲(大国主)と宗像(族)が同盟(婚姻関係?)を結び、宇佐の地に進出し、そこを足掛かりとして、内陸部の日田に駐屯地を置き(尾道辻原遺跡・この時代のもの?!)、そこから女王国(邪馬台国)に入り、「台与」、すなわち出雲と宗像の血をもつ「比売大神」が、その宗女(一族の娘)として、女王国を継いだ?!その場合、「卑弥呼」も、彼ら(出雲や宗像)

と何らかの縁戚があったということになる?!

さらには、その女王国（邪馬台国）の顛末は、残念ながら中国史書からは、ほとんど判然としないが、もしも、その宗像から？宇佐への移動あるいは関係づくりが、出雲（大国主）と宗像（族）が同盟（婚姻関係？）を結び、豊前の地に橋頭堡を築き、そこから、内陸部の日田に駐屯地を置き（尾迫辻原遺跡・この時代のもの?!）、その後女王国（邪馬台国）を滅ぼし、併せて、宇佐の地を中心として、出雲（大国主）・宗像同盟が、倭国（西日本）を牛耳ったということであれば、台与は、その勢力に追放？されたことになる?!

だが、その場合、台与とは、ひいては卑弥呼とは一体誰なのかという、新たな疑問が生じてくる?!ということは、やはり、このような事実はなかった?!とは言え、誰（どこ）かが、女王国（邪馬台国）自体を滅ぼしたことは、ある意味確かではある?!ということで、時代的には、上のような3ケースが考えられるのであるが、そのどれもが、もちろん類推の域を超えるものではない?!

しかし、そういう中で、例えば2番目のケース、つまり、当時倭国（西日本→葦原中つ国）を牛耳っていた出雲（大国主）・宗像同盟が、後に北部九州に渡来してきた新たな半島勢力、すなわち百済系王族に、女王国（邪馬台国）を含む筑紫一帯を乗っ取られ（追いやられ?）、辛うじて？宇佐の地に留まったということであれば（ある意味、そのことが利用された?!）、応神（八幡大神）が、表向きには、その主祭神として祀られ（その母とした「神功皇后」と共に!）、一方で、その素性を隠した形で（隠さざるを得なかった?!）、「宗像三女神」が、(実質的には)地主神の「比売大神」として、そこに祀られてきたということにならうか?!

とにかく、ここでは、応神と宇佐・宗像・出雲、少なくともこの4者の関係が、いかに整合性を持った形で説明され得るかであるが、この2番目のケースが、今のところ、最も蓋然性が高いのではないだろうか?!

ちなみに、以前にも述べた、後の「宇佐八幡託宣事件」（「道鏡事件」）のように、後代、何故宇佐八幡が、当時の藤原政権に一目置かれ（恐れられ?）ていたかである?!それは、ここでの「応神」、「神功皇后」、あるいは「比売大神」（「宗像三女神」?!）の誰（どの部分?）に、その因が求められるかでもある?!形の上では、応神（宇佐八幡）に、その因が求められるように見えるが、実は、「比売大神」（「宗像三女神」?!）と、それに仮構された「神功皇后」に、その因がある?!

要は、例の関裕二氏が、古代史解明の大きな枠組み、つまり滅ぼされた「出雲」（ただし、いわゆる狭い意味での「出雲」ではなく、近江・尾張を含む、出雲・吉備・丹波・丹後・越の大和建国創始勢力の存在）、それを隠蔽するための、藤原氏（不比等）の壮大な捏造の物語（これに勝る枠組みはない?!）が、ここで述べたことと、まさに直結してくるということでもある?!しかし、まだまだそのディテールは、定かではない?!

（2月9日）

34 改めて、「応神」とは誰か?!「継体」、そして「欽明」との関係は?!

こうして、私は、改めて今、ある時代（「空白の4世紀」「謎の5世紀」）の事実解明の結論として、百済系王族の渡来と、彼らによる「倭国」「日本国」の統合・統一?の実相、そして、それが、まさしくその後の我が国・日本の歴史を創り出していったということを、明らかにしようとしている?!ちなみに、それは当然?!、「記紀」が示す、その時期までの歴代天皇の皇統譜を否定することを意味している?!

しかし、それはそれで、何度も述べるように、ある意味仕方がないことであり、その事実は、厳粛に?受け止められなければならない?!蛇足ではあるが、それ自体によって、現在の「日韓関係（の構図）」が覆るといようなことは、まったくくない（否、あってはならない!）!!

それは、例えば「イギリス」と「フランス」の関係のようである（周知のように、現在の「イングランド王家」は、フランス・ノルマンジーからの征服王朝「ノルマン朝」の末裔である!）。しかも、半ば史実として!、その他のヨーロッパ諸国も、そのような状況（要素）は、多分に有しているとも言えるのである!

ということで、ここでは、改めて、「応神」とは誰か?!そして、彼と、その後の「継体」、さらには「欽明」との関係は、果たしてどうなっているのかということについて、そろそろ一つの結論?を導き出さなければならない?!

そこで、まずはこれについては、現在までのところ、「倭の五王」、すなわち中国の『宋書』等に見える倭国王「讚・珍・済・興・武」との対応が、一つの鍵となるということで、讚=百済・残国兄王（滕・応神?）or（→子・仁徳?）、珍=讚の子（→履中?）、済=百済・温祚系余氏毗有王の子・慶司（=近蓋鹵王）（→反正?）、興=済の子（→允恭?）、武=済の子=筑紫の君・磐井?（→安康?）という関係が浮かび上がってくる?!

しかし、当然、この関係では、「応神」はともかく、「継体」や「欽明」が、この枠組みには入ってこない?!さらには、それ（五王）に同定されている天皇が、すべて彼らに対応させていいのかも、実は分からない?!しかも、例えば、讚=百済・残国兄王（滕・応神?）or その子（仁徳?）ということであれば、「応神」と「仁徳」の関係が、改めて不分明となる?!「応神」と「仁徳」が、（仮託された?）人物の使い分けなのか、あるいは、やはり別人なのか?!

いずれにしても、一つは、「倭の五王」が、記紀に示されている歴代天皇の誰に当たるのか、あるいはどのように彼らは、そこに配当?されているのか、そこがはっきりとしないということ、さらには、ひょっとすると「倭の五王」は、本当は、記紀に示されている天皇とは、直接は関係がないということもあり得るのである（「倭国九州説」に基づく、少なくとも8世紀初頭までは存在した九州倭国の政権担当者→「磐井」は、その間の一人?!）?!

しかし、私は、「倭国」と「日本」は、『旧唐書』（945年）にもあるように（「倭

国」＋「日本」⇒「日本＝倭国」！）、双方は、まったく別物とは捉えていないので、基本的には、「倭の五王」は、歴代天皇の皇統譜には、必ず投影されていると考えている?!その投影の実像が、一見しただけでは、捉えられないようにされているだけだということでもある?!

しかしながら、とにかく「応神」だけは、その「倭の五王」の一人である、あるいは「倭の五王」の一人が、まさに「応神」に仮託されている?!、そのように捉えているわけである?!このことは、以前にも述べたように、兼川晋氏や石渡信一郎氏等の解明によっても、明らかなのではないかと考えている?!

ただし、それについても、「応神」（実は、彼は、通説の「応神」ではなく、本来は「藤」とされる?!）が、讃の父親である? 「残国の兄王（沸流系余氏・百濟宗家）」であり、彼が「継体」（軍君・男弟王）の兄なのか（→兼川説）、あるいは、（通説の）「応神」（百濟王族）が、兄の「昆支」であり、「継体」が、その弟の「軍君」とするのか（→石渡説）、それから、「欽明」を「応神」の嫡子とするのか（→兼川説）、あるいは「欽明」自体が、誰かからの投影（非実在?）とするのか（→石渡説?）、この辺りの結論も、まだまだ出せないのである!

なお、兼川説では、「兄王（藤・応神?）」と、その子の「讃」と「珍」（沸流系余氏）、次に、何らかの事情があって、「済」（温祚系余氏）が、倭国王として、本国百濟（温祚系余氏）から派遣されてきたが、その本国の事情?で戻り（その後、当地で死んだとされている?!）、次を、その子の「興」と「武」が、兄弟継承した（この関係だと、謎?である「五王の血縁関係」も、矛盾なく説明される?!）?!

ところで、通説では、この最後の「武」が、記紀の「雄略天皇」とされているが、兼川説では、いわゆる九州倭国の「（筑紫国造?）磐井」とされており、その磐井は、例の「磐井の乱」（515年・兼川説!）で殺されてはいるが、その末裔王統が、少なくとも8世紀初頭までは存続し、本来の「倭国王」の血筋を受け継いでいたとされる!そうすると、すべて「倭の五王」は、九州倭国の王ということになるわけである?!

ちなみに、「継体」は、「興」の即位に際して送られてきた、「仇台系百濟」の余慶（蓋鹵王）の後の弟「牟軍・軍君→男弟王」とされ、その兄「牟旨・昆支→倭王旨」も同じように派遣されていたが、彼自身は、本国の事情で帰国したという?!だが、実は、これについては、石渡説のように、兄を「応神」、弟を「継体」、そして「欽明」を、「応神」の嫡子とする解釈もある?!そして、それを、大和倭（日本）国が、後の皇統譜の中で、ある意味適切に?、「仁徳」、「継体」、「欽明」というように造作した?!

このように、「継体」や「欽明」に関わっては（も?）、これも重要な視点（題材?）となるが、一方で、「二中歴」（九州年号）の解読によって、通説にはない、九州倭国の実像も示されている（兼川説）。こちらも、もっと多くの人に注目されてよい?!だが、またしても、まだまだ解明の道半ばとなった?!（2月9日）

35 「倭国」・「日本国」（の関係？）は、百済の「檀魯制」で説明できる?!

かなりの日数が経ってしまったが、ここでは改めて、歴史の証人？「二中歴」（「九州年号」）の存在、そしてそこから見えてくる?!、九州の、二つの「倭国」の存在（並立?）に言及してみたい?!ちなみに、そこでは、端的に、その最初の「継体」（年号）をどう捉えるかが、重要な観点となる?!何故なら、その「継体」（年号）が、今明らかにしようとしている、二つの「倭国」の存在の鍵を、握っていると思われるからである?!

すなわち、私は、この間、百済系王族の渡来と、彼らによる「倭国」「日本国」の統合・統一?の過程を炙り出そうとしてきているが、ここに来て、件の兼川氏が示す、二つの九州倭国（「筑紫の倭国」と「豊の倭国」）の並立→「豊の倭国」の「継体」（「軍君」・仇台系牟氏→男弟王?）による「筑紫の倭国」（温祚系余氏→武・磐井）からの政権篡奪?（「磐井の乱」）、そして、「豊の倭国」からの皇統譜作成、そのような流れを、頭に描こうとしているのである?!

だが、そうだとしても、どうしても、その流れと、いわゆる「記紀」に示される「継体」との関係が、直接には繋がってこないのである?!簡単に言えば、それと、近江・北陸出身の「継体」とが、どうしても結びつかないのである?!一体、これは、どういうことか?!まさにそこに、真相解明への大きな障壁が、立ちはだかっているのである?!とは言え、そこにまた、謎?解明の大きな鍵もあるのである?!そう思えて、ならない?!

改めて、それはどういうことか?!それは、端的には、兼川氏の「二人の継体説」から導かれるが、実は「継体」には、更の名「彦太^{ひこふつ}尊」があり、その「彦太尊」が、九州倭国（豊の倭国）の「継体」と、どこかで擦り合わされている?!元々は、前者は別人であったが、九州倭国（豊の倭国）の「継体」に接合され、そこから新たな?皇統譜が創られた?!

例えば、近江・越に繋がる「彦太尊」に、以前にも述べた、九州東部から近江・越に移動していた?「息長氏・額賀氏」の思惑・作為が絡まっているとすれば、その可能性は非常に高い?!擦り合わされた「継体」は、他ならぬ近江・越の人物に、仕立て上げられなければならなかった?!

一方、皇統を乗っ取られた側の九州倭国（筑紫の倭国）は、「倭の五王」の最後の「武=磐井」で終わり、「豊の倭国」、すなわち真の?「継体」と、彼と共闘した（指示された?）「物部麁鹿火^{あらかい}」の影響力が強まった?!そこから、当主の「物部尾輿^{おこし}」（筑紫物部 13 世）と蘇我系の堅塩^{きたし}姫の子・15 世大人^う連（用明）から始まる「上宮王家」、そして、その実質的な頭領となった「蘇我本宗家」（直接は、尾輿の弟「稲目」から?!）が台頭し、それが、ある時期から（最終的に?）大和「飛鳥」に居を移し、倭国（→日本国）を移動させた（実質的な創始!）?!それ以降の動きが、いわゆる「乙巳の変→大化の改新」等である?!

ただし、九州倭国（「筑紫の倭国」）は、一応 8 世紀初頭までは、その命脈は保

ってはいた?!なお、この場合、記紀では、継体の嫡子「欽明」と蘇我系の堅塩姫の間の子が「敏達」とされている?!そうすると、「物部尾輿」（筑紫物部13世）が、実は「欽明」だった（に仮構された?）のであろうか?!そして、15世大人連（用明）が、「敏達」だったのであろうか?!

いずれにしても、そもそも、その出発点?としての「応神」とは誰か?!そして、その後の「継体」、「欽明」、さらには「敏達」とは、どういう人物、いかなる関係だったのか?!これらについては、上述のように、かなりの錯綜（混乱?）が見られるのであるが、その錯綜（混乱?）の要因が、実は、ここにきて俄然注目される?!、いわゆる百済の「檐魯^{たんろ}制」にあるとしたら、それなりに首肯されることにはなる?!

つまり、繰り返すように、ある時期から、我が国の皇統が、まさに百済系の王統によって形成されてきたのであれば、倭国・日本国においても、その百済の統治体制、すなわち「檐魯制」なるものが、厳然と存在していたのではないか?!それが、上記の「筑紫の倭国」（温祚系余氏→武・磐井）であり、「豊の倭国」（温祚系余氏→仇台系牟氏：「軍君」→男弟王?→継体）であるのではないか?!ただし、問題は、その二つの「倭国」の、実体的な関係だということではある?!

ちなみに、改めて「檐魯」とは、新たに開かれた土地のことを指し、「檐魯制」とは、その檐魯の統治に王族の子弟を任命する制度である。もともとは、中国の周の時代に「魯」国で発達した制度らしいが、その「魯」国は、殷の遺臣が配置された国であるため、殷の制度だったとも言える?!具体的には、王家の親族が、地方の有力都市や新たに獲得した土地に領主として派遣されるものであり、「それらの領主は王族だけに、王位継承権をも持つ」ということである!

まさに、ここが重要なのであるが、そうすると、百済の王族（「伽耶」の領主もそうだったらしい?!）が、その檐魯国・倭国／日本に領主として派遣され、場合によっては、その王子が、倭の大王の養子として派遣されたりしたのではないか、ということである?!（以上、「ウィキペディア」より）

とにかく、この百済（正確には「百済人」?!）の「檐魯制」が、当時の倭国・日本国においても導入され、その親族国家?!が、列島内に幾つも出来し、そして、最終的には、大和（飛鳥）に、その統一（統合?）政権が樹立された?!もし、そういうことであれば、これまでの謎や疑問は、ほとんど氷解するかもしれない?!

なお、その「檐魯国家?」としては、筑紫（九州飛鳥・基肆?→太宰府?!）、豊（→秦王国?）、吉備、播磨、河内、さらに越、常陸（多分?）、そして大和（飛鳥）が該当するであろう?!したがって、そこでの実権の移動?が具体的に分かれば、史実解明の大きな枠組みが、一気に手に入ることになる?!実際、そういうことなのだが…?!

（3月9日）

36 改めて、どのような（政権）移動が?!そして、最後はどこ（誰）に?!

ということで、㉔の続きであるが、その間、改めて、どのような変遷（政権移動!）があったのか?!そして、その最終的な政権はどこに、あるいは誰に移ったのか?!その真相解明は、ある意味当然ではあるが?、最大の難問でもある、現在の日本、つまり大和倭国の政権樹立（最終的には、藤原政権!）の真相解明ということになり、結果的?には、本「古代史の旅」のゴールということにもなる?!

ちなみに、いわゆる「神武の東征」あるいは「応神（or 神功皇后）の東進?」には、まさにその移動（政権移動!）の大いなる足跡?が、何らかの形で投影されているのかもしれない?!特に、後者については、まさにそのことが、リアルに示されているとも言える?!

しかし、まだまだその実相は、明確には描けない?!と言うより、記紀、とりわけ『日本書紀』においては、確信犯的な?意図でもって、史実?が捏造・創作されているが故に、なかなかその実相が掴めないということではある?!とは言え、この大いなる足跡?については、このシリーズの集大成として、後日（いつになるかは?である!）、必ずや解き明かされなければならない?!

だが、本当に、それが実現すれば、まさに我が国古代史（建国史）の全容が解明されることとなり、それはそれで、大変なこととなる?!故に、そんなことは、多分ない?!されど、何と言われようとも、これまでの考察を踏まえ、そしてまた新たな知見を加え、その解明を目指す私である?!

そこで、以下、ここでは今一度、そのたたき台となるであろう?、件の「変遷（政権移動!）」の大枠を、描いてみることにしたい!ただし、ここでは、時間の流れを逆にして、その「変遷（政権移動!）」の足跡を追っていくことにしたい!と言うのも、その手法が、実は記紀編纂者達が構想していった、我が国建国史の真相?ではなかったかという、私の着想（閃き?）だからである?!ある意味、それは、創り出されたものなのでもある?!

ということで、まず、最終的な政権担当（奪取?）者となった藤原氏は（直接的には「不比等」!←史人_{ふみひと}?この名前自体が、実に尊大である?!）、自らの正当性・正統性を主張するために、以前（㉑）に示した「記紀編纂の基本方針」を定めた。つまり、それは、建国の時期を、可能な限り古く見せること、そして、出来るだけ、そこに真実?を散りばめること、しかし、自家（藤原氏）にとって都合の悪いこと、知られては困ることは、無視したり、歪曲したりすることであった!

ただし、それは、結果的に?!、そうなったとは思われる!すなわち、いわゆる「嘘が、嘘を呼ぶ!」という、まさに「芋蔓方式」の歴史改竄?であったということである?!

その中で、最も意を用いたのが、悪逆な手段で（刺殺?）、その政権を奪取した、いわゆる「蘇我氏」の扱いであった?!もちろん、それは、「蘇我氏」と密接

な関係がある「物部氏」も、同様ではあった?!だが、直接的な標的は、やはり「蘇我氏」であった!何故なら、「蘇我氏」は、九州倭国皇統(ひいては、葦原中つ国の出雲系王統、つまり倭国全体の王統?)の正統な継承者(「本宗家」)、まさに「上宮王家」の後裔であったからである?!

さて、その「蘇我氏」や「物部氏」の本拠地は、当初九州にあり、その中心は、いわゆる「倭^{たい}国」(←「大倭国」?)であった!その「倭^{たい}国」(「大倭国」)の九州残存(本当は正嫡?!)勢力が、「倭の五王」の最後の「磐井」(倭王「武」?)の後裔であり、しかも、かの有名な「日出処天子」を自称した「アメタリシヒコ」(決して、大和の「聖徳太子」ではない!)の皇統であった?!

だが、その「磐井」皇統は、もう一つの倭国の皇統である「豊の倭国」(檐魯?!)、具体的には、そこに入り込んでいた「(本来の)継体(ホムチワケ?)」に、その実権を奪われていた(→「磐井の乱」)?!ただし、その双方の皇統は、元々は、邪馬台国の解体(滅亡?)後?、百済から渡来してきた「残国の兄王」、すなわち「藤・応神?」(まだまだ、彼が誰であったかは特定できない?!)の末裔であり、その「応神」と、出雲系の「神功皇后→宗像三女神?!」・「武内宿禰」が、ある時期共闘して創り上げたのが「倭^{たい}(大倭)国」であった?!百済王統が、直接倭国皇統に入り込んできたのが、まさにこの時であった?!

繰り返すが、百済王統は、宗家・沸流系余氏(残国の兄王?あるいは「讃」?→「応神」)、温祚系(弟分!)余氏(「倭^{たい}国」→「筑紫の倭国」→「済」→「興」→「武」・磐井)、そして仇台系(沸流系分枝!)余氏→牟氏(「倭^{たい}国」→「豊の倭国」→「軍君」・男弟王?→(本来の)「継体」)の三つに分かれる?!もちろん、百済本国も、これらによって分国統治されていた?!

ただし、宗家・沸流系余氏の、残国の兄王(「讃」?→「応神」?)が、列島(倭)に移り住んだ(拠点を移した!)ことにより、百済は、温祚系余氏が統属していた?!だから、当時の倭国(途中から温祚系余氏となった筑紫倭国!)は、執拗に「百済」を気にかけてきた?!だが、その倭国(筑紫倭国)の命脈は、いわゆる「白村江の戦い」(百済再興のための唐・新羅連合軍との戦い!)で、事実上は尽きた?!

ところで、百済残国の兄王(「讃」?→「応神」?)が、出雲系の「神功皇后→宗像三女神?!」・「武内宿禰」(「事代主」とか「住吉大神」とか呼ばれているが?!、実は、彼は、任那・新羅の「天の日矛」であった?!)と、ある時期共闘して創り上げた「倭^{たい}国」であったが、その「神功皇后→宗像三女神?!」・「武内宿禰」(「天の日矛」?!)は、「倭国大乱」、その後の「邪馬台国」騒乱(卑弥呼から台与への政権移行)の前後に、全国に移り住んでいた先住倭人(呉・越人や半島南部の倭人、いわゆる「海人族」)の近畿大和の建国の後、播磨・丹後・越前に勢力を創り、その力も借りて、九州倭国に乗り込んで来ていた?!

それが、「倭^{たい}国」でもあった?!紙幅が尽きた!後は、次号で!

(3月21日)

37「倭（大倭）^{たい}国」が、その後の、倭国・日本国の鍵を握っている?!

ということで、ここでは当然、前の㉔の続きとなるが、件の「倭（大倭）^{たい}国」は、どのように推移したのか?!そして、それは、いわゆる「神武東征」・「初期大和王権」と、どのような関係になるのかということである?!

ただし、「神武東征」については、㉔等で述べたように、紀元3世紀前後（「邪馬台国」期）における、南九州出身の賀茂族、つまり「建角身^{タケツヌミ}」の事績の投影であると捉えた?!また、「初期大和王権」については、その賀茂族も絡んだ、尾張・近江・丹波（丹後を含む）による近畿大和への集結（纏向の祭政都市）、そして、最終的には、吉備から（しかし、もともとは伽耶→北部九州から?!）移動してきた「崇神」（ミマキイリヒコ→饒速日?→物部氏の祖）による政権樹立の過程が、そこにあり、それに、「出雲（族）」が関わっていたということである?!（←関裕二氏）。

つまり、近畿大和の動きとは、「倭（大倭）^{たい}国」は、直接にはつながっていないということである?!と言うより、倭国（九州）の後身（の主部?）である「倭（大倭）^{たい}国」の樹立に、「出雲（族）」の一部（「神功皇后」・「武内宿禰」→越・丹波勢力?）が絡んでいたということである?!

なお、その「出雲」であるが、近畿大和の一方の集積地、いわゆる「葛城」が視野に入ってくる!例えば、その「高尾張」地域が、「尾張（氏）」の発祥地だともされているが、その「葛城」に、まさに「出雲」が絡んでいるのである?!しかも、そこには、「出雲」と「賀茂（族）」の関係もあり、それが、「纏向」の大和王権にも繋がっているのである?!

まだまだ、その全体構造図は、私にはよく描けないが、その大まかな構図については、神武・綏靖・安寧…等と続く、初期天皇の婚姻関係を見れば（「記紀」が示すものではあるが?!）、よく分かるであろう?!「欠史八代」とされる天皇の部分でもあるので、単純に、それを鵜呑みにはできないが、何らかの史実?が、そこには示されていると考えてもよいのではないか?!

ところで、その初期大和王権を最終的に確立した、吉備?から移動してきた「崇神」（ミマキイリヒコ→?饒速日→物部氏の祖）が、何故、初期大和王権を掌握できたのか?!

そこには、鉄の分配?と、それに絡まる瀬戸内海と日本海の流通経路の覇権争いがあり、瀬戸内海経路の方が、それを制したということであるが（これも、関裕二氏!）、もう一つは、吉備が、実は、九州から移動してきた物部勢力（の一部?!）であり、彼らは、倭国（九州）皇統の血脈を有していたので、初期大和王権の中心となることができたのではないか?!もし、そうであれば、これが、実際の、記紀における「神武東征」のモチーフになったとも考えられる?!

それはともかく、ここでは、その「鉄（の分配）」に関わって、以前㉒で紹介した、菊池秀夫氏の、興味深い指摘が思い出される!彼は、例の「狗奴国」の

位置（九州中部）から「邪馬台国」の位置を実証？しているが（背理法的証明！）、もう一つ、宮崎県中部地域からの、近畿大和への鉄器勢力の移動の可能性も指摘していた！

彼は、宮崎県中部の二箇所から「庄内式土器」に類似したものが出土し、そこには、日本最古と推定できる前方後円墳、日本で二番目に多く鉄製武器を出土した遺跡があるとし、宮崎県中部に存在した勢力が畿内へと移動して、大和王権を成立させた？としているのである！

これが、まさに南九州出身の賀茂族、つまり「建角身^{タケツヌミ}」の事績に相当するものであれば（→「神武東征」に投影?!）、これもまた大きな発見？ということになるわけである?!鉄製武器や土器との関係からの推定であるので、かなりの信憑性があるものとも思われる?!

いずれにしても、もし、これらが、改めて「倭国（邪馬台国連合）」、そして、その後の「倭国」の成立と変貌？に関係があるとすれば、そこに、例えば、「倭の五王」、あるいは「応神」？や「仁徳」？、さらには、後の「欽明」や「敏達」等の関係もあり、一方でまた、㊦でも述べたように、近江・北陸出身の、「継体」とされた「彦太尊」が、九州倭国（豊の倭国）の「(本来の?)継体」と擦り合わされ、そこから新たな？皇統譜が創られたというようなことも、当然考えられ得るわけである?!

それは、九州東部から近江・越に移動していた？「息長氏・額賀氏」、そしてまた「秦氏」の思惑・作為とも思われるが、そうした意味で、「倭国」は、その後の倭国・日本国の鍵を握っているとも言えるのであり、もちろん、「応神」や「継体」は、そこから出て（創出されて）いるということでもあるのである?!

このように、ある時期から（4世紀初頭?）、倭国（厳密には、「筑紫倭国」）は、記紀が示す「応神」と「神功皇后」・「武内宿禰」の関係のように（「擬制」ではあるが?!）、百済王族と出雲勢力（の一部?!→新たな出雲勢力で、日本海勢力?!→天日矛・ツヌガアラシト?!）との共闘によって成立した「倭国」（中心は、貴国→基肆国?）となったが、その「倭国」は、近畿大和の勢力変動（吉備と尾張の共謀？による、近江・日本海勢力の排除?!）によって、改めて二つに分かれた。

一つは、最終的には太宰府に拠点を置いた「倭国」（「倭の五王」及び、その正嫡の、『隋書』にいう「日出処天子」こと、「天足彦」の（九州）倭国）であり、もう一つは、近畿大和に向かった応神・仁徳勢力（貴国→基肆国?→木・紀?）、だが、実は、百済系王族の応神・継体の兄弟？勢力（強いて言えば、豊の倭国?!）の河内進出による、（近畿）倭国（→日本国）の掌握である?!

ただし、最終的には、（九州）倭国の正嫡であった九州物部、そこから派生した蘇我本宗家（←「上宮王家」）が、大和飛鳥に移動して、新たな倭国（日本国）を樹立した?!その顛末については、ここでは繰り返す述べることはしない！

（4月4日）

38 これだけは、かなり明確になった?!それを踏まえた、新たな議論を!

さて、前号(㊸)も、相も変わらず、紙幅の関係もあって、かなり不十分となったようにも思う!だが、それはそれで仕方がないので、ここでは、それに大いに関係してくるであろう、幾つかの重要事項を、改めて整理するために、箇条書き的ではあるが、まとめ書きしておくこととしたい!

ただし、それは、標題にも示したように、「これだけは、かなり明確になった?!それを踏まえた、新たな議論が必要?!」という意思表示(メッセージ?)でもある?!順不同とはなるが、列挙すると、以下のようなものがある!

もちろん、これだけではないが、とにかく、今挙げられるのはこのようなことであり、少なくともこれらが真実ということになれば、これまでの史実解明の枠組みも、かなり共有化されるものとなろう?!果たして、どうなるかではある?!

①我が国の建国は、外来の倭人集団によってなされた!

まず、我が国の建国(倭国→日本国)は、外来の倭人集団(ここでは、最も広い意味であるが!)によってなされたということである!その中心は、いわゆる「弥生人」と呼ばれる人達であったが、その大きな勢力は、朝鮮半島南東部の「伽耶・新羅」系の倭人(これが、「崇神」系統とされた?!)と、その後入り込んで来た「扶余・高句麗・百濟」系の倭人(これが、「応神」系統とされた?!)であった!ただし、それ以前に入植?していたのは、同じ倭人ではあったが、中国江南地方の「呉・越」からの人々であった(これが、「神武」系統とされた?!)!

②記紀神話は、3世紀頃の状況を示すものであり、その後の関係氏族の動きや関連を示すものであった!

次が、記紀神話は、3世紀頃の状況を示すものであり、その後の関係氏族の働きや関連を示すものであったということである!その大きなからくり?が、上山春平氏が解明?した「神々の体系」であり、その体系に嵌め込まれた、「神武」「崇神」「神功皇后」「応神」という、「神」の名を冠した人物群の創出である?!

それらは、記紀編纂者(藤原政権)が、自らの正統性・正当性を虚構するために創り上げた、関係氏族・勢力の先祖物語であるが、その大枠自体は事実であった?!例えば、出雲が先にあり、大和が、それに乗った!皇祖?神武が南九州から来た、というようなことである!ただし、その基点となるべき人物は、「応神」に仮構された百濟王族(「兄王」・「藤?または倭の五王の「讚」?)であり、その最初の拠点、九州倭国(「倭(大倭)たい国」)であった?!

③「邪馬台国」と「狗奴国」は、どちらも九州にあった!

次が、『邪馬台国』と『狗奴国』は、どちらも九州にあった!ということである。これは、「魏志倭人伝」にある「北と南で接する!」という関係から、しかも「狗古智彦→菊池彦?」という名の類縁性(同じ?!)から、菊池秀夫氏

が推察・解明したものであるが、ある意味、見事であるとしか言いようがない?! 方位や名前の関係性だけではないかと、つまり、その間違いの可能性もあるのではないかと、反論される向きもあるかもしれないが、そのこと自体が間違っているという反証がない限り、このことは、真実として扱っていいのではないか?!

そうなれば、まさに邪馬台国なるものは、決して近畿大和ではあり得ないのであり、そのことを踏まえた、史実解明に向かうべきだということになるのである（例えば、「卑弥呼」や「台与」の所在!）。ただし、別の勢力が、そこ（近畿大和）にいたことも、間違いはない! いわゆる、祭政都市「纏向」の存在である!

④「天照大神」は、「卑弥呼」or「台与」を意識した（多分?台与!）、後の「持統天皇」or「元明天皇」の虚像である!

次が、『天照大神』は、『卑弥呼』or『台与』を意識とした（多分?台与!）、後の『持統天皇』or『元明天皇』の虚像である」ということである。これは、関裕二氏も含めて、かなり多くの人が指摘していることでもあると思われるが、その一つの証拠?としては、「持統天皇」の和風諡号の改変（「大日本根子広野姫」→「高天原広野姫」）がある!

いずれにしても、九州にあった「邪馬台国」の女王「卑弥呼」or「台与」が、万世一系の皇統譜の祖とされた「天照大神」のモデルであり、しかも、それが、後の「持統天皇 or 元明天皇」の虚像（昇華）であるということになれば、記紀が描く古代史（とりわけ神話として!）には、かなりの創作?が施されていると見なさなければならず、そこでの史実解明とともに、何故、記紀（藤原政権）が、そのような創作を行ったかの事由が、追究されなければならない!

これは、かなりの人が見過ごしている（誤認している?!）、天武天皇と持統天皇（夫婦ではあるが!）の関係断絶?を暗示しているということでもある!

⑤だが、卑弥呼・台与（「邪馬台国」）は、持統（藤原政権）にとっては、直接の先祖ではない!

次が、上記④とも関係してくるが、その「卑弥呼・台与（『邪馬台国』）」は、持統（藤原政権）にとっては、直接の先祖ではない!」ということである! 何故なら、もしそうであったならば、記紀において、そのことを、きっと喧伝していたはずだからである?! だが、卑弥呼・台与（『邪馬台国』）の存在については、「魏志倭人伝」に明確に示されていたために、否定や無視はできなかつた（隠せなかつた!）のであり、そのために「神功皇后」を虚構し、その存在には、最大限の配慮を示したのである!

したがって、その神功皇后の事績とされていることも、武内宿禰（住吉大神?）や仲哀天皇、そして、他ならぬ「応神天皇」と絡ませた史実の創作?であることは間違いはない! とにかく、以上のことは、これまでの記紀理解に、かなりの変更をもたらすであろう?!

（4月4日）

39 「紀」の執筆者（実務史家?!）の良心 or 意地?は、信頼され得るか?!

ところで、ここにきて、やはり、もう一つ気になってきたことがある?!それは、記紀、直接的には『日本書紀』の、まさに文章（たたき台?）を書いた執筆者（実務史家?!）の存在であり、多分多くの人が指摘している、彼らの良心、あるいは、ひょっとしたら意地（恨み?）についてである!

これについては、以前どこかでも触れたとは思いますが、もし、彼らが、そうした歴史家としての良心（矜持?!）、あるいは旧政権（本来の?、この場合は九州倭国?!）所縁の人間の?意地（恨み?）を有し、状況的には、かなり厳しい環境（監視あるいは脅迫的状況?!）の中で、その良心（矜持?!）ないしは意地（恨み?）を發揮していたとすれば、そのことも含めて、彼らの存在（振る舞いないしは具体的な執筆内容）を、いかに受け止めるか、あるいはどこまで信用（信頼?）できるかである?!

とにかく、その代表的なもの、より多く引き合いに出されるものが、かの有名な（古代史に少しでも関心のある人なら、ほとんどの人が知っている?!）、例の部分である!すなわち、第26代天皇「継体」の死去記事の際に記された、「後に勘校かんがえむ者ぞ知りなむ」という怪しげなメッセージ（校注?）である!これは、先日たまたま読み返すことになった、吉留路樹という人の『倭国ここに在り』（葦書房、1991年）に解説?されていることであるが、単純に捉えれば、一体誰が、何のために、あるいは誰のために、そういうメッセージ（校注?）を残したかということである?!

吉留氏によれば、『日本書紀』には、ほかのところにもこの『後勘校者知之也』などの言葉が使われているが、これはまことに意味深い注釈で、特に『継体紀』の部分は謎めいていて、私も長い間疑問に思っていた」ということである。ちなみに、神功皇后、すなわち息長帯姫は、どちらも「諡号」（死んだ後の贈り名）であるが、実は、『日本書紀』に、わざわざそのことが書かれているらしい（内倉武久『謎の巨大氏族・紀氏』、三一書房、1994年）!このこともまた、執筆者あるいは編集・校閲者（直接の責任者?）が、何らかのメッセージ（→暗号?）を書き記していると考えられよう?!

周知のように、『日本書紀』の編纂は天武天皇の子舎人親王を総裁とし、藤原不比等を実質的統括者として編纂されたもの」であるが、「実務を担当したのは百濟の亡命知識人や太宰府の史官が中心であった。…そうした実務担当者の中には学問的良心の持ち主もいたはずだし、また、滅亡した故国への断ち難い哀惜の念もあったであろう。その人たちが権力者の間隙を衝いて、真実を後世に伝えておこうと腐心した文章が『紀』のなかにはかなり散見できる」ということである（吉留氏）。

他にも、こうした指摘は、多々あるようであるが、特に、「継体紀」が、その顕著な部分であれば、それ自体の理由（謎?）も、考えなければならない?!

そこで、敢えてここで、かなりの邪推？が許されるとすれば、「継体」に関わる推察（すり替わり説?!）とも関わってくるが、その「継体紀」は、かなりの剽窃・捏造（かなりの無理?）が、施されているということではないかということである?!

そしてまた、繰り返しになるが、彼ら（執筆者）は、そのことをあからさまには示すことはできなかったが、せめて、真実を知る?!読者（あるいは後世?）に、その部分（あるいは全体?）が怪しい、つまり「真実ではない!」ということ、暗に示そうとしたのではないかということである?!

さらには、「そこまでは、嘘や偽りは許さない!」という実務執筆者の、ある意味悲痛な叫びではないかということでもある?!そういう意味では、彼らの良心 or 意地?は、信頼され得るものであるということになるわけである?!

いずれにしても、かなりの捏造や創作が施されている「記紀」にあっては（ここでは、『日本書紀』のことであるが!）、前にも述べたように、ある意味それ自体が目的?でもあるので、たとえどこかに、矛盾や明らかな間違いがあっても、そのこと自体を、自ら記す（暴露する）ことはないはずである?!

つまり、基本は、いわゆる確信犯的な仕業なのである（ただし、「神話」の部分は、史実?の捏造や創作という意味では当然?であり、たとえ荒唐無稽なものではあったとしても、それはそれで受け止められなければならない?!）!

しかし、それが、ある部分においては、そうっていないのである?!ある意味用意周到な『日本書紀』が、どうして、そういうようなへま（見苦しい?態度?!）を、堂々と?見せているのかということでもある?!

改めて、そういう形で、つまり幾つかの良心的な記述（この部分は、自分達もよく分からないので、後世の人よ!良く考えて事実を解明して欲しい!）を紛れ込ませて、全体的には、あるいはその他の部分は、間違いではなかったというような、一種のカムフラージュ効果を期待したと考えられないこともないが、「人代」、それもかなり新しい?時代のそれであれば、そのカムフラージュは、むしろ逆効果なのではないか?!やはり、その部分は、「どう考えても、おかしい!」ということ、率直に?伝えているのではないのか?!

こうなると、少なくとも『日本書紀』は、表面的には、藤原氏の主張・意思を最大限に尊重?した、まさに「虚偽の歴史書（国史→正史）」と言えなくもないが、一方では、同時代を生き、様々な人・勢力の秘かな思い（矜持・恨み等?）が込められた、生身の人間関係?の、渾身の著作物であると言えるのかもしれない!

だとしたら、我々は、そういう視点も加味しながら、そこに示されている史実?を、「すべて嘘とか、すべて真実とかということではなく!」、丹念に追っていくことが必要だということになる?!

（4月4日）

40 一つの区切り?!改めて今、私は、一体どのような地平にいるのか?!

とにもかくにも、ここでも、これまで我が「古代史の旅」と題して、様々なことを、あまりシャープではなかったかもしれないが、縷々書いてきた!しかも、このシリーズをご覧になっているみなさんには(特に、この分野の予備知識がない人にとっては?)、ほとんど何を語っているのか、お分かりにならなかったかもしれない?!あるいは、そもそも、このシリーズにお付き合いされている方は、ほとんどいらっしゃらないのかもしれない?!

しかし、それはそれで仕方のないことであり、今の私には、そのことに対する申し訳なさや言い訳の言葉などは、特段必要はないと思っている?!ある意味、そうすること自体が、逆に失礼なことだとも思えたりする?!

とは言え、これまで、自分の想定以上に?!、精一杯書く機会を見つけ(時間を創り!)、これまで読んできた、多くの方々(逆に、ほんの一部の方かもしれない?!))の本や記事(ホームページ上の論文も含めて!)を、真摯に受け止め、解釈しながら、まだまだ明確にはされていない(それ以下かも?!)、我が国の古代史、とりわけ建国(黎明)期の真相(史実?!))を明らかにしたい、否、その解明の一端に与したいという思いの下に(はなはだ不遜なこととは知りつつも!)、悪戦苦闘してきたことは事実である!

ということで、このシリーズ(テーマ)も、いつのまにか40号を迎えた!他の二つのシリーズ(テーマ)もそうであったが、本号もまた、その「一つの区切り」である!ただし、本号では、他のシリーズ(テーマ)と違って、何を「一つの区切り」にすればよいのか、残念ながら(恥ずかしながら?)、その確たるものが定まらない?!

ならばということで、私にとっても、改めて必要な、これまで書いてきたこと(実際は、書きたかったこと?!))の振り返り、つまり、途上にある解明の地平の?!、少なくともその大枠を、ここで(実際は再び?)確認するということにした?!だが、ほとんど進展していない部分も、それなりにあるので(単なる繰り返し?)、そこはそこ、それなりのご寛恕を、ここでもお願いしておきたい!

さて、改めて、その地平であるが、今回は、便宜上二つの層(様相?)として描出してみたい!その二つの層(様相?)とは、一つは、まさに時間と範囲を最大限に広げた、古代史全体の「大枠(骨格?)」としてであり、もう一つは、その「大枠(骨格)」を形づくる、「画期的事項(結節部分?)」の各様相としてである?!

要は、その「大枠(骨格?)」と「画期的事項(結節部分?)」が、全体の層(様相?)として、どのように描けているのかということである?!もちろん、各々の「具体的事項(各部位?)」の様相は、ここでは示すことはできない(ある意味、当然である!)?!尤も、その「大枠(骨格?)」と「画期的事項(結節部分?)」でさえも、まだ十分ではない?!

そこで、まず、その「大枠（骨格）」であるが、㊸でも述べたように、我が列島には、当初「縄文人」と呼ばれる人達（→「古モンゴロイド」。ただし、様々な種族の人達であった?!）が、基本的には南の方から、移り住んできた。その後、その「古モンゴロイド」から分かれ、北上した極東で寒冷地適応を果たした、「新モンゴロイド」と呼ばれる人達が、気候変動等に伴って、再び南下し、日本列島にも押し寄せてきた（→「弥生人」※これが「二重構造モデル」である!）。

その「新モンゴロイド」の人達の一部が「倭人」であり（中国江南地方発祥?!）、またその一部が、西日本や朝鮮半島の南端に住み着いた?!ただし、「縄文人」と「弥生人」は、ある時期入れ替わったのではなく、むしろ文化的にも融合し合い、その後「倭人国家→倭国」を形成していった?!

当初、北部九州、とりわけ博多湾岸の「奴国」や「伊都国」が中心であったが、その後「倭国大乱」等があり、内陸部の「邪馬台国」を盟主とした「女王国連合」が、その中心となった。一方、出雲や近畿にも、倭人集団は進出し（北部九州の人達と同族?!→海人族/安曇族等）、「女王国連合」と同じ時期に（若干後か?）、別の「倭人国家？」を創り上げていた?!

彼らは、日本海沿岸や太平洋沿岸を開拓?して、東海・北陸・関東・東北の地へ、その版図を広げていった（開拓・移住?!）。その後、その出雲や近畿の倭人集団は、大和纏向に祭政都市を築き、その後の大和王権に繋がる一大勢力を形成した。→「大枠（骨格?）」?!

こうして、大きくは、九州と近畿に、それぞれ倭人国家?が並立することになったが、鉄の支配?の問題等で、九州と近畿の抗争が出来し、最終的には近畿の方が覇権を握った?!だが、その過程において、百済の王族（百済宗家。扶余・高句麗系であるが、母方は倭人系!）が、まずは九州に入り（倭の五王時代?! →「倭国」）、やがて近畿にも進出し、倭国全体の覇者となった。

最終的には、その継承者?であった藤原氏が、倭国（倭国）皇統の正嫡?であった物部氏や蘇我氏を追い落とし、「魏志倭人伝」等に記されていた史実を逆用して?、自家に都合よく捏造・潤色し、天照大神（当時の「持統天皇」を昇華!）を祖とする「万系一世」の皇統譜を創り上げた。

ちなみに、当初九州と言っても、北部・中部・南部があり（大まかではあるが!）、そしてまた、そこと、出雲や吉備、そして近江や大和あるいは東海・北陸の関係は、それこそ単純なものではなく、そこに、関係の勢力（氏族）の、まさに入り乱れた、力あるいは姻戚関係があった?!

だが、大きくは、九州と出雲・近畿の関係、そしてまた、そこでの出雲と吉備、さらには近畿（大和・近江・越・東海）の関係、それらをどのように解き明かしていくかである?! →「画期的事項（結節部分?）」?!ただし、残念ながら、最小限の列挙となった?!今後また?!

（4月14日）

41 『書紀』の怪しさ・凄さ?!我が「旅」は、それにどう関わられるのか?!

久し振りに、大都市？那覇に行ったことは、別シリーズ（「東シナ海眺望記」）で述べたが、そこ（某大型書店）で面白い本を買った！吉田一彦という人の、『「日本書紀」の呪縛（シリーズ＜本と日本史①＞）』（集英社、2016年）である。

著者は、日本史・仏教史学者だということであるが、同書は、「『本』のあり方から各時代の文化や社会の姿を考え、当時の世界観・価値観がどのように成立し、変化していったのかを考察する歴史シリーズ」の第一巻で、「歴史は常に勝者のものだった。『日本書紀』もまた、当時の権力者の強い影響下で生まれ、書物と書物の争いを勝ち抜いてきた。今日においても歴史の記述に大きな力を持つこの『正典』を最新の歴史学の知見をもとに読み解き、相対化する。本書は歴史解釈の多様性を示す『日本書紀』研究の決定版である。」とある。

この紹介文や本のタイトルに、別な意味で（史実の解明そのものではない?!）、多少興味が湧いたので購入したのだが、予想に反して？（大いなる失礼か?!）、かなり有益な情報、と言うか、「記紀」等の解釈の仕方を、改めて教えられたような気がする！

別言すれば、「記紀」等の関係性というか、何故それらが、その時期に著されたのか、何故そのような記述となっているのか等、今までは、そうしたことは、ほとんど考えた（示唆された？）ことはなかったが（「記紀」の関係だけは別だが!）、現代のような、「何でもあり」というような出版状況はそこにはなく（あったとしても、禁書・焚書の憂き目にあうか、今で言う「海賊版」のように？、闇に隠れた怪文書として存在したか?!）、ある意味、その存在が許されるものだけが、書物（本）として生き残ってきたということである?!

要は、それらは、基本的には、『日本書紀』（の記述）の枠内にあり、その限りにおいて、出版（主張？）が容認されたものということであるが、『日本書紀』は歴史書であるが、その記述は客観的、中立的なものではなく、はなはだ政治的なものであり、歴史的事実とは異なる創作記事が多々記されている。だが、この書物は、天皇が定めた国家の歴史書として大きな影響力を持った。そのため、『日本書紀』完成以後は、同書を継承しようとする書物が記される一方、同書の記述に反駁しよう、あるいは無化することによって対抗しようとするような書物が現われ、いくつもの書物が『日本書紀』を取り巻くようにして作成されていった。

それは書物と書物との戦いであり、それが現実の政治的権力や経済的権益と連関している場合があった。そうした書物と書物の抗争や政治的対決の世界の中で、『日本書紀』は常に書物群の中央に君臨していた。」という言説は、いわゆる藤原氏（端的には「不平等」!）の所業を、念頭に置かれての話ではあろうが、「我が国の古代（黎明・建国期）の歴史」が、そこに隠されていることは事実であり、それらを整合させていくと、その本当の姿が見え始めるということである。

もある?!ただし、そうした作業は、残念ながら?、一人の人間の為せる業では決してない?!

ちなみに、そうした書物群として、同書では、『古事記』(712年→9世紀?・太(多)氏?)、『古語拾遺』(807年・忌部氏・『日本書紀』への異議申し立て)、『新撰姓氏録』(815年・諸氏族の意向を汲み上げた)、『先代旧事本紀』(620年→9世紀後半?・偽書?・物部氏系)、あるいは聖徳太子に関わる『上宮聖徳法皇帝説』(法隆寺系)、『聖徳太子伝暦』(四天王寺系)、『上宮聖徳太子伝補闕記』(広隆寺系)、『上宮厩戸豊聡耳皇太子伝』(橘寺系)、さらには仏教思想からの『日本霊異記』、はたまた『日本紀私記』、『藤氏家伝』(藤原仲麻呂→恵美押勝)等の「家牒/家伝」「私記」「氏文」等が紹介されている。

それらが、「正史」としての、いわゆる「六国史」(『日本書紀(720年)』『続日本紀(797年)』『日本後記』『続日本後記』『日本文徳天皇実録』『日本三大実録』)の編纂に絡まりながら、その中心の『日本書紀』の解釈・根拠探しを行うという形で、その出版(主張!)が繰り返されたということである?!

ということで、同書の解釈としては、かなりズレているかもしれないが、とにかく私は、今回、何か新たなステップに踏み出せるような気がしている?!それは、記紀を始めとする、当時のことを記したと思われる種々の書物(文献)が、実は、お互いに関係している(立場・利益等の関わりで、主張が異なっているが、すべてそれらは、一連の事実?に関わっているということ!)ということから、史実の新たな解釈・洗い出しが出来るのではないかということである?!

もちろん、既にそうしたスタンスで解明作業を進めている人もいるであろうが、私にとっては、新たな知見、否、そうした書物(文献)情報の見方・受け止め方(→解釈)に、一つの大きな基軸を得たということになるのか?!

改めて、私は、本シリーズを「古代史の旅」と称しているが、実は、通常の?遺跡・史跡巡り等ではなく、これまで私が読んできた書物や論文を元に、誠に曖昧模糊とした「我が国古代史」を理解、と言うよりは、自分なりにその大枠?を知りたい、分かってほしいという、本当に無謀な、否、手前勝手な「理解の旅」をしているということである!

この無謀な、そして手前勝手な「理解の旅」が、これからも続けられるのかどうか、その辺りは、正直よく分からないが、多くの人達の、それこそ血の滲むような努力(原典研究・実地踏査等)を真摯に受け止めながら、可能な限りそれを元に、「真実はいかにあったのか?!」ということ、私なりに追究し続けていければと考えている!

まさに、すべて「他人の禪で、相撲を取る」恰好ではあるが、私にしかできない「相撲の取り方」もあるのかもしれない?!それを信じて、これからも、頑張っていきたいと思う!

(4月19日)

42 「記紀」を取巻く、周辺の書物群?!新たにそこから何が分かるか?!

ということで、前号④では、『日本書紀』の持つ、新たな「怪しさ・凄さ?」を、言わば「客観的に?」、つまり、それが、何故「怪しい・凄い」のかということ、他の書物との関係において理解したのであるが、それによって、改めてどのようなことが分かるのか、その辺りを、ここでは書き記しておくこととしたい。結果的には、個々の史実解明に繋がる直接の(確かな?)情報が、別途得られるわけではないが、そこで共有?されている史実(正確には、その認識!)の大枠みたいなものが、より鮮明に見えてくるようにも思われる?!

そこで、まず、『日本書紀』と『古事記』の関係であるが、公式の成立年代は、『古事記』712年、『日本書紀』720年ということで、『古事記』の方が早いことになっているが、そんなに単純ではなさそうである?!なお、『日本書紀』は、最初の「国史」であり、当時の政権(藤原不比等・持統体制)の公式見解(ただし、全体としては「創作」?!)である。

一方の、『古事記』の方は、「元明天皇」の命によって、「稗田阿礼」に誦習させていたものを、「太安万侶」が筆録したものとされているが、あくまでも、それは「私記」であって、いわゆる「国史」ではない!また、「原古事記」というようなものがあって、それが、最終的には、元明天皇の御世に完成したということであるようだが、その作成主体は、いわゆる「太^{おお}(→多)氏」であったことは間違いないであろう?!

ちなみに、その太(→多)氏が、ひょっとしたら、先に「国史」を創り上げようとしていたのかもしれない?!しかし、政変(天武朝の崩壊?!)によって、事情が変わり、その国史編纂作業は、藤原不比等・持統体制に移り変わった(乗っ取られた?)?!その太(→多)氏が、「天武天皇」や、実は初期大和王権に関わる?「富^{おお}」または「意富^{おお}」氏(和爾氏系?←古代天皇家?の一枝)に関わる氏族であったならば、そうした、ある意味大胆な?歴史編纂の企図も、半ば容認されたのかもしれない?!

ただし、歴代天皇系譜に関わる部分は、基本的には『日本書紀』と齟齬をきたすものはなく、その限りにおいては、認識を共有していた(させられた?!)ものとは思われる?!

次に、これもよく関係の書物・論文に出て来る、『先代旧事本記』についてである。この書物は、まさに古代最大の氏族「物部氏」の末裔の述作であるとされているが、残念?ではあるが、いわゆる「偽書」ではあるらしい(例えば、その序に、聖徳太子の勅、蘇我馬子撰とあること等?!)。

だが、やはりそこには、彼らなりの矜持と史実説明への執念?が込められており(「本当はこうであったのだ!」という叫び?!)、元祖「饒速日」、そして直接の先祖である、その子の「宇麻志麻遲(記)/可美真手(紀)」に始まる、輝かしい?過去がそこには示されているということである?!私個人としては、たとえそれ

が「偽書」ではあっても、物部氏の過去の栄光は事実であり、そこに示されている史実？（もちろん、ここにも創作は施されている?!）も、まさに古代史解明の多くの題材・ヒントを有していると受け止めている！なお、多くの人も、そのことは、確実に認められていると思われる！

ところで、この『先代旧事本記』で面白いのは、このシリーズの最初の頃に紹介した、尾張氏や海部氏、そして紀氏（彼らは、同族であり、おそらく初期大和王権の構成メンバーであった?!）の記述である！ここでは、蛇足になるかもしれないが、それと関係する海部氏の「勘注系図」、あるいは紀氏の「紀氏家牒」等は、『日本書紀』が隠した（知られてはまずい！）史実の解明には、当然有力な史料（証拠？）となることは明らかである！

しかしながら、これも前に紹介した「卑弥呼」や「台与」が、これらの家系の人物（ご先祖様！）で、その当時（邪馬台国時代）は九州にいた氏族（勢力）であると踏んでいるのだが、それが、何故、現在の地域（その後の支配地）のような分布となっているのか、その辺りが、なかなか説明（遡ること）が出来ないでいる?!だが、物部氏が、蘇我氏と並んで、古代史解明上、最大の鍵を握っていることは間違いないのである（多分、初期大和王権の中枢勢力?!）！

次が、「忌部広成」が著したとされる『古語拾遺』であるが、これは、既に、ほとんど評価が定まっているようで、端的に当時の藤原政権に対する、（部分的ではあるが、思い切った?）「異議申し立て」を行った書であるということである！その異議申し立ての相手が、同じ神祇職の「中臣氏」（結局は→「藤原氏」）であり、ある意味「やっかみ?!」であったようではある?!

ただ、この書物（の主張）の意義は、当時の政権担当者藤原氏に対する、率直な異議申し立てをしていたことが分かるということにある?!忌部氏も、一応彼らの政権奪取に貢献したであろうこと、そして、そこからまた、藤原氏が抜きん出て、一人専横を極めようとしていたことが、そこから読み取れるということである?!

紙幅もないので、これで最後とするが、「聖徳太子」に関わる4つの書物、つまり『上宮聖徳法皇帝説』（法隆寺系）、『聖徳太子伝暦』（四天王寺系）、『上宮聖徳太子伝補闕記』（広隆寺系）、『上宮厩戸豊聡耳皇太子伝』（橘寺系）の存在も、別な意味で興味深い?!とにかく、この「聖徳太子」については、実在、非実在（私は、こちらの立場であるが!）を問わず、様々な論説がある！例の「卑弥呼」と並んで、古代史最大（最高?）の「ヒーロー（ヒロイン）」であることは言うまでもないが、恐らくこれらは、いわゆる「蘇我氏」、多分裏では、「秦氏」が関わる事績である?!

他にも、『元興寺伽藍縁起并流記資財帳』（蘇我系本来の書?）や『扶桑略記』（12世紀末）等もあり、かなりの主義・主張争いが、そこにあっただと思われる?!これらも、いずれ明快に解き明かされれば、実に面白くなる?!（4月22日）

43 改めて、「神」を冠した人物（期）を思料する?!そこに何があるのか?!

ここで、④④を踏まえて、改めて、「神」を冠した人物（期）のことを思料したいと思う?!

端的には、そこに何があるのかであるが、その名前（「漢風諡号」）自体は、以前にも述べたように、天智天皇の子・大友皇子（弘文天皇?）の曾孫とされる、文人「淡海三船」が、それこそ、かなり後になって命名したものとされるが（760年代?）、やはりそこには、他の人物（期）とは違う、重大な史実?があったということが、暗に（ある意味露骨に?）表明されているのではないかということである!

このことについては、これも前述のように、関裕二氏によって、一応の説明（解釈）がなされており、私も、そのことには、基本的には納得している！（→①⑨等）

しかし、私は、これも前にも述べたように、ただ単に、その人物（期）に重大な秘密?が隠されているということだけではなく、つまり、関裕二氏が解明しているように、それぞれが、あたかも「神」（鬼?）のような存在であった（政權に「恨み」を持って死んでいった?!）ということだけではなく、そもそも、その4人（「神武」、「崇神」、「神功皇后」、「応神」）の、「神」（の表意）の関係性にも、何か重大な秘密（からくり?）が仕込まれているのではないかと、改めて考えているということである?!

その根拠は、細かくは、多々あるように思われるが、大きくは、『日本書紀』（の作成→普及）という一大プロジェクトにおいて、一人の人間（命名者）の考案によって、「最も重要（神聖?）な言葉」である「神（鬼）」（という文字）を使った表現が、個別に使用される（別々に、その4人に適用される?）、つまり相互に、何の関連性もなく使用されるということは、常識的には?考えられないということである?!しかも、時期的には、かなり後からの追贈なのでもある!

改めて、それはどういうことか?!

要は、その4人（すべて実在であったかどうかは分からないが、少なくとも「記紀」において登場させられている!もちろん、そのモデルとなった人物自体は、実在であろう?!）は、『日本書紀』が描く、その大きな物語の中で、実に重要な役割を演じさせられているということであり、その場面（時期）は、まさに「我が国の古代史」の枠組みの、言わば大きな骨格を形づくる要素（事件?）であったと、思料できるということである?!

ちなみに、それらの場面（時期）については、他の書物群（執筆者）は知らなかったのか、知っていても、知らないふりをしたのか、いずれにしても、④④で見たように、知ってはいたが、知らないふりをしたということであろう?!

つまり、たとえ『日本書紀』に不満を抱いていても、歴代天皇の真偽については（重要であろうが、そうでなかるうが）、ほとんど異議申し立てをしていない?!そのこと自体には興味がなかった（今更、それ自体を覆しても、自分達の利益には

ならない！→結果的には追随したということ?!）ということであろう?!（→⑰等）

ここでは、それはそれで、そのことが、その当時（『日本書紀』完成時期及びその後のしばらく）の、一つの歴史の流れであったということでも了解すればよいのであるが、『日本書紀』に合わせて、みなが口を閉ざした？場面（時期）における、とりわけ「神」を冠した人物（モデル）達が生きて（活躍して）いた場面（時期）の記載内容、そのことの不思議さ（怪しさ？）や辻褃の合わないことを、改めて私（達）は、どのように受け止めればよいのかということになるであろう?!

例えば、「神（代）」と「人（代）」を繋いだ「神武」であるが（当然、生物学的にはあり得ない!）、彼の、「東征」と呼ばれる九州から近畿への移動、そこで出くわした「饒速日」や「長脛彦」、さらには「出雲族」や「賀茂（鴨）族」との交わり等、それらは西暦紀元前 660 年頃（縄文時代後期？）のこととなるが、その時代に、当然？そうした事績は考えられない（もちろん考古学的にも!）!

あまりにも、見え透いた「嘘」ではあるのである?!

しかし、まあ、それはそれでよい!何故なら、その意図や「からくり」が分かれば、それ自体は納得できるからである?!しかも、それが、どこかの、何らかの史実の投影であるならば、そのことを、一方で究明すればよいだけである?!

多分、それは、紀元 3 世紀頃の、近畿・大和の光景であると見なされるが、実は、私が、改めて一番怪しい（匂う?）、すなわち書紀の「からくり？」の本源だと考えているのは、「応神」と「神功皇后」の場面（時期）であるが、時代的にも、人間（親子）関係的にも、まるで理解を混乱させるのが目的であるかのように、話の辻褃が合わないし、そもそも現実には（物理的には?）あり得ないような話が、満載されているのである?!

いずれにしても、そこにも、淡海三船は、二人の「神（鬼）性」を忍び込ませていることになるのであるが、まさにそこには、そうせざるを得ないような事情（史実!）が隠されている、あるいは意図的に、うやむやにされているのではないかということである?!

例えば、その場面（時期）には、一方で、3 世紀頃の卑弥呼（→多分?台与）をちらつかせながらであるが、4～5 世紀頃?!の、半島百濟からの勢力（百濟王族）の渡来、そして、その支配という形で推移していった、我が国の古代史の流れ、特に、『宋書』等に示される「倭の五王」の存在とかが、時期的に、確実に?オーバーラップしているのである?!

改めて、そうした視点（枠組み→からくり?）で、『日本書紀』を眺めてみると、そこに示されている 4 人の「神」の位置づけや、その関係の持たせ方が、一つの筋（ストーリー?）として、繋がっているように思われるのである?!それは、繰り返しになるが、「応神」を核とした、4 人の組み合わせということなのである?!（→⑱）

（4 月 24 日）

44 「応神」を核とした、「神（鬼）」の繋がり?!そこに見えるものは?!

改めて、㊸では、「神」を冠した人物（期）のことを思料した！そこでは、いわゆる「神武」、「崇神」、「神功皇后」、「応神」の、まさに「神」を冠せられた4人が（すべて実在であったかどうかは分からないが、そのモデルとなった人物自体は実在である?!）、『日本書紀』が描く大きな歴史物語の中で、実に重要な役割を賦与されているということであった?!

そこで、ここでは、先にほとんどそれに絡ませることができなかった? 「崇神」も含めて、いよいよ? その全体構造（からくり?）を考え（推理?し）てみたいと思う。かなりの重複が出て来るかもしれないが、その辺は、いつものように? 寛大な対応をお願いしたい!

さて、先に見たように、『日本書紀』は（『古事記』でもそうであるが?!）、ある「目的」のために、ある時期、誰かが、様々な史料・情報等を収集・駆使し、その「目的」実現のために、それまでの歴史を、ある意味「創作」したものである（もちろん、その時々々の政権状況に応じて、記載内容の加除修正は行われてきた?!）!

問題は、その「目的」、つまり、その時の政権の「正統性・正当性」を、国の内外に示すためであるが、要は、その「正統性・正当性」を、どこから、どのように引き出してくるかであった?!尤も、そこに正しき? 「正統性・正当性」があれば、そのことを縷々示せばよいのであるが、おそらく（間違いなく?!）、その正しき? 「正統性・正当性」がなかったがために、数々の嘘や捏造を駆使し、それらしきものを創り上げたということである?!

では、それは、まったく「出鱈目に」、つまり恣意に任せて創られたかという、実はそうではない?!むしろ、これも以前に示したように、まさに「編纂の基本方針」というものが想定され、それに基づいて用意周到な「記述・記載」がなされたことは、ほぼ間違いのないであろう?!

ただし、そこに、直接の「文章執筆者」あるいは「記載責任者」がいて、彼らの良心や意地みたいなものが、最小限は（それが見過ごされる、あるいは抹殺されないで済む程度で?!）、差し挟まれていることも事実である?!

とは言え、いずれにしても、そこには、とてつもない「国史編纂」の作業日程、またその連続の過程があったことは事実であり、その意味でそれは、まさしく驚異的な国家事業ではあったわけである?!

ところで、ここで新たな問題としたいのは、「実際は」、誰のため（そして、何のため）の歴史記述（「国史編纂」）であったのかということであるが、（史実であったとされる!）歴代天皇家の歴史、すなわち「天照大神」に始まる「万世一系の皇統譜」を文字化して、世に示すことでは決してなかった?!本当は、時の最高権力者藤原不比等（→持統・藤原体制）の「正統性・正当性」を、顕彰するものであったということである?!

ここが分からない（定まらない）と、例えば天智（系）と天武（系）の関係（彼らは、実の兄弟ではなかった?!）、さらには天武と持統の関係（よく天武・持統体制とか言って、その連続性・睦まじさ?が自明のものとされているものがあるが、本当はそうではなかった?!）、さらには、その基となっている「応神」や「継体」の関係（後者は、前者の「5世孫」と言うが、実は渡来百済王族で、兄弟?!後に、その後裔達は背馳・対立した?!）といったものが、ほとんど見えてこないのである?!

ということで、私は、以上のことを、再度明らかにするためには、その元々の出発点である?!「応神」に、今一度目を向けるべきではないかと思っているわけである?!

改めて、その理由は、一応現皇室の祖と見なされる存在だということであるが（「記紀」の記述に基づけば、少なくとも直接の先祖?と言える「継体」が、応神の「5世孫」であれば、そのように言える?!）、その出自の不思議さ・奇怪さ（神功皇后と仲哀天皇 or 住吉大神の子、「胎中帝」、宇佐神宮への示現、敦賀・氣比大神との名の交換等）はもちろんであるが、そこにおける、いわゆる「大和朝廷」?の、すなわち「河内王朝」とも呼ばれるものへの変貌（「神功皇后」と「武内宿禰」の、「応神」を戴いた近畿・大和への進出。これも、「東征」と呼ばれるが、それに伴う巨大古墳や百済・騎馬民族的な武具・武器等の出現）である!

とにかく、この「応神」が、一体誰なのか、誰をモデルとしたものなのか、そしてまた、彼は、本当はどこから来たのか等、真に謎だらけの人物なのである?!それが、記紀が記す、4人の「神」を冠した人物の一人（実は2人?→神功皇后）なのである?!否が応でも、気になる人物であり、まさに、「淡海三船」によって!）「応神」と名付けられたその意味が、一体どこにあるのか、多少なりとも事情が分かってくれば、知りたくもなるというものであろう（今のところ私は、「倭の五王」の「讚」あるいは、その父?沸流百済の「兄王・滕?」と踏んでいる?!）!

繰り返しになるが（①②等も!）、神武、崇神、応神並びに神功皇后の、いわゆる「神」については、藤原・持統体制にあっては、隠しておきたい人物・事績であり（彼らに正統・正当性があるということ?!）、創出した人物（名）は、実在あるいは仮構（モデル化）された人物の「役割人格」（名）?であり、「神武」が大和王権の基礎を創った人（始馭天下之天皇→呉国系倭人・海人族?）、「崇神」がその基礎の下に、大和王権を確立した人（初肇国天皇→伽耶・新羅系倭人?）、そして「応神」は、彼ら（特に「神武」?!）を受け継いだ（乗り移った?）人（→高句麗・百済系倭人）、「神功皇后」は、その「(応)神」の事績に「功」のあった人（→伽耶・新羅系倭人?）ということで、4人の関係が、その文字に表意されているということである?!

だが、それは、物語上の話であり、史実（順序も含めて!）を忠実に示すものではない?!あくまでも、そのモチーフとして、設定されたということである?!

（4月25日）

45 大変なことを知ってしまった?!「天智」は九州（倭国）王朝の人間だった?!

やはり、「古田史学の会」は、凄かった?!本当に、多くの人が力を合わせると、とてつもなく大きな成果が出るものである?!今回、このことを改めて痛感した!ただし、この「会」が、あの古田武彦氏の学問研究（の成果）を普及・発展させようとされていることは、一応は知っていたが、詳しいことは分からなかった（分かれようとしなかった?!）!

だが、今回、時間つぶしもあって、久し振りに出かけた大学生協の書籍コーナーで、偶然にも、『失われた倭国年号《大和朝廷以前》』（古田史学論集『古代に真実を求めて』第二十集）を見つけた!単に、「倭国年号」という活字に目が行ったわけであるが、結果、驚くべきことを知ったのである!

ちなみに、その「倭国年号」に目が行ったのは、前に紹介した兼川晋氏の本を読んでいたからであり、その「倭国年号」（の存在）は、いわゆる九州王朝（倭国）の存在を証明するものであると、何故か確信?していたからであり、それに関わって、どのような史実?が、それに載っているのか（展開されているのか?）、まさにそのことを知りたかったのである!

さて、本題に入るが、その本の大部分は、「倭国年号」（の存在）を実証するような、各地・各様の古文書等の紹介と分析?であるが、その中に、正木裕「『近江朝年号』の研究」という論文があり、それを読み進めていくと、何と、標題のように、あの「天智天皇」が、実は九州（倭国）王朝の人間だった?!ということが、書かれていた!

詳しいことは、当然ここでは紹介しきれないが、とにかくこの事実?は、端的に、多くの、（私の?）これまでの疑問（モヤモヤ?）を解いてくれるかもしれない?!と言うのも、私も、彼が、「九州（倭国）」の皇統を継承していたのではないかと、秘かに?思ってきたからである!しかしながら、「倭国」（の「存続」という視点からの）関連の論文?を見ていたことは確かではあるが、そのことが、どこかに、まとまって書いてあったわけではない?!ほとんど感触、ひょっとしたら、まさに直感のようなものであったかもしれない?!

いずれにしても、もし、それが事実であったとすれば、何故、九州（倭国）系の「天智」が、近畿の近江（近江京）にいたのか?!そしてまた、そうであれば、例えば、彼と天武との関係（実の兄弟とされるが、娘4人を「天武」に嫁がす・仲が悪かった→天武の吉野隠棲→「天智」の死に伴う「壬申の乱」等の不思議さ・不可解さ?!）、そして、その関係に原因があると思われる、天皇家の菩提寺・京都「泉涌寺」の天武系の排除?（関裕二氏）等、住んでいた場所や行動、縁戚関係は、改めてどうなるのかということになる?!

さらには、以前確認したように、「記紀」が、「神武」は、ある意味創作の人物なのに、何故、（南）九州からやってきたことにしたのか、それは、この「天智」が、まさに九州（「倭国」）から来た、あるいはそれに繋がる人物だったから

ではないのかということも?!

ちなみに、この最後の部分は、「応神・神功皇后」等のことも含めてではあるが、実は、「記紀」の至る所に、九州の「要素」が散りばめられているが?、その一番の「要因」は、まさに「天智」の存在であり、彼が、「九州(倭国)」の人物だったからではないのかということである?!

すなわち、この「天智」まで下ると、その皇統がどうなってきたのかが、かなり明確となるが、その彼が九州出身、あるいは九州系であるならば、「記紀」が、その出発点(「神武」)を、(南)九州にしたのは、それ相当の理由(根拠)があったということである?!何故なら、記紀編纂時の政権は、まさしく天智系(持統・藤原体制)であったからである!

ところで、そこでは、6~7世紀にかけての、筑紫国造家(本当は「君」→「倭国皇統」本家?!)の磐井、葛子、そして、かの有名な「天足彦(日出処天子)」、さらには薩夜馬の、本当の素性・立場も見えてくるのであり、「乙巳の変→大化の改新」「難波京遷都」「白村江の戦い」「近江京遷都」「壬申の乱」「大宝律令」等の、その激動の時代の、言わば「ミッシングリンク(失われた環)」を解明(修復?)する、まさに驚きの発見?とでも言うべきものである!

しかも、そこから、中国の『旧唐書』における「倭国伝」と「日本国伝」の併記が、まさに九州(「倭国」と近畿(「日本国」)の、二つの王朝の存在と、その関係を、正しく述べていたということも分かる?!

ということで、そうそう驚いているばかりではおられないので、ここで改めて、その辺の事情(史実?)を整理し直す必要が出てくる?!それは、具体的には、どのようなことになるのか?!だが、ここでは、九州(「倭国」と近畿(「日本国」)の二国(朝?)並立は、ある意味、(私にとっては)前提?ではあるので、要は、その天智(系)を九州王朝(倭国)の人物とした場合、まず、いつ、彼(ら)が、どのようにして、と言うより、何より「何故」、九州から近畿・大和へ入った(移動した)かであろう?!その答えは、その論文にも書かれているように、件の「白村江の戦い」が関係しているということは、言うまでもない?!

周知のように、663年の「白村江の戦い」は、唐・新羅連合軍と百済(残党?)・倭国軍の、まさに百済の存亡をかけた一大決戦であった。だが、結局は、その戦いにおいて、百済(残党?)・倭国軍は、壊滅的敗北を喫した(百済は、これによって、最終的に滅亡!)

問題は、そこにおける「倭国(軍)」の実体(正体?)と、その敗戦後の本国(倭国)の実態であるが、これまでは、(近畿天皇家の)「天智」が、敗戦後、唐の脅威を感じて、対馬や太宰府等の守りを強めた?!瀬戸内海沿岸に、山城を築いて、唐の驚異を防いだとか言われてきた(定説?)?!それが、今回の真実?に基づく、どうなるのか?!また、紙幅が尽きた!これについては、改めて次号で!

(4月30日)

46 その時、「倭国」は、二つ（九州と近畿）に分かれた?!（前号の続き）

とにかく、「天智」が、「白村江の戦い」を契機として、（九州）倭国を離れていたことは（物理的な意味だけではなく!）、ある意味間違いない?!

母「斉明」等を伴って、近畿（大和?）から、九州朝倉の地に陣取って（直接は、戦地百済の地には行っていない!）、その戦況を見守り?、敗戦濃厚と判明してから（もともと乗り気ではなく、関係上仕方なく参戦?、というより後方支援をしていた?!したがって、その意味では予定通り?!）、近畿に戻り、そして、近江に遷都した（逃れた?）ということである?!

ただし、この近畿（大和）→九州（朝倉）→近畿（大和→近江）の動きが、本当に事実であったのかどうかは、今のところ証明?はできない（「紀」がそう書いているだけ?）!つまり、もう既に、何らかの事情で、近畿に移動していたのか、それとも、「白村江の戦い」の敗戦をきっかけに、近畿（大和）に移動したのかということであるが、多分、先に移動していたものとは思われる?!

しかし、もちろん、それは、彼単独ではあり得ない?!「舒明」→「皇極」→「孝徳」→「斉明（重祚）」、そして「天智」と続く、その系譜に、その何らかのヒントは隠されているようにも思われるが、現時点では、そこまでは遡及できない?!（これについては、いつかまた?!）

翻って、改めて、もう一つの問題は、九州にあった（残っていた?!）、倭国本来の血統（ここでは、おそらく?「応神」または「百済王族（兄王）」の血統）であるが（これについては、例の兼川晋氏の解明?!による、百済王族「沸流系余氏」と「温祚系余氏」の関係が想起される!）、残ったのが、「温祚系余氏」、離れたのが「沸流系余氏→仇台系（余→牟）氏」、そして本国百済の、当時の政権王家が「温祚系余氏」であったならば、まさに、今回明らかになった?ような、人（集団）の移動、駆け引きがあったことは、十分考えられることである?!

その中で、多分、「沸流系余氏→仇台系（余→牟）氏」の「継体」が、「磐井の乱」によって、近畿・大和（後々の「天武」に繋がる系統）に進出していたと考えられるが、その系統（勢力）と、九州倭国系の「天智」との、言わば「近畿・大和での確執?」が、その後の激動の時代を生み出していったものと考えられるのである?!

それと、もう一つ、今回の解明のポイントとなることは、いわゆる「太宰府」の存在、あるいは役割についてである?!これについても、以前どこかで触れたことがあるが、ある時期（「白村江の戦い」後しばらくして!）、太宰府（「倭国」の首都）は、唐の支配下に置かれ、そこに、いわゆる「都督府」（後にそこが、太宰府政庁と呼ばれるようになった?!）が置かれていたということである?!

実は、これについて今回分かったこと?は、先の敗戦で、唐の捕虜となっていた「筑紫君薩夜馬（当時の倭国王?）」が、「白村江の戦い」の戦争責任者?として、現地（唐本国）に抑留?された後（5年後?）、その都督府の長官?として

任命されていたということである（これは、当時の唐の占領政策としては、通常のことでもあったと言う?!）！

さて、この「太宰府」については、「太」なのか「大」なのかという論争も含めて、かなりの謎（「法隆寺」の移築?等）が提示されていることは、周知の通りであるが、要は、「天智」が、九州倭国の、いわゆる「百済温祚系余氏」の皇子ではあったが（母「斉明」に依る?!）、「白村江の戦い」を境にして、近畿に移動し、多分九州では同族であった「蘇我氏（上宮王家）」（多分、こちらと一緒に、近畿へ移動していた?!その本拠地が、まさに大和「飛鳥」であった?!）を駆逐し、最終的には、近江の地で、天下を取ったということである?!

その後の動き（史実?）については、最早繰り返す必要はないが、その中で特筆すべきは、当時の、一応倭国王?であった筑紫君薩夜馬が不在（唐に抑留中）の時、近畿に移っていた「天智」が、倭国王を「称制」したのではないかということである?!

これは、いわゆる百済の「檀魯制」の影響（結果）でもあると思われるが、占領された太宰府（筑紫倭国）を見限り、新たな九州王朝系「（近畿）倭国→日本国とした?!」を、近江に樹立?したということでもある?!

ただし、上にも述べたように、たとえ彼が、近畿近江でそのような政権を樹立したとしても、そこに突然、政権を樹立できたのではなく（常識的に無理である?）、蘇我氏（上宮王家）と共に、近畿・大和に移動してきていたと思われ、それは、そこに彼らを受け入れる?、あるいは彼らと同族の勢力が、既にそこにいたからであろう?!

つまり、「応神」「仁徳」時代に（あるいは「継体」時代も含めて?!）、いわゆる「河内王朝」（「難波京」を中心とした?!）とも呼ばれる勢力、すなわち、「記紀」が述べる「正当な皇統?」が、近畿・大和にいたからである?!

したがって、「天智（中大兄皇子）」が、すぐに皇位に就けなかった（ように描かれた!）のは、舒明・皇極・孝徳・（斉明）が続いたからということになっているが、一方で、彼の出自、あるいは九州王統の血が、そこでは、すんなりとは、受け入れられなかったということではないだろうか（これについても、いつかまた?!）?!

いずれにしても、以上、天智、そして天武時代の時代状況、あるいは彼らの関係を、まさに「捉え直し」の観点から述べてきたのであるが（まだまだ不十分ではあるが!）、こうしてみると、改めて述べるまでもないが、「邪馬台国」の所在地論争（九州か近畿かの「どちらか論争」）と同じように、「倭国（九州王朝）」か「（倭国→）日本国（近畿大和王朝）」かの、これまた「どちらか論争」だけでは、その真実には迫れないのである?!ここにまた、私の主張（まだまだ作業仮説ではあるが!）に、さらなる確信?が加わることになる?!果たして、どうなるのか?!

（4月30日）

47 二分された「倭国」ではあったが、それ以前に「ねじれ」があった?!

さて、ここで、事実解明の新たな枠組み、そして、そこにおける一つの、まさに「確固たる?」ジグソーパズルのワンピース（一片!）が、かなり鮮明になってきたのではないだろうか?!

すなわち、「記紀」を編纂した当時の持統・藤原体制（これが、現皇室へと続くもの!）は、いわゆる「九州王朝（倭国）系」の皇統であり、ある時期に近畿・大和に移動していた勢力である（もちろん、一部ではある?）!しかも、そのことを、隠していたということである（その時期、本国?九州の「倭国」が唐の占領下に置かれていたことも含めて!）!

しかし、それは、別の視点から捉えれば、百済王族（「温祚系余氏」→<磐井?>→天智系）の、近畿・大和への移動・遷都（「檀魯制」?）ということであった?!そして、それが、それより以前に、近畿・大和に移動していた?「沸流系余氏→仇台系（余→牟）氏」→継体→天武系）との、近畿・大和、ひいては倭国全体の覇権者となるべく死闘?を繰り広げた、彼らの（すなわち現代を生きる我々の）歴史でもあったということである?!ちなみに、沸流系余氏が、百済本国にあっては「本宗家」であったことは（←兼川晋氏）、前に述べた通りである!

だが、実はもう一つ、その間には、ある種の「ミッシングリンク」が存在する?!ということも指摘しておきたい。まさにそれが、「応神→欽明系」と「継体系」の相克である!もちろん、これは、以前にも述べたように、「応神」と「継体」（それに仮託された人物→「昆支≡兄王」と「軍君≡男弟王」?）が、百済王族の兄弟皇子（彼ら自身は、仇台系牟氏?!）であり（←兼川晋氏）、要は、彼らの血筋達の暗闘?が、それ以前にあったということである?!

ただし、「記紀」には、「欽明」は「継体」の嫡子とされており、そういうことが考えられないようにはなっている?!しかし、もし、「欽明」が「継体」の嫡子ではなく、「応神」の子であったならば（←兼川晋氏）、「継体」は、「欽明」の「叔父」ということになり、また「継体」の先妻の子とされる「安閑」「宣化」とは、いわゆる「従妹同士」ということになる?!

とにかく、「記紀」は、彼らの関係を、通常の兄弟とし（もちろん異母兄弟ではある!）、その順に皇位に就いたことにしているが（「尾張系」の「目子媛」の子「安閑」「宣化」、そして、「仁賢天皇」の皇女「手白香皇女」の子の「欽明」の順!だが、「欽明」が、先王の血統から、いわゆる「嫡子」とされている!）、実際は、彼らは皇位を巡って争ったことが考えられるのである（→「辛亥の変」?!「百済本紀」に、531年日本の天皇、皇子皆死ぬという記事があるのである!）。

ということで、この「安閑」「宣化」と「欽明」の関係、及びその間の情勢は、実に怪しい?なのであるが、これについては、もう少しその証拠?が欲しいところではある?!

ところで、その「欽明」を、いわゆる「ワカタケル大王」（稻荷山古墳鉄剣銘

等)とする説もあり(←兼川氏・石渡氏等)、私自身も、前にも述べたとは思いますが、その通りであろうと受け止めている?!直接ここでは、そのことは置いておくとしても、改めてもし、上記したことが事実であれば、まさに「応神→欽明→天智」系と「継体→(安閑・宣化)→天武」系という、百済系王族(最終的には仇高系牟氏?)の相克の歴史が、そこに横たわっていることになる?!

そして、さらにまた、その「欽明」を、蘇我氏の事実上の祖である「稲目」とする説(←兼川氏)もあるが、その蘇我氏が、まさに大きな存在であったことは間違いなく、たとえ破竹の勢いで中央に進出してきていたとしても(そのように記されている?!)、単なる一新興豪族では、あれ程までには扱われ(憎まれ?)なかったであろう?!しかも、彼らが無礼にも行ったとされる「天皇家としての振る舞い」(「八佾の舞」等!)は、逆にそのこと(正統・正当な後継であること?)を、暗示してもいるのではないか?!

いずれにしても、こうして、先に近畿・大和に移動していた「応神」(系)と「継体」(系)の確執が、おそらく「欽明」(「蘇我稲目」?!))によって止揚され、その欽明から続く「大和・近畿皇統→日本国」(「天武系」と、もう一つの「九州倭国皇統」(「天智系」と)の確執・和合、そしてその分裂(→「壬申の乱」)が起こったということになる?!

そして、まずは、そこにおいて「天武系(日本国)」が勝利し、その後、天武皇后の「持統」にそれが移り(二人の人間関係が一番の曲者?である?!)、藤原不比等によって様々な画策がなされ、いつのまにか「九州倭国皇統」(「天智系」)、しかし内実は「持統・藤原体制」(→万世一系の倭国・日本国皇統)に、その実権が移っていったということである!

これが、ここで言う「ねじれ」であるが、大きな枠組みで言えば、それらも、同じ「百済系王族」による、「倭国」あるいは「日本国」の歴史の実情であったということが出来るであろう?!

ただし、(本来の?)「九州(倭国)」の要素は至る所に残されており、例えば、初代「神武」にそのことを託し(出身地としての九州!)、一番の核となる「応神」も、九州から近畿・大和に移動してきたというようなストーリーを構想したのである?!さらに、最も広い意味では、いわゆる「天孫降臨」という概念(からくり?)で、「百済(朝鮮半島)→九州」→「近畿・大和」という方向を、そこに投影させているとも言える?!

しかも、それは、その前の時代(「崇神」に代表させている?!))をも包摂する概念(からくり?)として、描かれているとも言えるのである?!だが、もちろんそれらは、まったくの空想(創作)ではなく、誰かの、そうした事績が(人物や年代には嘘や捏造が施されたとしても!)、一方であったということである?!ある意味「記紀」の凄さ?は、そこにあるとも言える?!

(5月11日)

48 見えてきた?!我が国古代史解明の粹組み（「ジグソーパズル」の形）?!

さてさて、いわゆる「記紀の編纂方針」については、これまで何度か言及してきた！天照大神を始祖神とした「万世一系」の皇統を創作し（それは、まさに持続・藤原体制を盤石なものにするためであった?!）、それを出来るだけ古いものに見せかけること（「神代」の設定→由緒正しい伝統ある国とする!）、そして、その中に、可能な限りの史実を散りばめること（「国史」としての中身=事実?の装填→だが、当然、必要に応じて改変・捏造はする!）であった?!「記紀」（とりわけ「日本書紀」）は、そのための必需品?であった?!

そして、それを造作する大きなピース（塊）として、「神武（期）」「崇神（期）」、そして「応神・神功（期）」の3つを措定し、その、まさに「万世一系」を創り上げたきた、それぞれの人物（時期）を核とさせながら、持続・藤原体制の祖先達が、幾多の紆余曲折を経ながらも、現在の自分達の代まで、どのように生きてきた（奮闘してきた?）のかを、壮大な歴史ドラマに仕立て、書き上げた（て来た?）ということである?!

とまあ、まずは以上のことが、我が国古代史解明にとっての、最も大きな粹組み（→「ジグソーパズル」の形）となろうことは明らかであるということであるが?!、問題は、その「神武（期）」「崇神（期）」、そして「応神・神功（期）」の3つが、何故、そのような大きなピース（塊）となる（なった?）のかということである?!多分、一つは、それが事実であったということであろうが（実年代や親子関係等はかなり捏造・創作されてはいるが?!）、一方で、それは、裏を返せば、実は重大な歴史の転換点（政権の発生や交替）が、そこにあったということでもあろう?!

しかも、ここが重要であるが、その重大な歴史の転換点の基点を、まさに「応神・神功（期）」としているということである?!つまり、単なる時系列的な、時代の流れを記しているのではないということである?!ちなみに、それを象徴しているのが、その4人の、「神」を冠する人物、すなわち「神武」「崇神」「神功」「応神」の名前と関係（歴史的な役割の賦与?）なのではないかということである?!

さて、いずれにしても、そこで、もしそれが真実であるとすれば、何故、彼ら（持続・藤原体制）はそうしたのかである?!もちろん、それが事実であったからであろうが、しかし、そうであるのならば、仮に不十分な史料・情報しかなかったとしても、どうして、まるで分からなくするのが目的?でもあるかのよう、そこでの記述・説明を、ある意味支離滅裂（→荒唐無稽）としているのかということである?!

それは、まだまだ我々の解明の努力が足りない（解釈が十分ではない?）からだとする向きもあるかもしれないが、もし、彼ら（持続・藤原体制）が、むしろそのように仕向けているのであれば（その証拠は、今ではかなりある?!）、それを

逆手？に、それこそ素直？に、その仕向けられた謎（嘘？）を解明した方が、断然得策だということになりはしないか？！

実は、現在、たとえ「邪馬台国論争」では、九州説、近畿大和説、いずれの立場であっても（この場合は、基本的には九州説の人が多いか？）、「記紀」が、かなりの捏造や粉飾を施していることは、多くの人が認めるところであって、私一人が、珍説・奇説？を振りかざしているわけでは決してないのである！

とにかく、次なる課題は、その捏造や粉飾が、どこに、何故、どのようになされているかということの解明（認識共有）ということになるが、私は、その糸口を、「神武」「崇神」「神功」「応神」の名前と関係（歴史的な役割の賦与？）に見出すとともに、その基点である「応神・神功（期）」の実像に、鋭意？迫っているわけでもある！

ということで、これまで、同じようなところ？を、かなり堂々巡りをしてきたようにも思うが、最大のポイントは、何故、彼ら（持続・藤原体制）が、「応神・神功（期）」に、そこまで気を使って？いるのかということである？！もちろん、それは、一番近接な？歴史であったということ、そしてまた、そこ（その時期）が、彼らの直接の出発点であったということであるが、だが、たとえそうであっても、何故、そこに、言わば必要以上の？捏造や創作を施したのかである？！まさに、そのことが、改めて追究されなければならないのである？！

一番近場の歴史であるのならば、記憶や情報も多々あるのであり、それこそ明確な歴史が描けるはずである？！そして、その史実を、そのまま記せばよいのである！しかし、そうはしていない？！端的に、そこには、知られてはまづい過去があったということであり、そのことを、あからさまにはできなかったということである？！

ところで、以上のように、嘘をついてまで、それを隠したかったのは、他にもない！、関裕二氏ら、多くの人が説くように、彼らが、本当は、彼らが造作？した「万世一系」の正統・正当な後継者ではなかったということである？！しかしながら、これまで私は、彼らが、「どのように、正統・正当ではなかったか！」、ということをも明らかにしようとしてきたとも言えるのであるが、そのことを、直接解明することはできないでいる？！

とは言え、現在、その大きな「鍵」を担っているのではないかと考えているのが、「応神→欽明→天智」系と「継体→（安閑・宣化）→天武」系という、百済系王族（最終的には仇台系牟氏？）の相克劇？である？！ただし、その解明には、一方でまた、これも多くの謎？を有している「欽明」を、蘇我氏の事実上の祖とされる「稻目」とする見方もあり、まさに「蘇我氏」が、その正統・正当なる皇統なのではないかということも絡んでくる？！

このことについては、改めて次号で、展開することとしたい！

（5月19日）

49 「蘇我稲目」が「欽明」ならば、かなりの霧は晴れる?!果たして、それは?!

そこで以下、ここでは、前号(48)で述べた観点から、「応神→欽明→天智」系と「継体→(安閑・宣化)→天武」系という、百済系王族(最終的には仇台系牟→余氏?)の相克劇?を、少し具体的に追っていきたいと思っているが、その前に、前者に見える「欽明」と、蘇我氏の事実上の祖とされる「稲目」のことに、改めて検討?しておくこととしたい!と言うのも、その相克劇?の鍵を握っていると思われる「欽明」ないしは「稲目」を、どのように受け止めるかが、解明の道筋を決められるからである?!ただし、この「欽明」と「稲目」の(関係の)解明は、それ自体、かなりの混迷を極める?!

例えば、兼川晋氏は、「稲目」を、(筑紫)物部13世の「尾輿」の弟とされ、その「尾輿」と、「稲目」の娘「堅塩きたし姫」との婚姻によって、その血統が、いわゆる「上宮王家」となっていたとされているが(まさに創られたヒーロー?「聖徳太子」の家系!),それはそれで、十分理解できる?!

だが、一方で、石渡信一郎氏は、その「稲目」は架空の人物で、「欽明」は、「応神」(昆支)の子とされ、例の「ワカタケル大王」(通説では「雄略」!)は、この「欽明」とされている。ところが、兼川氏は、この「欽明」の方が架空の存在で、それに該当する人物が、「倭の五王」の最後の「武→磐井?」とされている!しかも、「ワカタケル大王」が、この「武」であるとも?!

このように、「欽明」と「稲目」を巡っては、私が信頼する両者によっても、かなりの相違がある?!では、何故、そういうことになるのか?!そもそも、その根底には、九州王朝説と近畿大和王朝説の相違があると思われるが、私は、その双方の相互乗り入れ?を前提としているので、そのどちらか一方に、すべて乗っかることはできないのである?!

したがって、ここでは差しあたって、「欽明」ないし「稲目」が、九州倭国の大王であったのか、近畿大和(日本)の大王であったのかということと、一方で、百済の王族「昆支=兄王=応神?」と「軍君=男弟王=継体」は兄弟とされるが(これ自体は、兼川氏と石渡氏は同じ!),彼らの(父)親が、誰であったのかということが、問題となる?!そこからまた、「欽明」ないし「稲目」の素性(関係)も、明らかとなってくる?!

ただし、そこには、必然的に、年代の問題(相違点)が横たわっている?!兼川、石渡両氏は、ともに「昆支=余昆」と「軍君=余紀」が兄弟とはされているが、彼らが、4世紀後半の人物なのか、それとも5世紀後半の人物なのか?で、その人物特定が違ってくる?!兼川氏は、「昆支兄王→倭国王旨?」(途中で本国へ戻った!)と「継体軍君→男弟王」は、百済宗家(沸流系)分枝・仇台系牟(→余)氏、石渡氏は、「昆支→応神」と「継体」を、第20代百済王「毗有王余毗」(温祚系余氏)の子としている!しかし、前者は4世紀後半、後者は5世紀後半の人物となる?!

ところで、ここでの問題は、改めて別にある?!すなわち、(九州)倭国に渡来

(入質→婿入り?)してきた、百済王統の宗主(沸流系余氏)・兄王(応神?。兼川氏は、別に「藤」という名を挙げられている!)から、蘇我氏(もちろん物部氏も?!)、そして天智・天武へと続く、その(倭国)皇統の問題である!とにかく、「記紀」が、「応神_{→藤?}」と「神功皇后_{「息長足姫」}」を繋ぎ合わせ、その背後に「住吉大神」や「武内宿禰」を絡ませているが、そうした経緯の中で、「天智系」と「天武系」の相克の歴史が、歴然と存在するということである?!

ということで、改めて、その相克の歴史を遡らなければいけないが、そもそも兼川氏の言う、「尾輿」と「稲目」の兄弟二人の父親とされている「荒山大連」は、どこの、誰であったのか?!彼の存命期間は6世紀前半と考えられるので、例えば「倭の五王」、とりわけ、その最後の「武」、すなわち、兼川氏によれば、例の「磐井」あるいは、その子の「葛子」との関係がクローズアップされてくる?!そしてまた、その「荒山大連」が、もしも、彼ら(九州倭国)の血筋を引き継いでいたのであれば、「稲目」(「欽明」?)と「尾輿」も、当然(九州)倭国の血筋を引き継いでいたことになる?!

もちろん、それは、百済王族沸流系宗主・「兄王(藤→応神?)」の血筋だということでもある?!しかも、ここで私(達!)が問題とする、「応神」と「継体」が兄弟であるということが、それとどう結びつくのかということも、新たにクローズアップされてくる?!そこで、もし、石渡氏が言うように、「欽明」(稲目?)が、応神の子であるならば、他ならぬ「荒山大連」は、「応神_{=藤?}」、その人だということにもなる?!年代的に、果たして、それが説明可能なのだろうか?!

ただし、それは、当然もう一方の「母親」(母子系統)がどこにあるのかということも、視野に入れておかなければならない?!これについては、今のところまったく整理ができていないが、後々の「天武系」に繋がる血筋であれば(例えば「大海氏」!例の「海部氏」等に繋がる?!)、近畿・大和に広がっていく彼らの動き、相克の歴史が、ある意味容易に理解されることになる?!とは言え、まだまだその具体については、描きようがない?!

そこで、もし、「稲目」が「欽明」(あるいは「武」)であれば、理解としては明快となる(通説の否定となるが?!)!だが、そうなると、「稲目」自身が、(九州)倭国の出身でなければならず、その彼が、いつ、どのように近畿大和(飛鳥)に移動していたのかということになる?!私としては、「蘇我氏」は、ある時期九州から大和飛鳥に移動してきたと考えているが(「吉備」「播磨」や「河内」を経由して?!)、それが、いつ、どのようにといつころまでは、まだ分かっていない?!

とは言え、5世紀以降の、近畿、特に河内の開拓(灌漑等)は顕著であり、それが、百済系の人々の事績であったろうことは明らかであり、百舌鳥(「大仙陵」等)や古市(「菅田御廟山陵」等)古墳群の出現は、そのあたりを雄弁に物語っている?!これが、ここに述べているようなことと関係していることは、おそらく間違いないであろう?!

(5月31日)

50 「応神」と「継体」、「欽明」、そして「天智」と「天武」が、鍵を握っている?!

さて、とうとう本シリーズもまた、まがりなりにも?、50号を迎えた! 一時期は、まさに謎の多さ(壁の厚さ?)と見えない全体像に、かなりの苛立ち(と言うより、不安感、絶望感?)を覚え、己の身の程知らずさを、改めて感じてはいたが(それはそうであろう!とにかく、これまで、とてつもなく多くの人々がチャレンジし、それこそ人生をかけて解明の努力をされてきたものを、多少の読書をしているからと言って、それを凌ごう?なんていうことは、まったくもって虫が良すぎるし、それこそ不遜の極みでもある!), やはり、これは私の積年の夢であり、意地でもあるので、何とか解明の努力?を続けてきた次第である?!

ただし、その出来栄は、もちろん?であり、それに心血を注がれてきた人達からすれば、まさに笑止千万、一顧だにするものではない代物と、なっているのかもしれない?!それはそれで仕方がないが、私にしてみれば、何度も言うが、やるしかないのである!

ということで、これからも(無謀にも?)、私の「古代史の旅」は続くわけであるが、最近、特に「応神」(神功皇后期?)に焦点を当て、そこでの「記紀」の造作(野望?)を、百済系王族の「応神」「継体」(の渡来)を史実として、そこから始まる?!、「応神→欽明→天智」系と「継体→(安閑・宣化)→天武」系という、二つの百済系王統の相克劇?と、彼らが創り上げてきた我が国の建国の歴史、その全体像を描こうとしてきている?!

まだまだその途上であることは言うまでもないが、そこでは、その全体像を描く大きな塊(ピース)となる、いくつかの要素・エピソードを取り上げ、その整合性(→史実化?)を図ろうということであった?!

まず、記紀は、「応神」(神功皇后期?)を基点にして、その歴史を創っているのではないかということであるが、それはある意味真実であり、記紀編纂期の政権者側にとっては、それは絶対に外せないことであった!しかし、その後の推移については、その政権者側にとっては、直接は知られたくないことであり(正統・正当な後継者ではなかった!そしてそれは、ある意味不当な篡奪であった?!)、大掛かりなしかけ(からくり?)を考案し(天照大神を皇祖とする「万世一系」の創出等!), その正統性・正当性を捏造?しようとしたということである?!

これが、我が国古代史解明の最も大きな枠組み?となるが、次に、その大きな枠組みを形づくる、言わば大きな塊(政権発生・交代?)を設け、それを3つの時期(人物期)に配置?し、そこにおける流れを「万世一系」として説明しようとしたということである?!そして、その流れの最も重要な時期である「応神(神功皇后?)期」を、あの手この手を使って粉飾・造作し、それが、今日に至るまで、誰にも暴かれて?いないということである?!

しかし、ようやく(ひょっとしたら?)、見えてくるようにも思うのである?!もちろん、そこには、いわゆる九州王朝説と近畿大和王朝説の大きな壁がある

が、蘇我稲目と欽明を同一人物と見ることができるならば、それが、大きな突破口となるのではないかということでもある?!

と言うのも、ここで改めて紹介するが、例の兼川晋氏は、九州年号の实在等を下に、筑紫倭国と豊国倭国（百済の「檐魯制」あるいは「二都制」と考えられる?!）の存在を主張（実証?）され、それを踏まえた九州王朝説を展開されているのであるが、実は、記紀のストーリーは、その中の豊国倭国を核にして構想されている向きがあり、もし、そうであれば、その豊国倭国が、ある時期（5世紀初頭?すなわち、「記紀」で言う「応神期」?!）近畿・大和に移動し、その豊国倭国（→日本）と、一方で、その後も形式的には存続していた筑紫倭国が、ある意味二朝並立の状態にあったということもできるのである?!

しかも、先に大和近畿に進出していた、その豊国倭国は、ある時期から（おそらく「磐井の乱」?!）筑紫倭国に圧力をかけ（実質的な政権奪取?!→物部麁鹿火あらかい）、筑紫倭国を近畿大和（日本国）に統合しようとしていたとも考えられる（その限りにおける?物部・蘇我氏の共闘?!）！だが、形式的な倭国王権は、依然として九州（太宰府）にあった（→「倭の五王」）！

しかし、例の「白村江の戦い」の敗北により、さらに国力が衰え（一時期「唐」の属国?となっていた?!）、その間隙を縫って、筑紫倭国系の中大兄皇子、後の天智天皇が、近畿（近江）に遷都し、九州倭国皇統は、事実上彼に移った?!そうした経緯の中で、逸早く近畿大和に勢力を確立していた豊国倭国（→蘇我氏主導?）は、途中?「乙巳の変」で敗北?するが、再び「壬申の乱」で政権を取り、天武系王統が全権を掌握した?!

しかしまた、その後彼の死後、皇后持統（天智の娘!）と実力者藤原氏（不比等←こちらも百済系王族?）が結託?し、ある意味九州倭国皇統の正統な後継者（その内実は、九州倭国を見殺しにした?とは言え、一応その皇統は、持統の父親天智が有していた?!）として、その後の倭国（→日本国）を創り上げていった?!ちなみに、それを完成させたのは、「桓武」と言われている?!

こうしてみると、我が国の王権は、ある時期から百済系統の王統によって担われ、現代まで続いているということになるのである?!ただし、それを含んだ、さらに大きな建国の物語は、例えば関裕二氏が描いているような、近江・越・丹波（後）・出雲・尾張、そして吉備、もちろんそれらは、広い意味では同族（倭人）ではあるが、それらが絡んだ形で形成されてきたことは、ほぼ間違いないということである?!

そうした歴史の展開の名残?が、例えば伊勢神宮であったり、出雲大社であったりするわけである?!ということで、これからは、そうした大きな枠組み（ピース）に、様々な具体的なパーツ（事実?）を嵌め込んでいけばよいのである?!改めて、頑張ろう！

（5月31日）

51「応神→欽明→天智」系と「継体→(安閑・宣化)→天武」系の相克劇を追う?!

ここでは、以下、改めて今問題としている、「応神→欽明→天智」系と「継体→(安閑・宣化)→天武」系の相克劇の真相を解明すべく、その間の重要な要素(ピース)となる?事件や人物関係等を、幾つか、新たに抽出しておきたい!

・もう一つの関係氏族息長氏・秦氏(豊国→秦王国?)の存在がクローズアップされる?!

まずは、繰り返しになるが、記紀編纂者達(藤原政権)には、自らの先祖の始源(4世紀前半?)が、百済系王族「応神←藤?」(沸流系余氏)にあるという認識があった?!しかし、「魏志(倭人伝)」の「邪馬台国」(3世紀中頃?、倭国の正統な皇統?卑弥呼→台与)は、流石に隠せなかったため、(120年遡らせ!)「神功皇后」を考案?し、一方で、史実?であった、もう一つの関係勢力息長氏・秦氏(豊国→秦王国?)との関係を暗示させた?!つまり、宇佐(卑弥呼→台与→多分宗像三女神?)と秦王国・秦氏(→近江系・息長氏)が合流?し、近畿大和への橋頭保を形成した?!そして、それが、後の近江や河内への移動?を容易にしていた?!

・4世紀末、(邪馬台国の滅亡後?!)「応神←藤?」が九州に渡来した時には、出雲系と丹波系(→天照大神・天日矛と豊受大神・竹野姫/武内宿禰と息長帯姫/浦島太郎と羽衣伝説?/伊勢神宮内宮と外宮?)が九州にいた!

これは、葦原中つ国(大国主←スサノオ)の全国支配(出雲系と丹波系の統治?!)が先にあったということであり、時の九州責任者?であった武内宿禰と息長帯姫を、九州(倭国)から放逐?したのが、百済本宗家の応神(藤・ホムダワケ?)であったということである(これが、「出雲の国譲り」の直接のモチーフ?!)。

その後、その百済本宗家の本流(→「倭の五王」?!)は、「貴(木・基肆)国」→筑後玉垂宮(高良大社)→太宰府へと移動するが、「磐井の乱」を境として、その枝国(豊国倭国・継体)は近畿大和に移動(進出?)した?!

また、その後の「白村江の戦い」の後、その百済本宗家の一派(生き残り?→温祚系余氏→倭国皇統)が、近畿大和に移動した?!その後、「蘇我本宗家(上宮王家?)」を滅ぼし、近江に遷都していた「天智」が、九州年号を使用していた事実?は、彼が、九州倭国の王統であったことを示している(←古田史学の会)!

・越で、ホムダワケ(応神?)と気比大神(ツヌガアラシト?!)が名前を交換した?!果たして、その意味は?!

これは、誰かが、登場人物(「主役」として入れ替わった(差し替えられた?)ということであるが、その時の、(越の)実力者(「日本」?の創始者?!)であった気比大神(ツヌガアラシト→天日矛?!)に、政権の交代を認めさせた。つまり、「応神?」(ホムダワケ)がツヌガアラシト(天日矛?!)になり、彼が、倭国(→「日本」?)の支配者となったということである?!そこに繋がっているのが、後の天智であるが、主力(蘇我氏→上宮王家?)は、白村江の戦いの後、豊国倭国

系・継体（→息長氏・秦氏？）を頼って？近畿へ向かい、蘇我（飛鳥）王朝を樹立したが、天智は、それに代わって（打ち破り?!→「乙巳の変」）、近江に遷都したということである?!

・継体が、「磐井の乱」の時に、物部麁鹿火あらかいに言ったとされる、「東（「長門」以東）は自分が、西（「筑紫」以西）はお前に任せる」ということはどういう意味か?!ただし、磐井と継体は、同族・仲間であった?!

これは、継体の全国支配?の第一歩?となるものであるが、彼が指示した地域には、その間に「豊国」があり、これは、継体が、既にその国の支配者（大王）であったことを意味している?!ただし、彼らは、同じ百済系であり、磐井は温祚系余氏（当時の百済本国）、継体は仇台系牟氏（本宗家の沸流系余氏につながっている?!）であった?!磐井は、「倭の五王」の「武」?!であるが、半島情勢（特に伽耶・新羅）への利害関係から、両者は対立した?!ある意味、これは、温祚系余氏と沸流系余氏（→仇台系余→牟氏）の諍いであったとも言える?!これが、後の「天智系」と「天武系」の相克劇の原因（種）だったかもしれない?!

・「応神」自体は、誰かの仮構（残国兄王?→藤・ホムダウケ?）であるが、「記紀」は、その人物を「応神」と「仁徳」に分けている?!ただし、二人の人物の、東への進出は厳然としてあった（→誉田御廟山古墳・大仙古墳）!

九州（貴・木・基肆国）へ渡来した「応神←藤?」は、豊前（宗像←海部氏?）と共闘して、近畿に移動?した!ただし、その百済系には、2（厳密に言えば3）系統があつて、弟筋に当たる「温祚系余氏」が百済本国当主となり、兄筋の「沸流系余氏」（→仇台系余→牟氏）は倭国の当主となった?!その間、筑紫倭国は、「倭の五王」の「済」の時、「温祚系余氏」（→興・武）となっていた?!

「記紀」は、5世紀初頭、近畿河内地方に進出してきた、（百済→）九州からの勢力（これを「応神」としている?!）を曖昧?にしているが、そこには2人（兄弟?）の王族がおり、それを、「応神」と「仁徳」に分けている?!その陵が、「誉田御廟山古墳」（伝応神陵）と「大仙古墳」（伝仁徳陵）とされるが、実際は、「応神」と「継体」の陵なのではないか?!つまり、「仁徳」は、仮想された人物なのではないか?!

・貴（木・基肆）国が核となって大倭（倭）国（筑紫倭国・首都太宰府）となり、それは、8世紀初頭まで存続したが、「記紀」は、九州豊国倭国と、筑紫倭国から分かれていった「天智系」を、正統・正当な皇統としている?!

その根拠は、「欽明（稲目）→蘇我系・上宮王家」が、「応神」を基点とする筑紫倭国（百済沸流系→温祚系余氏）の正統な後継であること、そしてそれは、その前に実権を握った「継体」と、筑紫倭国から分かれた「天智系」が、後の王権を掌握したということである?!この流れを、いわゆる「万世一系」の皇統として、苦心惨憺造作したのである?!もちろん、「天武」は、「継体」の血を引く人物である?!ただし、「継体」は、二人いたかも?!

（6月9日）

52 『隋書』『唐書』に見る、二つの「倭国」?!そして「日本国」の絡み?!

ところで、ここにきて、ある時期までの二つの「倭国」、そしてさらに、「日本国」の实在ということが、改めて頭を擡げてきている?!一つは、今最も意を注いでいる、百濟王族の「応神→欽明→天智」系と「継体→(安閑・宣化)→天武」系の相克劇?の解明から、もう一つは、二つの「倭国」、すなわち「倭_{たい}・大倭国=筑紫倭国」と「秦王国=豊国倭国」の関係の解明からである!

要は、これを、どのように整合させればよいのかということになるが、そのヒント(重要な鍵?)が、当時の中国史書(『隋書』『唐書』)にあるのではないかということである?!ただし、通説のような、ある意味単純な理解では、そこにある真実?は見えてこない?!

ちなみに、『唐書』には、『旧唐書』『新唐書』というものがあり、そこにおける、「倭国伝」や「日本国伝」の意味・内容が、かなり複雑な(理解しづらい?)ものとなっていることは、多くの人の知るところとなっている?!

いずれにしても、多分?、記紀編纂者達も、そこでの記載内容と、自らが描こうとしている史実の整合性を、必死で取ろうとしたのではないか(例えば、有名な「聖徳太子」・「小野妹子」の「遣隋使」譚)?!そのことは、ひとまず置くとして、とりわけ今回問題にしていることは、まさに『隋書』『唐書』に見る、二つの「倭国」、そして「日本国」の絡みである!

端的には、二つの「倭国」、そして「日本国」の实在ということであるが、これまで述べてきたことから、その「複雑な(理解しづらい?)関係」が、よく(整合的に?)分かるということである?!だが、そのことの指摘は、あまりにも、これまでの通説にはなかった?!ある意味、とんでもない事実である?!

さて、具体的に言うと、周知のように、まず『隋書』においては、「倭(倭?)国伝」ということで、「倭」は「倭」の間違い、あるいは写し間違いだという言葉質もあるが、そこに書かれていることは、実は大変なことなのでもある?!概略すると、以下のようである。

『隋書』(636年+656年)東夷伝：範域東西(南北?)五月行、南北(東西?)三月行(『魏志』の南が東とされている?!)、都：邪馬堆(邪馬臺?)、周圍海、阿蘇山がある!→有明海北東部沿岸→少なくとも卑弥呼の時代から阿每多利思北(比?)孤(天足彦?)の時代(600年頃)までは、倭国の中心であった?!中国(魏・晋・斉・梁・隋)と通交していた!

『旧唐書』(945年)東夷伝「倭国」：倭国は古の倭奴国である(倭奴国から始まったという意?!)!唐代には、周圍の小島50余国も倭国に属す!隋代よりも、領土が少し拡大?!倭国は、唐代まで世々(ずーと)中国と通交!

『旧唐書』列伝「劉仁軌」：「白村江の戦い」(663年)に関わって、ここでは、倭国、倭兵と、「倭」が使われている!→この「倭」は、これまでの「倭」(九州倭国)であったことを示している?!

『旧唐書』東夷伝「日本国」：日本国は倭国の「別種」（→日本国は倭国ではない?!）！その国は「日辺」にあったので「日本」とした！倭国自ら、名が雅ではないので「日本」に改めた！→倭国ではない「日本」が何故、名を改めたのか（→矛盾）？→中国側は、それを怪しんだ！→旧唐書は、「倭国≠日本国」の立場・認識。日本は、昔は小国！→現在、倭国を併合?!→倭国を、「ヤマトのくに」とすれば、矛盾はない?!→日本国は、東西南北が各数千里で、西と南は大海に接し、東と北には大きな山があり、境界となり、その外側は「毛人」の国である！→『隋書』東夷伝、『旧唐書』東夷伝「倭国」とは、明らかに地理地形が異なる?!

『新唐書』（1060年）東夷伝「日本国」：日本は小国であったので、倭国に併合された！倭が、その名を奪った！「日本は古の倭奴国である」！→倭奴国は九州博多湾周辺にあった国であるが、日本の出自が、倭奴国であった可能性はある?!しかし、「倭＝日本」とするため、単純に倭を日本にすり替えた?!→「日本は東西が五月行、南北が三月行あり、左右の小島50余も日本に属している。日本の都は方数千里で、南と西は海で、東と北は大きな山が境界をつくり、その外は毛人の国である」とある！→『旧唐書』東夷伝「倭国」（『隋書』東夷伝?）の倭国の地形が、日本全体の地形となり、日本の地形だったものが、日本の都の地形とされている！

以上、多少の認識の違い、誤解はあったとしても、中国史書がまったくの嘘?を書いたとは思えない！つまり、そうする必要がないのである！かたや、それを説明（弁明?）する日本側には、それなりの理由があったことは疑いようもない?!されば、それはどういうことであったのか?!

それこそ、その中国史書の背後にある真実を、他の証拠（日本側の史料、例えば『日本書紀』や『古事記』、そして考古物等）から、見つけ出す（類推?）しかない?!それが、これまで、かなりの人が行ってきた「論証」であるわけである（なお、ここでは、矢治一俊という人のHPから、文章表記等は、ほとんど借用させてもらっている!）?!

だが、改めて、もう時期?、その解明の努力は報われるであろう?!何故なら、やはりそのようにしか考えられないからである?!では、そのようにしか考えられないこと、それはどういうことか?!余りにも明白である?!（九州）倭国の一部（一派）が、ある時期（複数回?）近畿大和に移動（進出?）し、彼らが「（近畿）倭国」となり、やがて九州を含む「倭国」全体を糾合し、それを、自らの名前「日本国」として、我が国の歴史にしたということである?!

そうなれば、51・52でも述べたように、「欽明（稲目）→蘇我系・上宮王家」、そして「継体→天武」系、さらには筑紫倭国から出た「天智」系を、どう緋くかである?!かなりの光明が、見え始めたかもしれない?!

（6月9日）

53 「701年」の意味?!単なる「大宝律令」制定年ではない?!何故か?!

ここで、話は飛ぶように見えるかもしれないが、西暦701年は、周知のように、「大宝律令」制定の年であると、学生（中学校?）時代に教えられたが、645年の「大化の改新」とともに、いわゆる「大和朝廷」（日本）の律令国家としての最終仕上げを寿ぐ、まさに輝かしい年であったとされてきた!

しかし、である!このシリーズでも、何度も述べてきたように、645年の「大化の改新」は、当時の大臣（大王^{おおきみ}?）であった「蘇我入鹿」の暗殺（→「乙巳の変」）を指しており、それに続く、「白村江の戦い」（663年）、「壬申の乱」（672年）等の動乱?の歴史は、これまでの通説?を、それこそ劇的に?覆すものである?!

そこで、それについては、何故そうなる（った）のか?、ということにおいては、ほぼ説明（説明）はできているように思われるが（表現は、かなり稚拙?ではあるが?!→持統・藤原政権の企図、野望?!）、具体的に、誰（達）が、どのように、その一連のプロセスに、それぞれ関与・関係していたのかについては、まだまだ詳細には説明できないでいる?!

そうした中、大事な本だとは思っていたが、その後ほとんど忘れかけていた、斎藤忠氏の『あざむかれた王朝交代 日本建国の謎』（学研パブリッシング、2011年）を、偶々?読み返していたら、標記の「701年の意味?!」を考えることによって、新たなアプローチが可能であることが分かってきた?!それは、彼が「王朝交代」と呼ぶ、「倭国から日本国への転身?」の、言わば「最終現場検証」からの実態（史実!）把握ということである?!

具体（根拠等）については、同書を見てもらうほかないが、例えば、国家制度の一つとしての「地方行政区画制（名称）の変更」（700年まで使用されていた「評^{こおり}」が、701年以降は「郡^{こおり}」となった!）、そして、このシリーズでも何回も紹介?している「九州（倭国）年号の700年での途絶」、すなわち、この701年をもって、新?元号（大宝~平成）が始まっているということである?!

その他にも多々あるが、とにかく、こうした事実?は何を物語っているのか?!それは、他でもない!700年までの国と701年からの国のあり様が違うということである?!

しかも、時は、（記紀によれば）文武天皇（天智天皇の娘で、天武天皇の皇后・持統天皇の孫・幼名軽皇子）の母・元明天皇（こちら、天智天皇の娘!）の御宇（時代）であるが、最早この時点での武力転覆（→軍事クーデター）はないので、ある意味「粛々と」、「革命」（天命が替わるとのこと!）が進行していたということでもある?!

さて、いずれにしても、ここから何を読み解くかであるが、大きく解釈して、先に紹介した『隋書』『唐書』における記述内容と関係している（はずである?）が、少なくとも700年時（まで）においては、我が国は、（形式上は）「倭国」（と

呼ばれるもの)であったのであり、701年以降に、(名実ともに?)別の国(→「日本国」となったということである?!

ちなみに、その国名については、「倭(委)」→「大倭(倭)」→(ある勢力が、九州から近畿へ)→「大和」→「日本」というように変遷していったものと思われる?!ただし、いつの頃からか、「倭」「大倭」「大和」「日本」は、すべて「やまと」という音価で読まれていたことも、事実である?!

その「やまと」という音価が、いつ(頃から?)、どこで、誰(ら)が使用していたかは、まだまだ明確にはできないが、九州の、件の「邪馬台(臺?)国」、地名として残っている「山門」「大和」、多分それら(の勢力?)が関係しているだろうことは容易に?推察され得るが、一方で、近畿大和(今の奈良県)が、そう呼ばれるには、またそれなりの理由があることも事実であろう?!

前にも述べたように、私としては、(九州の?)「やまと」に所縁のある勢力が、ある時期近畿大和に移動し、その自らの、新たな土地を、「やまと」と呼んだというように考えてはいる?!「まほろぼ」としての「やまと」、そこには、誰(何)かの郷愁が、どこかに漂っている?!

ということで、改めて、この「701年の意味?!」であるが、「倭国」から「日本国」への転換(呼び方は、国内では、双方ともに「やまとのくに」であった?!)は、ほぼ間違いない事実であったとして、具体的には、どのようなこと(変化?)が、そこにはあったのであろうか?!

端的には、皇統(王統)の変化であるが、実は、それが、私がこれまでしつこく?追究してきた、「天智系」と「天武系」、すなわち「応神系」と「継体系」の相克?の歴史でもあるのであるが、単純に言うと、何故、片方の歴史が隠匿されているのかということである?!

しかも、そこでは、「継体」という人物の不可解さも露呈?しており、結論から言えば、まったく別の、つまり二人の「継体」がいたならば、その整合性は、かなり取れてくるということにもなるのである?!

それは何故かという、と、「記紀」は、何度も言うが、5世紀初頭?の百濟系王族の「応神_一」を基点にして、「継体」、そして「天智」の流れ(皇統譜)を、言わば「正統なもの」(→万系一世は、それを柱としている?!))として描いていると思われるが、その「応神」と「継体」、そして、その「継体」と「天智」の関係が、どうしてもスムーズに結びつかないということにある?!

その一番の大きな理由は、「継体」が、近畿近江の出身であることであるが、しかも、今となっては、その「継体」という名前自体にも、通説とは違う意味(→命名者の淡海三船は知っていた?!)があるのではないかということもある?!それが、まさに「二人継体説」なのであるが、その可能性は、前にも述べたように、兼川氏の考察(『二中歴』→九州年号の解説)によって、明らかに出来そうである?!

(6月13日)

54 「二中歴→九州（倭国）年号」に見る「継体」の謎?!二人の「継体」?!

さて、前号（53）において、まさに「二人の継体説」の可能性についても言及したが、ここでは、その可能性がどのようにあるのか、その具体について、少しだけ?ではあるが、改めて考察しておくことにしたい?!

まず、関係する「九州（倭国）年号」であるが、その実在については、ほぼ間違いない?!ここでの問題は、その創始であるが、初発の「継体（期）」が、元年（517）～5?年（522）、最後の「大化」が、元年（695）～5?年（700）である?!ここでは深入りはしないが、あの「大化の改新（645）」の「大化」が、ここ（「九州（倭国）年号」）に見られることは、別な意味で?大変興味深い?!だが、「記紀」における実年代?とは、明らかに50年違っている?!なお、その初発の「継体」がなく、次の「善記」から始まるものもあるという（こちらが「倭国皇統本宗系」→天智系?、「継体」があるのは、分家筋の「藤原宮倭国皇統系」→天武系?とされる?!）?!

片方に「継体」がないというのも、実に変だが（何かの作為があった?）、それはともかく、「二人の継体説」においては、一人が、「九州倭国系→豊国倭国→百済王族男弟王」、もう一人は、通説の「近畿近江系」の「男大迹^{オホド}王→彦太尊?」ということになるが、この二人が、どこかで結びつけば（例えば、ある時期に九州から近畿近江に移動した?!→「磐井の乱」の後、そういうことも考えられる?!）、もちろん、それでいいということにはなる?!

しかし、近畿河内地方への進出は、まさにそれで説明できようが、例えば「応神」との兄弟関係（時代的な問題?!→「記紀」では5世孫とされる?!）、そして、今回ここで正式に?採り上げる、「二中歴→九州（倭国）年号」の創始年号「継体」との関係は、まさに別の文脈での「解釈」を必要とするのである?!

そこでであるが、この「二中歴→九州（倭国）年号」は、初発の「継体」（517～522）、そして最後の「大化」（698年から、別に「大長」をおいているものもある!）はともかく、その間の統治国（「建元権」を有する国）が「倭国」であったことを示すものであることは、言うまでもない?!

ただし、それが、（その間）ずーと九州（筑紫）倭国であった、つまり、当主（事実上の支配者?）が、一貫して九州（筑紫）に居続けたことを意味するものではない?!このことは、天智の「近江京」を見れば、ある意味一目瞭然である?!政体としては、「九州（筑紫）倭国」であったとしても、その政権の内実は、近畿（近江）に移っていたということである?!

だが、もちろんこれも、既に確認したように、九州（筑紫・太宰府）においては、一方で「（本家）倭国→阿每多利思比孤等」が居住していたことも事実なのである?!ただし、「記紀」は、その「九州（筑紫）倭国」の存在、そして、その関係までも、闇のベールに隠してしまっている?!改めて、何故なのであろうか?!

その理由は、敢えてここでは詳述しないが、何度も言うように、件の「邪馬

台国所在地論争」と同じように、「九州か近畿か?!」あるいは、単純な「二朝並立」論では説明できないような「真実?」が、そこにあるということである?!そこでの改めての問題（謎!）が、まさしく「継体」という人物（名）、そして、その「建元年号」なのである?!

そこで、もし「継体」が、一人の人物で、しかも、百済系王族（仇台系牟氏）で、九州豊国倭国の大王になっていた人物であれば、彼が、まず「二中歴→九州（倭国）年号」の「継体（期）」（517～522）に、九州にいて、いわゆる「磐井の乱」（524or527?）において、筑紫倭国（磐井氏）から、その実権を奪い、しかもその後、近畿河内（→近江）?に移動したとするならば、少なくとも、行動的にはあり得るであろう?!

だが、これは、「記紀」においてはあり得ない?話で（少なくとも親の代には、既に近江高島にいた?!）、しかも、「記紀」における即位（第26代）年が507年（20年近く、大和周辺を遷り替わったというが?!）、そして、崩御が531年（→辛亥の変?!）となっている?!

こうしてみると、明らかに、「二中歴→九州（倭国）年号」の「継体（期）」（517～522）と、「記紀」における「継体」の、特に活躍の場、活躍の年が、食い違って（ズレて）いることが分かるのである?!これを、まったくの別人として扱うか（「継体」という名が、後から号つけられたものであれば、基本、それはあり得ない?!）、あるいは一人の人間の通史?として扱うかであるが（年代的、物理的に無理がある?!）、「記紀」が、どうしても「同一人物」として描いて（描こうとして?）いるのであれば、答えは一つしかない?!

両者を、無理矢理結合?させているということである?!多分、前者（前半）を、九州（豊国倭国）の「継体」、後者（後半）を、近畿（近江）の「継体」として、ということである?!ちなみに、それが、「継体」（の名）が借用された、（本来の?）の意味だったのかもしれない?!

最期の類推は、かなりの飛躍（遊び?）かもしれないが、「応神5（6?）世孫」だからという、ある意味「見え見え?」の「継体」命名譚は、何とも胡散臭いとも言えるのではないか（5世孫までが、皇位継承の、ぎりぎりの血統であるという認識、ルールが、当時、実はあったようなのである?!）?!

ただ、ここで、別な意味で気がかりなのは、後者（後半）の継体が、たとえ「近畿（近江）」の人物であったとしても、その（近い?）先祖が、例えば「九州（筑紫）倭国」の出身であり（そのため、こちらも、件の「九州（倭国）年号の建元権」を有していた?!）、つまり、「彦太尊」（「継体」の更名）が、「九州（筑紫）倭国」の人物であったならば、「九州（倭国）年号」の建元は、ある時期の、彼の（先祖の?）治績だった?!何故なら、あくまでも「豊国倭国」は、「筑紫倭国」の分家（「檐魯」の一つ?）だったからである?!本家を差し置いて、果たして「建元」が可能であったのかということである?!

（6月24日）

55 本当に、「応神」と「継体」は兄弟か?!だが、そこには別の真相も?!

若干、前号(54)からの続きとなるが、ここでの結論(推論?)からすれば、ある政権の、ある意味原初でもあった、「九州(倭国)年号」の「継体(期)」という初発年号を、後の記紀編纂者達が、件の「(九州)豊国倭国」の軍君_{男弟王}に移着させ、一方で、もう一人の「近畿近江」の「男大迹_{オホド}王→彦太尊」にその名称を被せ、二人を、あたかも一人の「継体(天皇)」として「継ぎ」、まさに「応神」から「継体」、そして「欽明」、さらには「天智」「天武」へと続く、万系一世の系譜を、(美しく?)創り上げているのではないかということである?!

その根拠としては、「継体(天皇)」という名前は(も!),後に諡号されたものであり、少なくとも年号としての「継体(期)」までは、年号と人名(漢風諡号)は同じにはならない?!したがって、そこに、何らかの作為がある?!

つまり、先にあった年号と人名が、同じにされた?!しかも、それは、何(誰)かと何(誰)かを「継体」させるため?!まさに、そういうことであったのではないかということである?!

ちなみに、九州(倭国)年号の創始者とされる「豊国倭国」の「軍君_{男弟王}」、すなわち九州の「継体」は、崩御年522年(古事記)と527年(日本書紀)の違いはあるが、九州(筑紫)倭国で死んだとされる(兼川説)?!決して、近畿ではない?!であれば、ますます「近畿近江」の「男大迹_{オホド}王→彦太尊」に、その名前と治績が「継体」されているということになる?!

ところで、これまで私は、「応神→欽明→天智」系と「継体→(安閑・宣化)→天武」系の関係(相克劇?)を、本当に嫌になるくらい(それだけ、よく分からないということでもあるが?)、探ってはきてみた?!だが、ここで、「応神」と「継体」の関係、すなわち、彼らが、本当に兄弟だったのかということについて(石渡説)、一応の決着はつけなければと思っている?!

何故なら、その真否によって、これまでの結論(推論?)が、かなり違うものになってくるからである?!そして、それによって、新たな課題(問題)も、再浮上?してくるからである?!そのため、ここでは、改めて、本当に「応神」と「継体」が兄弟であったのかどうか?!今となっては、ある意味「大本命?」の謎となったが、その真否?について、現時点での結論(仮説?)を出しておきたいということである?!

まず、その結論とすれば、「応神」と「継体」は、そのように見えなくもないが、実は「兄弟」ではなく、そもそも「同時代の人物」でもなかったということである?!ただし、そのモデルとなった人物は実在しており、彼らは、ひょっとしたら、「兄弟」であったかもしれないということではある?!そのことを示唆するのが、例の兼川氏の考察であるが、それによれば、「応神(兄王・藤)」と「継体(男弟王・軍君)」は、まさしく同時代の人間ではない?!したがって、兄弟であろうはずもない?!ただし、「昆支→倭王旨」と「軍君(男弟王)→継体」は兄弟

ではあった（これは事実?!）！

要は、百済から渡来した「昆支」という人物（仇台系牟氏）が、「応神」とされているかどうかの違いなのであるが、今の私は、石渡氏（林氏）が唱える「応神」と「継体」の兄弟仮説？は、成り立たないのではないかと考えているということである?!

しかしながら、一方では、「応神」と「継体」の兄弟仮説？は、近畿河内の二つの巨大古墳の存在から、単純には消し去ることもできないでいる（この時期百済系の勢力、つまり二人の兄弟？が進出してきていた?!）！したがって、もし、それがもう一人の「継体」、すなわち「男大迹^{オホド}王→彦太尊」との関係であれば、もう一度、その可能性を検討してみる余地は大いにあるようにも思える?!

ただし、もちろんそれは、百済本宗家の沸流系余氏、当時の百済残国の兄王・藤との関係ということにはなる?!したがって、時代的には、「昆支→倭王旨」と「軍君→継体」よりは、当然前（4世紀前後?）ということになる?!

そこで改めて、「応神→兄王・藤」と「継体→彦太尊」が兄弟なのかどうかであるが、これについては、残念ながら、今はまだ何とも言えない?!私にとっては、新たな、そして、大いなる「謎」?ということになるが、いずれにしても、もし、そうであるということになれば、改めて「記紀」は、二人の「継体」を創出?して、その「(合体?)継体」を「応神5(6?)世孫」として位置づけ、上記二人が兄弟であったことを隠していることになる?!

ちなみに、「応神」自体は、既に明らかかなように?!、時代もずらされた、誰かの虚像ということになるが(最も重要な実在人物で、まさに百済残国の「兄王・藤」?!)、一方の「継体→彦太尊」は、その「応神」の子とされている「仁徳」、またはそのモデルとなった人物「弟王」?だったということにもなる?!

とにかく、ここでは、「応神」と「継体」が兄弟であり、「欽明」が「継体」の子ではなく、「応神」の子であれば、そして、さらに、その「欽明」が、蘇我の「稲目」であり、その兄が「物部尾輿」であれば、蘇我氏(→上宮王家)や物部氏の出自、あるいはその関係も新たに分かるのであり、その後の「天智系」と「天武系」の相克の構図も見えてくる?!

だが、これについては、この期に及んでも、なかなか結論(仮説?)は出せない?!その中で、「稲目」が「欽明」であるということになれば、かなりの突破口となり、人物関係的には、かなり霧が晴れることにはなる?!しかし、そうであれば、改めて複雑な問題も出て来る?!

何故なら、彼(欽明)自身が、(九州)倭国の王でなければならず、その彼が、いつ、どのように近畿大和(飛鳥)に移動していたのかが明らかにされなければならない。欽明(稲目?)が、大和飛鳥にいた(移動していた?)ことは、確かな事実であろうからである(彼が、吉備等に「屯倉」を作っていたという話はある!)?!

(7月5日)

56 「重要事件？」と「倭国年号」の照合から、何かが見えてくる?!

ところで、件の「(九州) 倭国年号」から(年号の創始のきっかけ・理由やその建元者?)、これまで知らされている古代史における重要事件、あるいは記紀においては、逆に(意図的に?)些末な事件としてしか扱われていない事件(もちろん、まったく無視?されているものもある?!)、それらから、これまで追究してきている、(九州→近畿)倭国(「記紀」においては、大和朝廷?!)の実態が、かなり連続的に解明できるように思われる?!もちろんこれも、例の兼川晋氏の考察(指摘)から得られる、一つの帰結ではある?!以下、それを列挙してみたい!

- ・ 4世紀前半?!: 百濟(残国)滅亡前、宗主家(沸流系余氏)の兄王(滕?→応神のモデル?)と弟王(→仁徳のモデル?)が、九州に渡来し、その後近畿に移動した(勢力を拡大させた?)!その血統(皇統)は、その後の「倭国(全体)」の血統となる?!ただし、兄王は分かるが、弟王(の実態)は分からない(ひょっとしたら、「仁徳」?!)!いずれにしても、彼(ら)と、神功皇后(息長帯姫)・仲哀(天日矛→武内宿禰→事代主→住吉大神のダミー?!)の関係が問題となる?!さらにまた、両者の近畿(河内)への進出、すなわち二つの巨大古墳(誉田御廟山陵・大仙陵)が気になる?!
- ・ 421(413)~478(502): 『宋書』記載の「倭の五王」は、その宗主家(沸流系余氏)の兄王(滕→応神のモデル?)の子孫・後裔である。ただし、「済」の時に、温祚系余氏にその血筋が替わり、爾来九州(筑紫)倭国は、温祚系余氏の皇統となった。一方の、豊国倭国(秦王国?)は、沸流系余氏から仇台系余(→牟)氏に移り、それが近畿大和への主力となった?!
- ・ 478: 「倭の五王」最後の「武」の時に、中国(南朝・宋)への遣使(冊封関係)を止め、独立?国家への道へと進んだ?!「武」は、温祚系余氏の「磐井」と考えられる?!ただし、528(→本当は515?)年の「磐井の乱」で弑逆された!しかし、葛子→アメタリシヒコ→薩野馬?と、一応その皇統は、(筑紫)倭国(本家?)として、701年までは存続した?!
- ・ 517: その独立?国家は、この年に、最初の元号「継体」(517~522)を建てた!この時の王(建元者)は、継体とされるが(兼川説)?!、少なくともこの時までは、年号名と人物名が同じだとは考えられない(後で、淡海三船がそう仕組んだ?!)?!したがって、その年号創始者が誰であったのかが、新たに重要な謎となる?!ちなみに、記紀の「継体(天皇)」の在位期間は、507~531年とされている。⇒**継体(517~522・継体?)**
／善記(522~526・**倭鹿火**)
- ・ 528(515?): 磐井の乱勃発。ただし、この乱が、もしも515年であったならば、その乱の勝者が、改めて元号を創始したことになる?!「記紀」によれば、その勝者は、継体(男弟王)と物部倭鹿火になっている?!そして、九州を制したのは物部倭鹿火であった?!ということは、その元号創始者は、物部倭鹿火?!一方、死んだ磐井の息子?の葛子が、一応家督を継いだ?!そして、通説の継体(天皇)(→息長氏?!)は、それを機に近畿・近江に移動していった?!そこで、尾張氏等と組み、豊国倭国の王権を近

- 畿大和に樹立した?!→近畿倭国 (→日本国) ?! ⇒**正和 (526~531・麩鹿火)**
- ・531:「辛亥の変」と呼ばれるクーデターが起り、日本の天皇、皇太子・皇子が死去した(『百濟本記』の記述を採用?!)。多分、その「変」の首謀者は、九州(筑紫)倭国の誰か?!何故なら、死んだとされる天皇、皇太子・皇子は、先に政権を篡奪?していた継体・麩鹿火系?!改めて、首謀者は、物部尾輿か欽明か(「ワカタケル大王」かも?!)?! 欽明が継体の嫡子であれば、このケースはない!ただし、「欽明」虚構説、また「蘇我稻目」説あり?!なお、稻目は、尾輿の弟とされるが(兼川氏)、その場合誰を殺したのか?!麩鹿火は522?年に死んだとされるので、その血統(嫡子?)か?!それとも、近畿に移動した継体及びその嫡子(安閑・宣化)の死を指すのか(男大迹死→534)?! こちらの可能性が高い?!ということは、この時「欽明」は、近畿の方に移動していた?!
- ⇒**教到 (531~536・麩鹿火)・僧暲 (536~541・石弓若子)・明要 (541~552・石弓若子)**
- 552:物部王権(麩鹿火系)から阿每王権(尾輿系)へ!具体的な人物は?→石弓若子(麩鹿火の子?)から尾輿へ?!これは、何を示しているのか?!→九州(筑紫)倭国政権内の混乱と阿每王権(尾輿系)の台頭?! ⇒**貴楽 (552~554or569・尾輿/稻目)・法清 (554~)・兄弟・葦和・師安・和僧・金光 (570~575・馬子)・賢称・鏡当 (~585・馬子)**
- 587:「丁未の変」と呼ばれる武力衝突?が起り、物部守屋が、入鹿によって討滅される→蘇我系(→上宮王家)に政権が移動?! ⇒**勝照 (585~589・馬子)・端政 (589~593・阿每王権年号)・告貴 (594~601)**
- 600:「隋」へ遣使した「アメタラシヒコ」は、蘇我系(→上宮王家)の九州(筑紫)倭国の王(「日出処天子」)!だが、蘇我系(→上宮王家)は、徐々に近畿(斑鳩・飛鳥)に移動し、そこで、645年の「乙巳の変」まで、政権を担った?!いつ、誰が、どのように移動したのか?!聖徳太子?推古?!とは?! ⇒**願天 (601~605) / 法興 (591~622・上宮王家年号)・光元 (605~)・定居・倭京・仁王・僧要・命長 (640~647・上宮耳)**
- 645:乙巳の変→大化の改新(改新の詔)。大臣(天皇?)蘇我入鹿の暗殺→一応孝徳(皇極の弟?)が皇位に就く! ⇒**常色 (647~652)**
- 663:白村江の戦い。唐・新羅連合軍と倭国・百濟(残党!)連合軍の戦い。百濟は、これにより完全に消滅!ただし、ここの倭国は、九州(筑紫)倭国が中心であった!時の百濟は、九州(筑紫)倭国と同じ「温祚系余氏」であった!なお、この敗戦を機(前?)に、(筑紫朝倉の)天智は近江に遷り、そこで(筑紫)倭国皇統を宣言した(受け継いだ)! ⇒**白雉 (652~661)・白鳳 (661~684→長すぎるが、それだけ大変な混乱期?→政権の移動?!)**
- 672:壬申の乱。天武が、天智系を一時期押さえた!何故、それが出来たのか?!近畿倭国→日本国の頭領だった?! ⇒**朱雀 (684~686)・朱鳥 (686~695)**
- 701:大宝革命(大宝律令)。名実共に、倭国から日本国へ!持統から元明へ(両方共に、天智の娘)!藤原不比等の暗躍?!天武朝の踏襲のように見せかけているが、実は(天照大神を皇祖とする)新王朝の樹立⇒**大化 (695~701※間に「大長」あり?!)**

(7月7日)

57 百済系?の「蘇我氏」「物部氏」が、(九州→近畿)倭国の正統な後継だった?!

さて、これまで直接は触れなかったが、件の兼川氏の研究(指摘)は、実はとんでもない事実?を、我々に提示しているのでもある?!それは、我が国古代史における「最大の豪族?」、すなわち「蘇我氏」や「物部氏」が、(九州→近畿?)倭国の正統な?(ある時期からの)後継者であったということである?!

通説(俗説?)によれば、「蘇我氏」は、例の「大化の改新」(本当は、その前の「乙巳の変」)によって、中大兄皇子(後の天智天皇)と中臣(藤原)鎌足によって、当時の本宗家当主?「入鹿」が弑逆されたことで知られている(ただし、一族全てが滅んだわけではない!)

その祖先は、渡来系(百済)の「木羅満致」(→蘇我満智?)という説もあるが(系譜によれば、蘇我氏は、満智から続くとされている?)、最後の三代、つまり「馬子」「蝦夷」「入鹿」は、あたかも「天皇」のように振る舞っていたように描かれている?!なお、これについては、『日本書紀』は隠し、『古事記』は、武内宿禰の後裔の一つ(古代の有名氏族のほとんど?が含まれている?!)だとしている!

一方の「物部氏」は、「出雲の国譲り」の場面での「布津主神(刀剣)」を始祖とし、いわゆる「天津神」の一つとされているが、平安中期に、その末裔によって編まれたとされる『先代旧事本記』(偽書説もある?!)によれば、例の「神武東征」よりも早く、近畿大和に降臨していたとされる「饒速日にぎはやひ命」の末裔で、直接の先祖は、その「饒速日命」の息子の「ウマシマジ(デ)命」とされる?!軍事、祭祀等の最高責任者とも言われ、いわゆる「天皇家の外戚」として、長らく君臨していたように描かれている(本当は、天皇家そのもの?!)?!例の「七支刀」(百済からの贈り物?!)所蔵で有名な「石上神宮」は、その物部氏の総本社でもある?!

とにかく、この両氏族が、我が国古代史において並々ならぬ存在を示していることは、一方では明らかなのではあるが(「大臣」「大連」という姓かばねも、もちろんそうであるが!)、その真(深?)相については、何故か不分明と言え、不分明なのである?!

特に、蘇我氏においては、その感がより強く、「馬子」「蝦夷」「入鹿」といった蔑称?は、ただそれだけでも異様?であり、そしてまた、その一族とも言える「聖徳太子」に昇華?された「上宮王家」等は、まさしくその極みであるとも言えるであろう?!

ところで、そうした両氏族ではあるが、改めて兼川氏が説く、(九州)倭国説によれば、ある時期(5世紀初頭?)の「荒山大連」の二人の子、すなわち「物部13世尾輿連」と、その弟「物部目連(稲目?)」が、それぞれの直接の祖?とされる?!もちろん、その「荒山大連」は、その当時の、物部氏全体の頭領?であったろう?!そして、その「尾輿(大連)」と「稲目(大臣)」の(兄弟)関係は、その子「守屋」「馬子」にも引き継がれたが、「丁未の変」により、「守屋」が「馬

子」に攻め滅ぼされたことになっている（ただし、この時「物部氏」自体が滅亡した訳ではない！）。

なお、この「丁未の変」の場所が、「記紀」によれば「近畿河内（渋川?）」となっているが、兼川説によれば、九州（筑前?）となっており、まったくの相違があるが（ある意味、そうなるであろう?!）、騒乱?の本質は、物部氏と蘇我氏の確執（単純に言えば、血族の争い?通説では、仏教導入に関わる諍いとされているが?!）にあることは、言うまでもない?!

ということで、お気づきでもあると思うが、兼川氏の（九州）倭国説は、上記のように、九州地域一点張りで、折角「半島（百済王統）」と「列島（倭国王統）」の「相互越境の関係」を暴かれている?のであるが（だが、このことだけでも、物凄い発見であり、真相解明にとっては、まさに飛躍的な前進を遂げるものである!）、もう一つの?「九州（王統）」と「近畿（王統）」の、ある意味、彼が唱える「相互越境の関係?」については、ほとんど触れられていない、と言うか、視野に入れられていない?!

もちろん、いわゆる「九州王朝説」に与されているので、その「九州王朝」の実在と、それ故の、「記紀」及び通説への批判（建設的?）ということが、その指摘（研究）の立脚点であろうが、私からすれば、甚だ非礼ではあるが!、誠に残念であると言わざるを得ない?!

とは言え、ご本人が意識されているかどうかは分からないが（おそらく、自覚はされている?!）、「九州（筑紫）倭国」が、豊国（豊前）にあった「豊国倭国（秦王国?）」と、まさに「相互越境的に」関係していたことは、鋭く?指摘されているが（これも、重要な指摘である!）、実は後者が、まさに「近畿倭国→日本国」に繋がっていると考えられるのである?!

その「豊国倭国」と「近畿倭国」が、「記紀」によってないまぜにされていると言え、その通りなのであろうが?、「記紀」が、すべて、その「豊国倭国」の治績を、「近畿倭国」の治績に盗作・改竄したということでは、決してないということである?!いずれにしても、その辺りの、さらなるアプローチがあれば、まさしく「我が国古代史」の解明に、さらに近づくものになるのではないかと、いうことでもある?!

こうしてみると、改めて「物部氏」や「蘇我氏」が、我が国古代史の主役?であったことは間違いなく、「記紀」は、そのことを隠している、否、完全には隠しきれないで（それはそうであろう?!）、至る所に、彼らの存在・活躍ぶりを暗示はしているのである（物部氏の場合は、いわゆる「神話」の中で!そして、蘇我氏の場合は、「大悪者」として描いてはいるが、その「代償（罪滅ぼし?）」としての「聖徳太子」伝説を仮構して!）?!とにかく、このような視点（考察枠組）で、「記紀」が示す「物語」を見てみると、かなりの真実が見えてくるのではないだろうか?!

（7月7日）

58 「神武東征」は、九州からの2回?の近畿進出を投影させている?!

ところで、「記紀」に言う「神武東征」が、それ自体としては創作（虚構）であったことは、言うまでもない?!これが、以前にも述べたように、我が国（倭国）の建国（→大和王権の樹立）を、ある意味美化ないしは神秘化?するためのものであったということであり、その動機（目的）は、いっばしの伝統ある独立国?として、その歴史を古きものにするための、一つの便法（虚飾）であったということである?!

だが、それが、まったくの絵空事ではなかったことは、明らかであろう?!それは、各地に色濃く?残る関連史跡・伝承の存在からも類推されることではあるが、とにかく、あれだけの移動経路と物語を、まったくのゼロ（無?）から創作するなんていうことは、たとえ空想の天才がいたとしても、事実上は考えられないからである?!

そこで考えられるのが、史実?としては、別々の「近畿・大和東進」、つまりある氏族（勢力）の西から東への進出・移住譚であったものを、あのような、一つの「神武東征譚」に創り上げた（膨らませた?）ということか、あるいは、複数の、そうした、ある氏族（勢力）の西から東への進出・移住譚を集めて、これもまた、一つの大きな物語に集約（統合）させたものということである?!

もちろん、それらは、それを敢行した関係氏族（勢力）の口伝や書き物から構想（取捨選択）され、書き上げられたものではあろう?!したがって、そのことが、例えば、『古事記』と『日本書紀』における、所要年数の違いや寄港地（での出来事）の違いをも生むのである?!

ただし、そのことと、そこに描かれている「東征?」自体の有無あるいは物語としての一致性とは、まったく次元の違う話となってくる?!どういうことかと言うと、「記紀」の共有認識（意図）としては、大和建国のための「神武東征」を、まさに「事実として、あったもの!」として描こうとしているということである?!

すなわち、西（九州）から東（近畿・大和）へと、自らの先祖達が移動（進出）してきたということ自体は自明のことであり、その記憶（認識）は、まさに彼らの脳裏に、しっかりと刻まれていたということである?!否、そのこと自体を否定（捏造）することは、まさしく遠い先祖への冒瀆であり、背徳ともなると考えていたということでもある?!

とは言え、やはり細かい事実それ自体（核心部分?）は、明らかにはしたくなかった?!否、そこまでは分からなかった?!何故なら、自らの、直接の先祖は、随分後からそこに参画?してきた（ある意味乗っ取った?!）人達であり、その建国のプロセスを構築したわけではなかったからである?!

いずれにしても、記紀編纂者達には、そこでの多少の異同は、ある意味どうでもよかったのであり（直接の関係氏族・勢力にとっては、譲れないところもあるに

はあったであろうが?!)、とにかく自らの遠祖達が、九州から近畿・大和に進出・移動していたという事実?を記せば、それでよかったのである(広い意味では、自らを、彼らの子孫であると位置づけていたということである?)?!

とまあ、以上は、私の、かなり大胆な仮説(妄想?)ではあるが、ここでは、他人の考察(多くの人が言及している?)からの援用とはなるが、その物語の可能性と、その素材?となった史実?として、二つの「東征譚」のことを、少し紹介しておきたい(→「鴨着く島」: kamodoku.dee.cc)。ただし、その二つの東征譚の細かい史実?については、まだまだ明確には分かっていない?!

まず、その一つが、『古事記』記載の日向出航(2世紀半ば。倭国大乱の直前?)の物語であり、所要年数16年、古日向(曾於)投馬国(「倭人伝」記載国)?からの、王・手研耳^{タケシミミ}、すなわち神武の移動(第一次大和東征)である?!ちなみに、これについては、ここでも何度も披瀝している、南部九州の「タケツヌミ命」(八咫鳥→賀茂・鴨族)の東進のことであろうと思われる?!

もう一つは、『日本書紀』記載の北九州出向(3世紀半ば、260年頃?)の物語であり、所要年数3年余、北部九州・筑紫の「大倭?」盟主辰韓王「御真木入彦^{ミマキイリヒコ}→崇神」の移動(第二次大和東征)である?!

彼は、殷王朝由来の箕子の末裔であるとされているようであるが、247~8年頃?、辰王である彼が、辰韓の地から糸島地方に移動し、旧奴国系の国々と連合して「大倭」国をなしていたが、南の狗奴国の攻撃に手を焼いていた「女王国」を保護国化し、狗奴国の北進を食い止める役割を担っていた?!

しかし、魏が滅び、晋(司馬氏)の建国となり(265年)、それが、まず辰韓の危機となり、王族達は倭国へ移動。そして近畿大和へ移動した、そういうこととされている?!そして、先に入っていた、第一次大和王権を駆逐したということである(それが、武埴安彦・吾田姫の叛乱、そして丹波に逃げた「クガミミノミカサ」の平定譚?)ということである?!

ただし、これについては、かなり後のことでもあり、この「神武東征」の素材となり得るかという疑問はある?!だが、一つの可能性(素材として採用された?)としては、残しておくべきではあろう?!

もう一つ、「応神」の東征もあるが、それは、やはり上記二つの「東征」とは、直接的には繋がらないであろう?!もちろん、時期的な問題もあるが、「記紀」に示されている「東征」の骨格は、いわゆる「大和纏向」の出現期のことであるからである?!強いて言えば、記紀編纂者達が、言わば、遠祖達の二度の東征を追認する形で(もちろん、移動したことは間違いない!)、その正統性?を投影させたということであろうか?!

なお、念のために、人(勢力)や文化の移動が、すべて、こうした西から東へということではないことは、最後に確認はしておきたい?!

(7月21日)

59 さらに大胆な「東征仮説」?!関係氏族（勢力）のネットワークの軌跡?!

ちなみに、もう一つ、さらに大胆な「神武東征仮説?」も考えられる?!それは、かの関裕二氏の仮説?の敷衍ともなるが、第10代崇神天皇の事績の一つであるとされている、いわゆる「四道将軍の全国派遣」（「大彦」を北陸道に、その息子の「武渟川別」を東海道に、そして、「吉備津彦」を山陽道に、「丹波道主」を丹波道に）の物語から類推?されることである。

関氏によれば、その物語は、史実的には逆の方向での話で、四人の人物（勢力）が、それぞれの地域から大和（纏向）に集結してきたこと、すなわち4つの地域（勢力）の結集によって、初期大和王権（纏向祭政都市）が実現したことを示すものではないかということである?!

つまり、関係していた地域（勢力）とのつながりを、逆に、こちらから出かけていって、その支配下に収めたというような構図で描いたということである?!もちろん、最終的には、近畿・大和において、そうした支配・被支配関係ができていたからこそ、そうした捏造?も可能であったということではある?!

いずれにしても、その手法（実際とは反対の動き・関係を示す!）が、まさに「神武東征譚」にも応用?されているとしたら（大いにあり得る?!）、さらに大胆な「東征仮説」?も、それなりに支持されるものともなるであろう?!

すなわち、「記紀」の「神武東征譚」に示されている地域（勢力）への寄港・進出は、まさに支配・被支配あるいは同盟の関係の軌跡を、近畿・大和への集結という形に反転投影させて、それを跡付けさせようとするものではなかったのかということである?!

しかも、それを、時代的には相当前の話として、その上、それらの地域（勢力）との関係を、一人の人物（勢力）が創り上げたというような虚構話にしてということである?!

とすると、例えば日本武尊ヤマトタケルノミコトの、九州あるいは出雲の征討譚（ただし、『日本書紀』には、彼の、出雲征討譚はないが!）、そして東海・関東への東征譚は、そうした大和王権の拡大・他地域への進出を、ある一人の英雄譚として、再構成（脚色）しているということにもなる?!

他にも、九州関係で言うと、景行天皇の九州巡行（熊襲征討）、さらにはまた、仲哀・神功皇后の九州・新羅遠征譚も、それに該当する?!

だが、もちろんそれには、何度も言うようであるが、確実に?モデルあるいは題材となった人物（勢力）がいた、あるいはまた、その話の元（ネタ）となる出来事・事件があったことは、おそらく間違いはないであろう?!これもまた何度も言うように、まったくのゼロからは、何も生み出せないからである（→火のない所に、煙は立たない?）?!

以前示したように、それは、おそらく南九州から近畿・大和に移動（移住?）していた「タケツヌミ命」、すなわち「賀茂（鴨）族」の長、あるいは宇佐、国

東半島、遠賀川河口域の海人族（宗像族 or 物部氏？）、さらにはまた、瀬戸内海に進出していた海人族（安曇族→大三島→大山祇？→住吉族）の話であったと思われるのである?!

ただし、彼（ら）が、すべて「東征譚」に出て来る場所（地域）を經由（居住？）したのかについては、かなり怪しいのではないかとも思われるが、少なくとも、当時の近畿・大和と、何らかのつながりをもって（もたされて？）いた地域（勢力）が網羅されていたとは言えるであろう?!

要は、それによって、大々的な建国の版図が、最初からそこにあった（出来ていた？）というようなことを、示そうとしたのではないかということである?!だが、もちろん、記紀編纂者達の母国？である朝鮮半島（百済を含む南部一帯）のことは、直接には（ここがミソである?!）示さなかったということではある?!それを示せば、ある意味すべてのことが露呈するからである?!

ということで、神武東征をはじめ、近畿・大和からの人（勢力≒兵力）の派遣（移動）話は、実際は逆向きの方向（動き）を示すもので、端的に言えば、関係地域（勢力）のネットワーク化の軌跡（同盟あるいは支配・被支配の関係樹立）を、総合的に（都合よく？）描いたものとも言えるのではないかということである。

一方、こうした中で、吉備勢力（物部氏？）が、鉄の流通による利害のために（北部九州の独占を阻止する?!）、近江を中心とする「丹波たにはには勢力」（近江・尾張・越・丹波・丹後・出雲?!）と和合し、三輪山麓・大和纏向に一大拠点を作り、そこに集結したという、関裕二氏の指摘（考察）がある（実際に、吉備の主導で成立した要素・痕跡が数多くある!）!

それが、言わば「第一次大和王権（「三輪王朝」と呼ばれる）」であり、そこへ、南部九州から、神武勢力（多分、実体はタケツヌミ集団?!→八咫鳥・鴨族?!）が進出してきて、彼らは、出雲（「大物主」）勢力と融合し、これも、言わば「第二次大和王権（「葛城王朝」と呼ばれる）」を確立したということである?!

なお、上の「第一次大和王権（「三輪王朝）」は、前号（58）で紹介した、『日本書紀』記載の北九州出向（3世紀半ば 260年頃？、所要年数3年余、北部九州・筑紫の「大倭」盟主辰韓王「御真木入彦ミマキイリヒコ→崇神」の移動→第二次大和東征）と重なってくる可能性もある?!

つまり、247～8年頃？、辰王であった崇神が、辰韓の地から糸島地方に移動し、旧奴国系の国々と連合して「大倭」国をなし、南の狗奴国の攻撃に手を焼いていた「女王国（邪馬台国）」を保護国化し、狗奴国の北進を食い止める役割を担っていたが、魏が滅び、晋（司馬氏）となり（265年）、それが辰韓の危機となり、王族達は近畿・大和へ移動。そこで、先住の「長脛彦ナガスネヒコ」集団を従え、「第一次大和王権（「三輪王朝）」を樹立したという話である?!

ここに示されている内実や崇神自体の素性は、実際はまだまだよく分かっていないものではあるが、なかなか興味深い一致である?!

（7月22日）

60 一応最初の「旅」は、これで終わる?!次なる「旅」は、オリジナル旅行?!

ついに、私の、この「古代史の旅」も、60号を迎えた!一年余に亘る悪戦苦闘の連続ではあったが、我ながら、よくやったものである?!自画自賛とは、まさにこういうことを言うのであろうが、本当にそう思う?!しかしながら、やはりそのほとんどの題材(モチーフ)が、まさしく他人(先駆者・先行者?!)の考察・研究成果からの借用・上乘せ?ではあったので、それなりの気恥ずかしさや申し訳なさを感じてのものではあった?!

とは言え、たとえそうではあったとしても、可能な限り自分なりに、それはどういうことなのか、それが何故、どのように大事なのか(史実と言える理由・根拠となるのか)を、ほとんど恣意的?、しかも、アットランダムではあったものの、鋭意チャレンジしてきたことは事実である?!

だが、それはともかく、途中でも述べた(気がついた)が、やはり1号1頁という書き方では、論の展開に無理が生じることも多く(説明不足となる?!)、読む側にとっては、それが、どういうことを意味するのか、しかも、ほとんど一貫性がなく?、その意味では、何を書いているのか、まったく分からなかった(興味・関心が持てなかった?)とも言えるであろう?!

もちろん、これまでは、これは、あくまでも私の「内なる旅」であり、たとえ読者の方が読まれるものであったとしても、私の個人的な世界へのお付き合いという意味合いの方が強かった、と言うより、まさにそれであったことは、素直に名状しなければならないであろう?!

いずれにしても、折角ここまで来たのだから、これからは、ある意味私の「オリジナル旅行」という形で、この「古代史の旅」の発展形を書いていきたい、今、改めてそう思っている次第でもある!

それが、具体的にはどのようなものになるのか、今のところ、まだ明確とはなっていないが、大きくは、これまでの4人の方の著作物(1つはHP)を、これまで明らかにしてきたこと(実際は、したかったこと?)を下に、それぞれ照らし合わせながら、そこから新たに見えてくる、さらに大きな「我が国古代史」の真相模様?を、解明していければと考えているわけである?!

以下は、その4人(の著作物)の所論の、私なりの解釈・要約である。

・関裕二『(数々の著作物)』(列举不能?!)

これは、余りにも冊数が多く、ここでは一つひとつ紹介のしようもないのであるが、彼のモチーフは、藤原政権(不平等)が、その前の政権担当者であった「蘇我氏(→上宮王家)」を卑劣な手段(弑逆)で葬り去り、そのことを含め、自らの素性や来歴を隠し、天智亡き後、天武に一時は実権を握られたが、その皇后持統及びその妹元明(草壁皇子妃)に取り入り(唆して?)、天照大神を皇祖神とする「万世一系」の皇統譜を創り上げ、藤原政権の盤石化、永続化を図った?!そして、その悪事、嘘?がバレないように、『魏志倭人伝』(邪馬台国や卑弥呼・台与等のこと)や『宋書』(倭の五王のこと)

のこと等も視野に入れ、「神話」を創作したり、重要事実を換骨奪胎させながら、その真相を闇に葬っているという指摘（仮説）である！「記紀」（とりわけ「国史」としての『日本書紀』）は、そのための「テキスト」でもあったということである。

・兼川晋『百済の王統と日本の古代 <半島>と<列島>の相互越境史』（不知火書房、2009年）

これは、このシリーズでも度々紹介（援用）させてもらってきたが、端的に言えば、（九州）倭国の存在と、その（九州）倭国が、少なくとも8世紀初頭までは、我が国を代表する主権国家（筑紫倭国と豊国倭国の櫛魯制国家？）であったことを、（九州）倭国年号の实在という脈絡の中で実証されている?!特に、そこにおいて特筆されることは、その（九州）倭国が、『宋書』等に示す「倭の五王」の国のことであり、しかも、その王族が、百済（扶余→高句麗と同族?!）からの渡来者であったこと（そこには、三系統の王統あり!）、そして、その後の倭国の皇統譜は、その百済（三系統の王統譜）との「越境的人事交流」?によって形成されてきたこと等を明らかにされている?!まさに、括目に値する指摘（研究成果）である?!

・林修（←石渡信一郎）『応神=ヤマトタケルは朝鮮人だった 異説日本国家の起源』（河出書房新社、2009年）

この、林氏（←石渡氏）のものは、結果的には?、兼川氏の百済系王族の渡来と同じであるが、その王族の中でも、いわゆる「応神（天皇）」と「継体（天皇）」となった、二人の百済王族（「藤」or「昆支」と「軍君」）に着目して、彼らの末裔達が、その後の我が国を創出してきたということ、指摘されている?!加羅と百済からの、新旧2回の渡来集団が、古代日本国を建設したという指摘（仮説）は傾聴に値するが、兼川氏のような倭国九州説は採っていない?!そこが、何とも悩ましく、恨めしい?!ちなみに、最大の違いは、「応神」を「昆支」とするかどうかであるが、「軍君」を「継体」とすることは同じである。

・「鴨着く島」（kamodoku.dee.cc）

これは、偶々HP上で見つけたものであるが（他にも、幾つか興味をそそるものがあるが、まだまだ十分には咀嚼できていない?!）、私が考えている「古代史の実像?!」に、大いに援用できるものであるように受け止めている?!特に、南九州大隅地方からの「賀茂（鴨）族」の近畿・大和移動の話は、「神武東征」（これ自体は創作?!）と関わる重要な史実であるように受け止めている?!本当に、名もなき?凄惨な人達が、HP上にはいるものである?!

この他にも、菊池秀夫『邪馬台国と狗奴国と鉄』（彩流社、2010年）、斎藤忠『あざむかれた王朝交代 日本建国の謎』（学研パブリッシング、2011年）／『消された日本建国の謎』（学研パブリッシング、2013年）等があるが、適宜活用させてもらいながら、新たな真相解明に向かいたい!

（7月22日）